精神分析

第二卷第四號

昭和九年四月

文學研究號

（口繪）K・マンスフィールド寫眞肖像。川端龍子氏作『愛染』

研究

——（裏面に續く）——

東京精神分析學研究所出版部

昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和九年三月廿五日印刷納本
昭和九年四月一日發行 毎月一回一日發行

K・マンスフィールド肖像

川端龍子氏作『愛染』

ユングの文藝觀

長谷川誠也

（はしがき）ユングが、一九二二年五月、チュリヒのドイツ文學會において講述した「解析心理學と詩藝術との關係について」の要旨は、私の著『文藝と心理分析』中に紹介してあるから、ここに掲げるものと共に一讀されるやうにお願ひする。これは「心理學と文學」と題して、彼が一九二九年に發表したもので、イギリス譯は一九三〇年に公にされ、次いでベインズ編纂、英譯ユング論文集『たましひを尋ねる近代人』（一九三三年出版）中に納められてゐる。なほ、左の一文中、括孤内の語は、すべて私の附記したものである。

１

科學も文學も共に心理の產物であり、心理學が心理過程の研究である以上、この學が文學を研究することは極めて當然である。さうして、その研究は、一方、藝術品の構成に關し、他方、藝術的に創造的である人物の要因に關するものである。この二つの研究は、根本的に異ならなければならぬ。藝術品の場合には、明白な意圖をもつて意識的に構成されたもの、卽ち截然と限定された具體的成品の心理學的解剖であり、藝術家の場合には、その人の心理の研究、卽ち創造的である獨自の人格の分析である。この二つの研究は互に密接に關係し、かつ依據するものであるが、一方の研究をもつて他方の問題を解決し得ると思ふならば勘違ひである。もちろん、藝術家の心理狀態を研究した結果をもつて、その人の創作を解說し得る點もある。また、その反對に、創作品から藝術家に說き及ぼすこともできる。しかし、それらの結論は決定的でない。例へば、ゲーテと彼の母との關係を詳細に研究するならば、『ファウスト』の或點を解說し得ることもあらうが、それだけの材料に據つて、この大作の創造された由來は分からない。また、その

反對に、この創作を解剖した結果に據つて、作者の人格を推定することもできない。

心理學の現在の狀態では、物理學や、化學に見るやうな精確な因果關係を打立てることができない。心理・生理學上の本能と反射運動との方面ならば、因果律の觀念をもつて、疑惑なく研究を進めうるけれども、心理生活の始まる點からは、今のところ、出來事の推移の記載をもつて滿足しなければならぬ。心理過程は、非常に複雜であるから、その研究に因果律の觀念を用ゐることは困難である。研究者は、或一つの心理過程は「必然的」であると指定することを愼しまなければならぬ。若し研究者が、藝術品や、藝術家の內に、原因結果の連絡を闡明しようと專一に努力するならば、藝術研究といふことは崩れて、彼自身の科學の特殊部門が設けられることになるのだ。心理學者は、複雜な心理の間に、因果關係を研究し、かつ實證しようといふ要求を拋棄しないだらうが、さやうに頑張ることは、却つて心理學の存在にとつて不利である。また、たとひいかほど頑張つて見たところで、その要求は十分に滿たされるものではない。なぜなれば、生活の創造的方面――その明白な現れは藝術である――その過程は總ての合理的公式表示を無效に歸せしめるものであるからだ。刺激に對する反應は、合理的に說明されやうが、單純な反應作用の絕對的對立である創造的作用は、人間の理解を滑りだすものだ。創造的過程は、その現れる有樣を記述されるだけのもの、人はそれを漠然と感得するけれども、全部を摑むことはできない。心理學と藝術研究とは、互に助け合はなければならぬが、一方が他を無視してはならぬ。心理學の重要な原則は、心的出來事は推定されるといふことであり、藝術研究の重要な原則は、心的產物は、藝術品であらうが、また問題の藝術家その人であらうが、獨自の或物であるといふことである。兩原則は、相對的であるが、共に確實なものである。（藝術品を特殊な意識的產物と見よと言ふと共に、一つの心的過程に捉はれるなと警告してゐる處に、ユング說の包容性を覗ひうる。）

一　藝術品について

文學品に對するには、二つの異なつた研究態度がある。一は心理學的研究であり、他は批評家としてのそれである。この二つは全く相違するもので、後者の重要視する處は、前者にとつては、全く無關係であるかも知れぬ。心理學者にとつて、大いに興味あるものは、文學的に見て、あるひは價値の疑はしいこともあらう。所謂「心理小説」などは文學者が考へてゐるほどに、心理學者にとつて有用な材料ではない。なぜなれば、さやうな小説それ自身は、心理を解説してゐるものであつて、これについて心理學者が何事かを言ふとすれば、その批評か、あるひは敷衍くらゐのことである。それならば、心理學者にとつて、收獲の多い小説は何にか。それは、作家が何等の心理學的説明をも加へてゐない小説である。心理小説にあつては、作家が幾多の素材を、心理學的に整理し、解説してゐるから、心理學者が開拓すべき領土は極めて狹隘である。これに反して、作家が心理學上の事柄を考慮するところなく、あるひは、無意識的に心的過程を基礎として、ひたすら事件の推移變動を書いてゐる場合には、心理學者の探檢すべき區域が甚だ廣い。以上は、小説について言つたのだが、劇についても同樣である。『ファウスト』第一部は、まさに心理學的に書かれたもので、作その物の內に説明が含まれてゐる。これに反して第二部は、想像的材料が餘りに豐富で、詩人の整理、統制、構造の能力の圈內へ溢れ出してゐる。そこには內在的説明はなく、殆んど一行一行が、讀者の解説を要求するほどである。實に『ファウスト』は、二種の文學品を、能く代表するものである。

上記の區別を明晰にするために、文學には「心理學的」と「幻想的」との二種があると言へばよからう。心理學的のものは、文字の示す通りに、作家が意識狀態を解説するものである。普通の人は、これに氣付いてゐないが、しかもこれを見れば理解し得る意識の內容を揭げ出して明らかにするのが、この種の文學であるから、心理學者が、それに向つて言ふことは、おのづから限定される。もちろん、幻想的のものは、材料は廣漠たる範圍から採取されるけれども、その表現は心理學的會得の埒外には出ない。これに反して幻想的のものは、頗る奇怪、異形、變態、亂雜、狂妄、鬼魔的であつて、普通の價値標準や、美的形式を超越してゐる。それは、人間以前と我々とを隔てる時代か、あるひは我々と超人の世界とを隔てる時代の深淵を想はせるもの、無邊無涯の暗黑領土から渡來するもののやうに想はれる。人生の表面

に現れる事象は、いかに深遠であると言つても、普通の感性や、理解力をもつて會得することができる。これらの材料を取扱ふ作家は、コスモスと我々との間にある幕を引裂くことはないが、普通の人性の力の及ばない材料を取扱ふ文學者は、この幕を引裂いて、我々に名狀し難い深淵を瞥見させるのである。彼の幻想は原始的と言つても宜しい。かやうな材料を取扱つた例は、ダンテ、ニーチェ、ワグナー、スピッテラー、キリアム・ブレィク、フランシスコ・コロナ、ボエメ、ハガード、ベヌワー、クービン、マイリンク、ゴエツ、バールラハ等の作品中にある。（これらの文學者の著作は、繁雜を恐れて、ここに揭げない。これを知りたいと思はれる人は、お問合せ下されば、お知らせ致します。）

心理學的作品に關しては、その材料は何か、また、その意義は何か、と言ふやうな疑問はおこらない。それは明白であるからだ。ところが、幻想的作品になると、かやうな問題が生起する。なぜなれば、その材料は、いかにも奇怪千萬、混沌、錯雜たるもの、日常生活の人生とは似寄りもつかぬもの、覺醒時の心理では、とても解釋し得ないものである。だから、讀者のうちには、この種の文學を嫌ふ者があり、批評家中にも、これに手を附けない人もある。しかし、ダンテとワグナーとが、かやうな作品に接觸する道を開拓したことは爭はれぬ。彼等の幻想的經驗は、歷史と神話との衣裳を着けてゐるけれども、それらは作品の原動力となつてゐるのではない。ダンテは一そう根元的であり、かつ幽玄な意義ある經驗を表現するために歷史上の事實を借り、ワグナーは、同樣な理由で神話を借りたのである。ハガードの作品は、物語の怪奇を工夫するために力を入れ過ぎた跡もあるが、しかもその物語は、根元的な或經驗を表現するための手段に外ならないから、要義は奇譚以外の幻想的經驗にあるのだ。

幻想的文學の材料の晦冥曖昧を見ると共に、我々は、それが果して自然に發生したものであるか否かを疑ひたくなる。あるひは、作家が故意に曖昧なものを持ち出したのではあるまいか、と考へることもあらう。言ひ換へれば、作家は、彼の個的な、源泉的な、基本的な經驗で、しかも表向きになし得ないものを隱蔽するために、殊更に奇怪な、異樣な形狀を捏造するのではないか、原始的幻想と見なすべき文學も、實は作家の內密の個的經驗を、巧みに變裝さ

せたものではあるまいかと。かやうに考へることは、藝術品の研究を去つて、神經病的藝術の研究へ一歩踏み入るに同じい。また、幻想的文學中に、不健全な人の空想と同性質の材料が見出される間は、かやうな研究方針は正當であると言はねばならぬ。しかし、この反對の事もまた眞實である。即ち、精神病者の產出するものゝ內にも、天才の作に期待されるやうな多義があるのだ。だから問題は、幻想的藝術の材料の起原は、作家の陰密の經驗にあるか、あるひは、その以外に特殊な源泉があるかと言ふことに歸着するのだ。（ここに至つて、フロイド說とユング說とが別れるのだ。）

幻想は個人的經驗から派生するものだと主張するならば、幻想は眞實の代理者であると結論しなければならぬ。從つて幻想そのものは獨自の價値を失ひ、さやうな文學の研究は、幻想そのものの檢討ではなく、作家その人の心理狀態を見ることにならざるを得ない。即ち、研究者は文學を離れて、人を主題とすることになるのだ。かやうな研究が重要であることは言ふまでもないが、同時に、文藝品は獨自に存在する權利を有してゐる、また個人的經驗の假裝では無いといふことを念頭に置かなければならぬ。幻想は獨自である。それは、普通の理智をもつて判斷し難いものであるにも係らず、獨得の意義を含有してゐるものである。

古今の幻想的文學を見ると、その內容は架空的であり、個人經驗の變裝であり、個人情熱の徵候であるとは思はれない。それは第二義的ではなく、本質的に意義を有してゐる。それは、不完全にしか知られてゐない事柄であり、また心理上の實在である。人は自己の經驗を明確に整理して安心を得ようとするけれども、その意識が統御し得る範圍の外に、不明な隱れた事柄があつて、直觀はこれを見取るのである。譬へば、人生には晝と夜との二面があり、前者の事柄は、萬事明白であるが、夜に屬するものは朦朧不明である。また、見樣によつては、夜の事柄を恐怖することから、科學と理智との武器が工夫されたとも言へるのだ。その人智の及ばない事柄、即ち詩人の幻想として現れるもの、直觀が瞥見するもの、それらを不眞實と見なすことは、不思議または神祕と言はれるものに接近するのを怖れるためであり、また、人文上の事實を無視することでもあると言つてよからう。

宇宙の曖昧な方面に接觸したものは、詩人ばかりではなかつた。昔から、宗敎の開祖とか、豫言者とか、神祕家とか言はれた人々は、みな何等かの不可思議な實在を認めたのだ。太古の人類も、既に朦氣ながらにこれを認めてゐた。また、今日の未開人の宇宙觀には、この神祕な部分が無くてはならぬのだ。我々近代人は、迷信や、形而上學を忌避し、頗る完全な、また統制し易い透明な世界を設定してゐるけれども、しかも、その間に、詩人が妖魔、鬼神、魑魅魍魎などの形を借りて神祕を啓示するのだ。これを有史以前の人類について見るに、その遺物には、極めて寫實的であるものと、象徵的であるものとの別がある。洞窟の壁に描かれた動物の繪のごときは、明らかに寫實的であるが、車輪に似た日輪のごときは象徵的で、何等かの心理事件を表現してゐるものだ。かやうな形狀は、車輪の發明された以前に描かれたものであるから、寫實的でないことは言ふまでもあるまい。さうして、かやうな象徵には、必ず祕密な意義が含まれ、トーテム同族は、この密義を祕藏しつゝ子孫に傳へるのだ。太古から種々の作法をもつて行はれる成年式といふものは、この密義を傳授する式典に外ならぬものである。密義は個人の情熱または慾望に基づくものではなく、全く宇宙の神祕を感得する心理に由來するのである。ギリシャ・ローマの神話とても同じことだ。それらは遊戲的に、あるひは假裝的に作られたものではなく、全く宇宙人生の神祕的玄義に基づいてゐるものである。だから詩人が、何等かの幽玄微妙な意義を表白しようとする場合には、神話へ戻るのだ。詩人は、平明透徹の事柄を、故意に晦澁ならしめるのではなく、多趣多樣、深奧無限の心象に、とにかく何等から形態を與へようと試みるから、出來上つたものは異樣な姿となるのだ。

心理學は、この玄妙な心象を說明することはできないが、さやうな諸相を比較して、論述上の術語を掲げることはできる。即ち、幻想に現れるものは集合無意識であると。集合無意識とは、心理に遺傳された或傾向の過程であつてこれから意識が發達するのだ。人體には、進化階段の初期のものが傳へられてゐるやうに、心にも系統發生學上の法則に合致するものがあるのだ。さうして、この心理は、意識の働きが弛緩する時に、表面へ出て來る。例へば、睡眠時、痲醉藥を用ゐた時、あるひは精神錯亂の場合などがそれだ。また、この無意識から發生する心象は、極めて原始

的な形態をとることもあり、あるひは、近代的服装を選ぶこともある。さらに、幻想的文學を研究する場合に、見落してはならぬ重要な點は、集合無意識の發現が、意識的態度の補償をなすことである。意識の働きが偏倚し、不健全になり、危險性を帶びる時には、集合無意識が動いて、心の進行に均衡を保たせるやうにする。この事は、夢想を解剖する場合に、屢〻見られる例である。（ユングの集合無意識說については、私の著『文藝と心理分析』の第八章を參照されたい。ここに誌面の都合上、これを詳細に解說し得ないのは遺憾である。）

大文學の內容悉くを、作家の個人的經驗に還元することは、この文學の重要な意義を拂拭するやうなものだ。大文學といふものは、人類の生活から發生するものである。これを作家について言へば、その作家と時を同じうする人類の生活から、創作の種子が拾ひ出されるのだ。どんな時代でも、完全無缺ではなく、あだかも一個人のやうに、幾多の缺點をもつてゐる。その意識は健全のやうに見えても、實はさまざまな偏見、邪思、病弊をもつてゐる。ここに集合無意識が動いて補償の作用をなす。さうして、それらは詩人の創作に現れるのだ。だから、大文學は、その創作された時代の人々に對する使命の役を帶びてゐると言はれるのだ。前記した諸文豪の著作は、實にかやうな特性を含蓄してゐる。彼等の作は、斷じて個人の祕密な經驗や、慾望の變裝ではない。彼等は個人的に語つてゐるのではない。その言語は數千萬人の聲であつて、それは深遠な、原始的な特殊意識から發生し、かつ時代の變遷を豫言するものである。

二　詩人

創造といふことは、自由意志と同じやうに、一つの機密であつて、心理學者は、その現れ方を記述することはできるが、これを合理的に解釋することはできない。創造する人は謎のやうなもので、種々の方面から解答を出すことはできても、いづれも十分といふ處まではゆかない。と言つて、心理學は藝術家と藝術とを問題としないわけにはゆか

ない。そこで、フロイドは藝術品を知る祕訣は、作家の個人經驗をたどつて見る所にあると考へたのだ。彼が、神經症の原因は心的方面にあると見、かつこの病者の幼時の經驗を重要な原因と見たのは、大發見であると言はなければならぬ。神經症の造るものも、藝術品も、共に心的生活における結節あるひは錯綜で、コムプレクスと稱せられるものに起原をもつてゐる方面のあることが會得される以上は、フロイドの見方に從つて研究を進めれば、有效な解釋を立て得ると言つてもよからう。なほ、ランクや、ステーケルの同樣な研究に、重要な結論のあることも明らかである。もちろん、かやうな考方は、斬新ではないが、コムプレクスの影響する範圍の廣いこと、並びにこの影響が奇異な現れ方をする事とを闡明したのは、フロイド派の功績に歸さなければならぬ。

しかしながら、フロイド說を採るには、條件附でなければならぬ。個人的決定素なくして藝術品が創造されるとは考へられないから、さやうな決定素を研究して、藝術の一面を明瞭にする點までは、彼の說を取入れて宜しい。しかし、かやうな研究をもつて、藝術品の全部を說明し得ると主張するならば、斷乎として反對しなければならぬ。藝術品に入り込んで來る個人的特性といふものは、その重要な部分となるものではなく、また、さやうなものゝ研究に沒頭することは、藝術といふものから遠ざかるに同じい。藝術品の肝要な部分は、個人的生活を超越してゐる處にあるのだ。藝術の世界にあつては、個人的方面に制限を加へなければならぬ。いや、さやうなものは、むしろ有害であるのだ。もちろん、フロイド派の言ふやうに、藝術家といふものは、殆んど例外なくナーシスティクであらうが、それは藝術家を人として見た場合の話で、彼を藝術家として見る場合には當て嵌まらない。人が藝術家としての資格を維持する時には、オート・エロティクでも、ヘテロ・エロティクでも、エロティクでも、なんでもなく、全く沒個性であり、非人間的であり、仕事そのものである。

創造家といふものは、矛盾する二性を具有するもの、もしくは兩者を總合してゐる人である。卽ち、一方には個人的生活があり、他方には沒個性の創造的過程があるのだ、藝術家は、人として健全あるひは不健全の性であることもあらう。さうしてその性格を研究する場合には、個人的決定素を探らなければなるまい。しかし、藝術家としての資

格を見る場合には、その創作品を研究しなければならぬ。創作する場合の彼は、非個人的な役割を勤めるのであつてその心的過程の性質は、客觀的に規定されるのだ。藝術といふものは、一種の推進力であつて、人を道具に使ふと言つても差支へあるまい。藝術家は自由意志をもつ人間ではなく、藝術は彼を通じて、その目的を達するのだ。人は、人として個人的な目的へ向ふであらうが、藝術家となれば、個性を抑へて、集合人と成る、卽ち、人類の無意識的心生活を取つて、これに何等かの形態を附與するのだ。さうして、このためには、普通人として享受すべき幸福その他萬事を犧牲にしなければならぬ事もあらう。

藝術家の生活は、二つの勢力の爭鬪である。卽ち一は創造的熱望、他は人として幸福、滿足、安定などの希望、この二つの衝突する生活が、彼の上に現れるのだ。人はみな心的エネルギーをもつて生れて來るのだが、何等かの力が强勢になると、このエネルギーを專有することになるから、心理の働き方は不平均になる傾きがある。別方面から言へば、心的エネルギーが或目的に集中すると、人間的な本能、慾望などを統制することが不可能になる。藝術家の場合においては、心的エネルギーが創造といふことに集中するから、彼の本能や、慾望は自己中心に勝手次第に動き出す傾きがある。藝術家が、とかく自己愛の人であり、我儘であり、交際を嫌ひ、世上の道德を無視するのは、そのエネルギーの殆んど全部が創造に集中してゐるからである。かやうに考へて來ると、藝術家の私的生活から、その藝術を解釋するのは不當であることが判明するだらう。藝術家を說明するものは、藝術そのものである。彼が創造のためにエネルギーを傾注し、生活の他面の流れを涸渇させてしまふのは、まことに遺憾である。

創造的過程は、子供の出生に似てゐる。藝術品は、母といふ無意識的深淵から生まれて來るのだ。創造的勢力が旺盛になつてくると、無意識の働きが强大になり、個人的意志の動く範圍は漸次に狹められ、意識的自我は、遂に埒外へ逐ひ出されて、事件の推移を傍觀するだけになつてしまふ。（アーノードが、ワーヅワースの詩を評して、自然がこの詩人の手を借りて書いたやうだ、と言つてゐる所は、創造的過程が意識的自我を驅逐する心理狀態を看取したからであらう。）だから、ゲーテが『ファウスト』を書いたのではなく、『ファウスト』がゲーケを造つたのだ。それ

ならば、このファウストは何者か。象徴である。象徴は、平明な事柄を語る寓意とは異なるもの、それは、明白に知られてゐないが、しかも奥深い根柢をもつて生きてゐる或物の表現である。ファウストはドイツ人の精神に生存してゐる或物で、ゲーテはその出生を助けたのだ。『ザラツーストラ』とても同じことだ。これらはドイツ人の精神に反響をおこさせる「原始的心象」あるひは「原型的心象」である。聖人、豫言者、救世主といふやうな心象は、文化の黎明期から、人の無意識内に發生してゐるもので、時代が亂調子になり、人間社會が危機に瀕する場合には、必ず出て來る。意識的生活が一方に偏倚するか、あるひは虚僞の態度をとる時には、殆んど本能的にかやう心象が現れる。個人の場合には、これが夢想中に現れ、時代で言へば、詩人または豫言者の幻想となつて現れる。かやうにして心理の均衡が保たれるのである。

詩人の事業は、彼の生存する時代の要求に應ずるものである。彼はその事業のためには、個人的生活の運命を顧みないで、ただその創造的過程に服從するだけだ。彼は創造する。しかし説明はしない。藝術品は、譬へば夢想のやうなものだ。夢は「何々を爲せ」と命ずることもなく、また、「これは眞理である」と主張することもない。それは、ただ何等かの形態をもつて現れるだけのもの、あだかも自然界に樹木が生長するやうなもので、そこに命令も、説明もない。さうして、これを解釋する者は、われ〳〵自身であらねばならず、これを爲すには、我々の心理が、創作家のそれと略ぼ同一の徑路をたどらねばならぬ。詩人の創造的過程から、或形態が發生するところを、我々自身の心理が經驗してこそ、初めて創作品と意識的生活との比較が可能となり、從つて何等かの結論が引出されるのだ。詩人にその創作品の意義を説明しろと賴んだところで、彼は返答をなし得ないこともあらう。彼は、個人的生活以外の生活過程の道具として働くのだから、自身の仕事を十分に理解せぬこともあらう。

藝術的創造と藝術の效果との祕訣は、「神祕的同契」の經驗を得る所にある。卽ち、個人としてではなく、人類として共同に生活すると云ふ經驗を感ずる所、個人の禍福よりも人類のそれが大切であると感ずる所、個人の心理生活の內には、一般人類と不可分の關係ある方面があると會得する所、そこに藝術上の創造と鑑賞との妙機があるのだ。

11

大藝術品が客觀的であり、超個人的であつて、しかも萬人を感動させるのは、かやうな經驗が基になるからである。詩人は、人として見れは、俗物であり、神經病者であり、犯罪傾向の強い人であることもあらう。また、さやうな個性の研究は興味あることでもあらう。しかし、それらを研究し盡したからとて、詩人の說明とはならない。(をはり)

(附記) ユングは、その心理タイプ說を應用して、クラシカルと言はれる性質は内向タイプであり、ロマンティクは外向型であると言つてゐる。この說は、彼の著『解析心理學』または『心理タイプ』中に述べられてゐるが、その見方の參考材料となつたものは、ヰルヘルム・オストワルドの著『偉人』(一九一〇年)であつて、この書中には、學者や、偉人を類別して、クラシク型とロマンティク型との二つにしてある。クラシクは自己の守る所に忠實であり、外界の事情に應ずることが遲緩であり、批評的であり、退引がちである。これに反してロマンティクは、外界に對する反應が迅速であり、熱情的であり、顧慮逡巡する所なく信念を發表もし、實行もする。だから、その感化力は、クラシクに比して強大であるが、クラシクの方は、後世になつてから認められるだけの完成の長所をもつてゐると。これを文學上の傾向に應用すると、クラシシズムは内向型、ロマンティシズムは外向タイプと言ふことになるのだが、それではどうも事實に合はない所があるやうに思はれる。だから『人生と藝術との無意識』(一九三二年)の著者ハーバートは、上記の正反對に、クラシシズムは外向的、ロマンティシズムは内向的と言つてゐる。むしろこの方が、文學上の二大傾向を、より能く說明するものではなからうか。もちろん、兩語の意味の取りやう次第で、どちらにでも贊成することはできるが、文學史家として立つ場合には、ハーバート說の方が穩當であらうと思ふ。クラシシズムの本體は、文學上の權威を飽くまでも尊重する所にあり、ロマンティシズムのそれは、個人の嗜好を押立てる所にあるとすれば、前者は外向タイプ、後者は内向タイプと見なければなるまい。ハーバートはなほ論述を進め、リアリズムは外向タイプの心理から發生するものだと言ひ、さらに現代は、内向タイプの心理の動きが旺盛になり、それが心理學的研究に現れてゐると書いてゐる。

近代文學の心理と技巧

北村常夫

近代文學の新人と看做される程の人は悉く新しい心理學の影響を蒙つてゐる。近代の心理學は精神といふものを、單純な結果を生む單一の劇的動作の言葉では充分に表現し得られないものと看做してゐる。精神とはいくら知的に定義しても、その定義の網から洩れる所のものである。近代乃至現代小說に於いて、謂ふ所の精神とは、これ迄の多くの小說作品の中で吾人に提供されたやうな簡單な實體ではない。近代心理學で言ふ精神とは、大きな流動狀の或は蒸氣狀の團塊である。それは吾人が因襲的に性格と呼んでゐる所のものの限界を遙かに飛越えた彼方に迄及んでゐる廣汎なものであり、亦、吾人の神經組織と有機體の中に、或は幼少時代や遺傳性の中に深く根を下してゐるものである。精神は思想——記憶と意識——の彼方に流れてゐるものである。それは一定で同性質のものではなく、絕えず變化し無限の色彩と注入物に滿ちてゐるものである。それ故、精神の表面にはあらゆる種類の破片と浮木が流れて居ると同時にその下には水に浸つた丸太が隱れて居る、そして底は泥で、深海には章魚や海月やその他想像も及ばぬ怪物が棲んでゐる。精神は一個の個性ではなく、多くの中心に集結し、相互に衝突し或は相互の存在に無關心である多くの個性の集團である。故に大體、精神は輪廓の明瞭な實體ではなく、吾々が意識しえない程自然で卽時的な感情・反應の夢のやうな混亂狀態である。精神はあれこれの自我(エゴウ)に屬するものとして個性化されることはできない、それは吾々の民族に性に或は社會團體に共通な生命力の噴出物である。それ故吾々の精神の一部である意識が論理的にむじゅんなく流れるのは緊急な實際的必要に迫られた一定期間だけである。吾々の精神は大體、幻想的で氣紛れな觀念の聯想の

まに〳〵流れてゆくので、その行路を豫定することはできないのである。從つてかゝる精神を表現するに新しき表現法なり新しい技巧を要することは自然である。この技巧の新しい特徴は藝術上ローマン的と呼ばれるところのもの〻表現である。

新作家は、形式の統整の代りに、一見、氣紛れな變化と亂雜にして見當の付かぬものに赴く傾向がある。これが近代文學の形式上に顯著な解體（ディフォマリゼーション）の傾向である。前代文學の特徴がその單純性と統一性であるのに對し、近代文學の特徴はその多樣性と複雜性である。前者が限定された問題に集中する求心的傾向であるのに對し、後者は種々の方向に飛び去る遠心的傾向である。前者にあつて動作は繼續するが後者では斷續する。近代文學に動作の繼續がないといふのは劇的動作の繼續がないので、リズムの繼續はあるのである。このリズムの繼續はテーマの再發により、又は意識の流れの抒情的振動によりて構成されてゐるリズムの繼續である。卽ち新作家は劇的效果を求めずにリリシズムに似たものを求めてゐる。かやうな心理を表現するために新作家は感覺の印象に、連續的な感情に視點を置き、知的な論理的な感傷的な言葉を破棄しようとする傾向を持つのである。今假に心理學上から見ても種々な材料を含んでゐるD・H・ローレンスを取つてみる。

ローレンスの心理學

ローレンスの小說中の人物は型にはまつた一元的な精神の持主ではない。或る一人物は、衝動の相互交換によつて振動してゐる放熱の中心體である。從つてその人物の主要な關心は自己の環境ではなく、他の人物に對する感情であつて、しかも一人物の感情ではなく感情の相互作用である。ローレンスの意圖は根本的な生の衝動が如何に人間生活に具現してゐるかを示すことであつた。卽ち、生命力といふ地下水を意識生活の中に汲上げることであつた。だから小說中の人物は豫定の計畫を遂行するために、或は利害關係の相反するために生ずる劇的意匠構成のために、それ自體興味がある役者ではない。その作家は社會形式或は社會的政治的情熱にも興味が持てない。その人物は單に不思議

な精力の流れの噴出物であり、精力と宇宙の意志の保菌者である。劇的瞬間よりも、その瞬間を通過する過程に興味があるのである。ローレンスは心理學上から見てより本質的な根本的な二人の間に存在する知覺狀態を强調する。二人は夫々相手の範圍內に存在してゐる精神的實體であつて、愛憎の鬪爭に於て夫々二人を結合さす親和力を所有してゐる。二人は言はば電波を交換してゐる二つの放送局の如きものである。故にローレンスにとりて、愛は化學的親和力を思はす言葉で語られて居り、愛憎は道德的・感傷的・社會的な言葉では定義し得られぬ牽引力と反撥力であると看做されてゐる。『戀をしてゐる女』の中には、「彼から彼女に押寄たものは不思議な電氣の火であつた」といふ句があり、亦或る論文には、「女は空氣に響く奇妙な柔かな振動で、知らず知らず無意識に傳はり反響の振動を求めてゐるものだ。さもなければ、女は調子外れのぢやぢや言ふ疼痛的な振動で、傳はればその埒內のすべての人を傷けるものである。男も同じである。」この男女の振動は勿論「生の完成」のための振動であるから、ローレンスの心理學中、性の心理が重大な役割を占めてゐることは言ふまでもない事だ。彼の作中『虹』は特に性の心理に關する多量の研究材料を提供する。尙この外に近代心理學の專門語は用ひられてゐないが、愛による Self-maximation 及び transference（轉嫁）、Sublimation（昇華）、inferiority-complex（劣等コムプレクス）、等に言及した個所がある。性の心理に關心を持ち過ぎたローレンスは人物の主觀的經驗に囚はれ、その感情を意識するが、外部から傍觀する立場に立つても人物の見解を一貫して維持することが出來ず、作者は主觀的と客觀的見地の間を彷徨する。そしてその彷徨中彼は彼の心理學的理論卽ち一定の生の衝動に關する先入感で誤導される。『戀してゐる女』の中の二人の姉妹アースラとグッドランとを讀者が混同し易いのは作者が見地を無視し、中心點が絕えず移動するからである。彼の技巧は印象派のそれであり、色の點々と並置して塊の印象を築くことで、その塊の輪廓を描くことではない。從つて性格描寫は暗示的で、暗示が分らないならばその性格は理解できない。『私は木の葉でも何でもキラキラする細胞原型質を描いた。形の堅い所を描いたのではない。このキラ〳〵する所のものが「リアル」のもので、形は死んだ殼である。』このキラキラ描寫がローレンスの小說技巧に對する主要な貢獻である。

プルーストの心理學

プルーストのぶら〳〵歩きの自叙傳的年代記とも言ふべき『失はれし時を索めて』(一九一三—二六年)は、抽象的に概括する小說に對する一大警告小說である。心理小說といふ範疇がない時代には正しく小說の範疇にはいらぬものである。外面的形式から言へば、英譯の表題『過ぎ去りしものの思出』が示す如く、小說ではなく、回顧錄のよせ集めである。然しそれは小說家の賦性を悉く具備した人の思出の記である。しかも非凡な觀察能力を有し、感覺的印象に對し並外れて敏感であり、社會の微細な事柄まで登錄するに適し、その上心理分析に耽り、それを巧みに論議する敏感な人の思出の記である。或る目的に向つて急行せずに道草ばかり食ふやうな小說家はローレンス・スタンを除けばプルーストに始まつたと言つてよい。プルーストの目的は物語の途中にあたりて、心に浮んだ事柄、及び現在の知識をもつてする過去への反省を引きくるめた經驗全體を捕捉することであつた。作者とギルバート、ド・グェルマント伯爵夫人、アルバータンとの感傷的な關係によりて組立てられた大體の筋はあるが、ギルバートはスワンの妻の娘である故に、吾々はギルバートの來歷を知る前に先づ、スワンの來歷及びその他關係ある人の來歷を知らねばならぬ。かういふわけであるから、これらの傍系事件が萬卷的年代記の卷數を食ひつくすのである。然し亦、作者とスワンの場合の間にもテーマの關係はある。それ故その構成を知る鍵はテーマの精致な對位的進展である。このテーマの對位的進展から見るとき、プルーストを、オールダス・ハックスリ、アンドレ・ジイド、ワッセルマン、ドス・パソスと關聯せしめることは出來ると思ふ。これが亦ジョイス、ウルフの心理小說以外の一般現代小說にプルーストが關係を持つ唯一の點でもある。プルーストの心理學は感覺の心理から戀愛の心理に移るのである。隣の部屋の燃木の音や時計の音の感覺的心理描寫は殊に勝れたものである。プルーストの心理分析はどちらかと言へばペイターのそれに似てゐる。ペイターは感覺の分析と感情(道德的感情をも含め)の分析の中間に立つ、審美的印象を分析する。プルーストは戀愛に含まれた感情を分析する。プルーストの中には事件が急迫をつげる急激な動作の進行はない。緊張した懸

念、簡潔な感情がない。一言で言へば劇的作話がない。人物の意識を直接劇化しないから、そこに亦作者の哲學なりモラルが侵入してくることもない。この點が一般的に言ふと、フランス作家がその決定論と科學的客觀性愛好癖のために英國作家に優る點でもある。特にメレディスとかエリオットの如き英國作家は、行爲を指導し、生活條件を統整せんとする意志の力を信ずることが强いだけ、作中の人物をその意識のまゝに放任することが出來ないのである。性格の心理分析の過程に作者の哲學的道德的色彩が加はるのである。ジョイスの『ユリシーズ』の如き純然たる心理描寫にしても、なんだかそこに作者の哲學なり人生觀の如きものが看取される。そこへゆくとプルーストは心理のまゝに客觀的に描いてゐると言つて好い。然し亦逆に言へば、プルースト、ジョイス及びウルフの或る小說は心理に惑溺して、則ち幻想と感情の水底に沈潜したために、行動する意志が硬直病にかゝつて、人生を建設的に捕捉することが出來ないのだといふ非難を惹起するのである。劇的要素乃至プロットを犧牲にして登場人物の主觀的狀態を極致の構成要素に分析する此の手段は、吾々の主觀狀態に對する意識を强調し、この人物の感情に吾々を親しめ、リアリテイの印象を與へる點は心理小說の獨特の風貌であるが、熱烈なる活動の原動力が缺乏して終ふのである。ジョイスの『ユリシーズ』に於て、霧の如く濛々と立ち登る心理の湯氣を額に入れる框として日常の一日の事件はあり、ジョイス自身も『若き藝術家の肖像』で、「私は百萬遍も經驗のリアリテイに遭遇し、私の精神の鍛冶場で、未だ創られざる私の民族の意識を造りだしにゆくのだ」と言つて居るけれど、此の主義は彼自身の思想の喧騷とダブリン生活の一般的喧騷の中に埋沒して終ふのである。そして興味の中心は飽く迄、心理的一瞬の內容を大寫しに表現することである。言はば一瞬間の無限の擴長である。此の表現方法はシネマの大寫し（クローズ・アプ）と徐々寫し（スロー・アプ或はラレンティ）に類似してゐる。

アンドレ・ヂイドの『贋金造り』の中に次の如き句がある。「寫實派は〝人生の一片〟と言つた。この派の最大の誤謬は、その一片を常に同方面に、則ち時の方向に、長々と切ることである。なぜ横に廣く、底深く、切つてはいけ

ないのか。人はいざ知らず、私は少しも切りたくない。いゝかね、私はなんでもかでも此の小説にとり入れたいのだ。」ジョイスが『ユリシーズ』で試みたものは正しくこれである。彼は時の方向に於て事件が繼起するプロットを持つてゐない。全部の話が一日に限られて居り、その一日中で彼は横に廣く伸び、底深く心理の中に飛込んだのである。ヴァジニア・ウルフの『ダラウェイ夫人』も大體そうである。然し或る事件が夫人の心理の上だけではなく、群衆の一人一人の心理の上に波紋のやうに横に擴がる區別はある。一人の人の一定時の心理といふ一貫した持續はあるがそれを除き、事件の側から見ればたゞレヴュー式にパレード式に或はキャバルケード式に配列されただけに思はれるものがある。ジェイコブ・ワッセルマンの『世界の幻滅』及びドス・パソスの『マンハッタン・トランスファ』等がこれである。然しこれは心理の方に餘り關心がないからこゝでは論ずる必要はないだらう。(完)

科學的(精神分析的)文學批評論序說

大槻憲二

一

文藝を科學的見地から批評することが、如何なる程度にまで可能であるかと云ふ問題がここに提出せられたとすれば、まづ我々はこの問題に入る前に文藝と科學と批評との三つの概念を、常識以上に整理してかゝることが必要である。これ等三つの概念は、一般の人々にまで分りきつたことのやうに思はれてゐるが、それが存外分りきつてをらぬのである。

まづ文藝とは何であるか。これは詩人が空想の所産を文字を以て表現したものである。空想の所産と云へば全部感情的なもので、主觀的に云つて理性や、客觀的に云つて現實世界に全然無關係なものかと云ふに、必ずしもさうでない。或る程度までは理性の洗禮を受けてゐるし、また或る程度まで現實への知性的認識を含んでをる。その程度には固より作に依り人によつて等差はあるが、とにかく全然感情と空想とばかりでは現實社會の現象としての文藝は成立たない。たゞ我々の觀念上に於いてのみ成立つだけだ。これが純文藝と云ふものである。であるから純文藝と云ふものは、我々の觀念內にのみ存するもので、凡そ現實社會の存在となつてゐる以上は、そこに必ず不純なものが含まれてゐる。たとへば純金のまゝでは指輪にもならないし、時計にもならない。現實社會の存在としては指輪や時計には必ず銀や銅の合金があるのである。であるから純文藝と云ふものは味の素みたやうなもので　如何なる料理にも味の

素は必要だが味の素だけでは喰へる料理にはならないと、私が嘗て都新聞の時評の內で云つたところ、近松秋江氏は私の名は擧げなかつたが、純文藝は存在せぬと云ふ『あわてもの』がゐると云つて、私はあわてものにされてしまつたことがある。併し、氏は純藝術は煙草入の根付にだつて、何にだつて見られるぢやないかと云つてゐるのだが、煙草入の根付など丶云ふものは元來實用品なのだから、そこに純粹の藝術味があるとすれば、それはやはりギターミンを含んだ營養價値ある菜つ葉の中に味の素を含ませたとの同じことで、やはり不純藝術の中の純粹藝術味のことで、實用品を以て純藝術だなど丶云つてゐるのは近松氏の方がよほどあわてものである。自分があわてものであることを氣付いてをらぬほどあわて者である。

とにかく藝術の藝術たる所以は感情や想像の所産である點に存するので、純粹に理性や知覺の所產であるとすればそれは藝術ではなく論文である。ところで、藝術は感情や空想の所產ではあるが、感情や空想の所產であればそれだけで藝術になるものではなくて、そこに美がなくてはならない。美があるために、それを鑑賞するに快感が感ずるのである。この美の鑑賞に依つて生ずる快感と云ふ奴が、藝術のくせ者たる所以で、この美と快感とは多種多樣であつて、一概に定義し去れない。極單純なものは直ぐに說明出來るが、複雜深遠高級な藝術になるとなか〳〵その美と快感との依つて來る所以を說明することが出來ない。美學者クローチェはこの美と快感とを、直觀に依る創造であると說いた。では、直觀に依る創造とは何であるか。これは萬人に妥當する知性的な概念と正反對のもので、全く個人的な、一時的な、特殊的なものであると說いた。で、これを鑑賞する方でも、その個人的な一時的な、特殊的なものに卽して、我等自身の個人的な、一時的な、特殊的なものを我々の內に作る。それが鑑賞である。それ故にそれはまた別の藝術であると云ふ事になる。

二

で、藝術の定義は、まづクローチェに從つて、これで濟んだとしておく。次に科學とは何であるか。

嘗て『文藝春秋』子は、大槪が『偏執的にフロイド研究を適用してゐるのは面白い。たしかに一つの觀點だ。然り僅に一つの觀點だ。』併し『一つの眞理を絕對的のもの』と考へるのは『背理よりも始末が惡い』と云つて私を批評したことがある。併し『僅かに一つの觀點』に非ざる科學的見地なるものはない筈である。何故に科學と云ふ名があるかを考へて見たつて分る筈ではないか。科學の知識とは、分科せられたる知識である。綜合せられたる知識ではない。科學は一定の對象を假定し、一定の方法を以てその對象に臨んで得たる認識である。一定の對象と一定の方法との確立せられざるところに、科學はないのである。同一の對象でも別々の科學から見れば別々の對象である。假令ば人間も經濟學から見れば經濟人であり、心理學から見れば心理人であり、社會學から見れば社會人であり、生物學から見れば生物であり、醫學から見れば生理體であり、倫理學から見れば人格であり、精神分析から見れば無意識心理人である。＊

註＊、フロイドは科學の一面性についてかく云つてゐる。『それ自身に於いては、實は、あらゆる科學は一面的である。科學は一定の內容、見地、方法に限定されてゐるのであるから、その一面性は實に必然的である。一つの科學に依つて他の科學を難ずる如きは、これ愚の骨頂であつて、論者の如きはこのやうな愚に參與することは眞つ平である。物理學は化學の價値を否定しないし、また物理學は化學の代理にはならない。さりとて化學を以て物理學の代理にすることも出來ない。精神分析は無意識心理の科學として、慥に特殊の一面性を具へてゐる。このやうに一面性は醫術的科學の當然の權利であるから、これを否定するわけに行かない。』（拙譯「療法論」二八九頁）

このやうに分化せられ、假定せられたる一定の對象に、科學は如何なる方法を以て臨むかと云ふに、卽ちその對象內に起るさま〴〵な現象と現象との間に或る種の關係を發見せんとするのである。判然と云へば、因果關係を發見せんとするのである。卽ち原因となつたと認識せられた一定の現象と、結果となつたと認識せられた一定の現象との間に關係を認める事が、因果關係の發見である。さうしてまたもしこれが可能である場合には、人爲的に一定の現象（條件）を作ることに依つて、豫期せられた別の一定の現象（結果）の生じ來ることを認めようとするのである。こ

れが卽ち、實驗である。もしこのやうに、實驗が豫想せられた結果を生んだならば、その事實は當該科學に於いて眞理として確立せられることになるのである。つまり、科學はその假定せられたる對象內に於いて因果關係が働いてゐる、因果法則が支配してゐると云ふ事を豫想（Voraussetzen）するものであつて、この豫想は、實に科學の根本的要件（Postulat）の一つである。

さきに擧げた、世界（自然）は個々の學的對象（生物現象とか、我々の只今のインテレストから云へば、無意識心理現象とか云ふ如き）として想定され得ると云ふのは、また別の要件（ポスツラート）である。

さうしてまたこれ等の因果關係と、自然分化可能觀とは、その對象に卽いての範圍內に於いて、如何なる時と處とを問はず妥當すると云ふのが、第三の要件である。假りに、これ等三者を英文を以て表はして見ると、かうなる。

1. Law of causality.
2. Diversibility of nature as definite object of each science.
3. Validity of the two postulates above given over time and space.

卽ち、科學は三つの要件の上に成立つてゐる知識であるから、その眞理は條件つきの眞理であつて、絕對的のものではない。『僅かに一つの觀點』であるが、悲しいかな、人間は『僅かに一つの觀點』からの知識でなければ持てないやうに出來てゐるのだ。絕對的の眞理は神樣以外に知ることは出來ない。人間が絕對的の眞理を知らうと思へば、それより前に、人間が神樣と同一化しなくてはならない。さうなれば、絕對的の眞理を知ることは出來るが、その代り、その眞理はドグマであり、信仰であり、神祕思想であつて、正しい意味での知識ではない。卽ち、我々は科學者であることをやめて、哲學者又は宗教家とならなければならない。

×

以上は科學に就いての自分獨自の考察であるが、自分の一家言であると思はれるから、こゝにアーサー・トムソンがその著『科學概論』"Introduction to Science" by J. A. Thomson (London, 1921) の中で云つてゐることを參照

して比較して見よう。彼は『科學の基本的要件』の條下でかう云つてゐる。

『科學的方法の根抵に横はる基本的要件が一つある。その要件は、その眞實であることが漸次に確證せられて行つた。それは自然が統一されてゐる（The Uniformity of Nature）との要件である。この要件は細々した二三の要件に分割することが出來るが、卽ち、事物の本質には不變性、安定性があつて、(Stability in the properties of things)、それが科學の目的に役立つやうになつてゐると云ふことである。また、同じ立場、事情が不斷に反覆されてゐる（the same situations are continually recurring）と云ふことである。また自然の秩序の中には一定の道筋が存在し、その道筋には切目がなく、その道筋上で起る事柄は總て、その以前に起きた事物に依つて決定されてゐる（every event is determined by antecendent events）と云ふことである。』（七九頁）

卽ち、トムスンは、（一）安定性と、（二）反覆性と、（三）決定性（因果律）とを擧げて、それを總括するに『自然の統一性』と云ふ名を冠してゐるのであるが、これを私の意見と比較して見ると、トムスンの與へた第二は、私の與へた第三と符合し、彼の第三は私の第一と符合することは、何人にも直ちに分る。が、兩者の相違は、彼が『事物本性の安定性』を擧げ、私が『自然分化觀可能性』を擧げてゐる點にある。が、『事物本性の安定性』は結局、『同一事情の不斷反覆』の中に包含され得るのでなからうか。が、自然分化觀可能性を擧げなかつたことは手落ちであらう。（他の個所で、或は多分、說いてゐるかも知れないが……。）

×

さて、こゝまで考へて來て、今まで云つたことを、も一度おさらへして見ると、藝術とは個人的な、特殊的な、一時的な、感情的な所産であり、科學は非個人的な、普遍的な、永久的な、知性的な所産である。兩者は全然正反對の性質を帶びてゐる。藝術を科學的に研究することの如何に無理であり、如何に困難であるかは、今更ならねど、つく〴〵思ひ當ることである。

倂し藝術が如何に不可解な、鵺の如き存在であらうとも、それがとにかく宇宙間の現象である以上は、何等かの意

味に於いて科學の研究對象たり得ない筈はない。社會的現象としての一面を有してゐるとすれば、社會學的研究の對象となり得るし、生理的現象としての一面を有してゐるとすれば、勿論生理學的研究の對象ともなり得るし、もしまた無意識心理學現象としての一面をも有してゐるとすれば、精神分析學的研究の對象ともなり得るのは、當然である。けれども、以上各方面からの研究は、如何に精緻であり、如何に鋭角的であらうとも、それは普遍妥當的事實の知性的認識であつて、藝術の特殊的な、個人的な、創造的な、一面には結局、指を染めることが出來ないのである。そこに於いてか、我々がこの論の最初に擧げておいた三つの概念の內の第三——批評のそれ——の確立をしなければならない段取となる。

三

批評は文藝作品の客觀的認識と、主觀的鑑賞との、二つの機能に分れなければならない。客觀認識は、如何に正確であらうとも、結局、作品そのものゝ價値づけには直接的關係のないことである。（間接的關係はある。何故ならば、人間の心理機能はしかく分化し、相互に孤立したものではないからである。）卽ち、文藝の科學的批評、更に詳しく云ひ直せば、科學的知識と研究方法とを文藝作品の客觀的認識に對して適用することは、絕對に必要であるが、その主觀的鑑賞のためには、僅かに間接的效果をしか示し得ないと云ふ結論に、我々は到達したのである。

では次に、我々が只今關心するところの精神分析學は、作品の客觀的認識に對して如何なる效果を示し得るか、またその主觀的鑑賞に於いて如何なる間接的效果を示し得るかと云ふことが、問題となつて來る。フロイドは、文藝的才能なるものは精神分析學にとつても慥に苦手であると告白してゐるが、他方に於いては、凡そ人間の空想的現象に對しては斯學は窮極最終的の言葉を吐くことが出來ると、豪語してゐる。私自身、精神分析學を研究し、これを文藝作品の批評に適用し、經驗したところを公平に考量して見るに、實にその客觀的認識に於いて異常な鋭さを加へ、文藝批評に於ける他の一切の方法への興味を個人的には失ひさうになつたほどである。それ等の必要をも、理論上承認

はしてゐるにしても……。

ところで、主觀的鑑賞の方はどうかと云ふに、凡そ人間の心理作用に於ける知識と感情、認識と鑑賞などが、全然無緣孤立のものでない以上、知性的認識は當然、感情と鑑賞の方へも響いて來なければならない筈であるから、明かに鑑賞もまた、分析的認識に依つて大いに助けられる。これに就いては、私自身の經驗範圍內からでも、幾らもその實例を擧げることが出來る。が、たゞそこに二つの事だけは、認めておかなければならないであらうと思ふ。卽ち、時として分析的認識があまりに銳くして、藝術に於ける作爲と假面とを剝奪し過ぎて、所謂實も蓋も無くしてしまふと云ふこと。併し、分析的認識に依つて剿滅せられるやうな實や蓋ならば、どうせ大した實や蓋ではないのだと私は考へる。何となれば、そのやうな實や蓋に依つて與へられる美的快感は、どうせ知れたものであるからだ。が、大低の人々にとつては、高の知れた快樂でもそれが無意識の快感原則に基くものである限りは、後生大事に守り立てようとするものである。これが藝術家（又は藝術愛好家）の科學一般、又は分析學への『抵抗』であるのだ。

第二に認めなければならないことは、精神分析學に依る文藝作品の認識は、明かに斯學の立場からの『側面的』認識であつて、換言すれば、文藝鑑賞のための補助的——よしんば偉大にして重要なるものにもせよ——手段であつて正面的認識ではないと云ふことである。併しこの側面光は、非常に銳角的に、作品を照破することは確かな事實である。側面的なるが故に銳角的なのであつて、正面的なものは、常に對象を平板に、平凡にしか照し出さない。我々は人間を認識するにその顏面ばかり見たつて分るものではない。側面に廻つて、その人の全身と全靈とを觀察しなければならない。家を見るに、その家の玄關口からばかり覗いてゐたつて駄目である。やはり臺所口、奧座敷に忍び込まねばならない。

そこで、文藝學の正面光に補ふに、他の諸科學、殊にこの精神分析學的側面光の威力を以てしたならば、非常に面白い文藝批評が可能になつて來ると私は確信するものである。さうしてそれが今後の文學批評家、鑑賞家の不可缺の任務の一つでなければならないのである。（完）

ドイツ二文豪の精神分析觀

平塚義角譯

一、精神分析に對するわが態度（トーマス・マン）

精神分析に對する私の態度は、簡單ではない。さうしてそれが當然である。精神分析は知的開發精神の注目すべき所産であつて、その中に人々は、偉大なもの、驚嘆に値するもの、即ち大膽なる發見、認識の深き突進、人間認識への驚くべき、實にセンセイショナルな擴大を、當然、認めるのである。だが他方では、この精神分析は民衆に濫用されて、邪惡な説明の具に、又暴露とか附會とかの反文化的な偏執の具に供されることがあると云ふ事をも、人々は認めるのである。さうした事に對して考慮を拂ふことは、必ずしも單なる感傷主義を意味するとは限らない。精神分析の本質は、特に藝術とか藝術家に關しては、認識、つや消しな認識であり、さうして精神分析は殊に明かにこの方面の認識を企てたのである。さて、初めて斯學に私が接した時、それは私には何等新奇なものではなかつた。ニイチェに依つて、即ち彼のワグネル批評の中で、この事を私は大體知つてゐた。從つてそれはイロニーとして、私の精神狀態や私の作品の一つの要素となつてゐたのである。で、私の作品が早くから或る特色ある注意と贔負目の批評とを、分析學派の側から與へられたのは、かうした事情のお蔭である事は、疑ひの餘地がない。『ベニスでの死』がまた、その中に次のやうな高慢な文章が有つたとは云へ、この分析學派の同情を受けたのには、立派な根據があるのだ。—

ー『然し、高尚な有能の人は、認識の鋭い苦い魅力に對しては、何の何物に對してよりも速かに、そして徹底的に、興味を失ふものであるらしい。だから、知識が、意志や行爲や感情や情熱をさへも、一寸でも弱めたり、氣力を失はせたり、品位を落させたりしさうな限り、大家の域に達した人がそんな知識は拒み、退け、昂然として進み行く深い決心を、靑年の憂鬱な程の生眞面目な徹底性と比べて見ると、後者は確かに淺薄を意味してゐる。』と。ー――これは非常に非分析的な言ひ方ではあるが、然し恐らく『抑壓』の特色的な例として理解せられる。ところが實は、藝術家にして神經症患者である人々が、分析に依つて如何に暴露されても、やはり自己を生かして行くその根强さを持ち得るのは、『抑壓』のためと云ふよりは寧ろ――非科學的ではあるが、この方が適切だからかう云ふが――『自己を恃むこと』„Anfsichberuhenlassen“ のためであると云ひ得るだらう。かう云つたからとて決して斯學に對して單なる敵意を示したことにはならない。何故かと言へば、認識は原理としては創造的ではないが、認識と云ふことは、ニーチェが明かにした樣に、藝術とも非常に關係深いもので、從つて藝術家は明確な認識を持つことによつて、優れた足場に立つ事が出來るからである。右に擧げた言葉はまた、世の中の人々が眼を閉ぢる事によつて、再び、フロイド及びその一派の研究の結果を――普通の言葉で言へば、――『廻避』し得るとの妄想に外ならないのである。世の人々は決して、斯學の研究結果を廻避はせず、藝術も亦、そんな事はしないだらう。旣に久しく、精神分析は我々の全文化圏內の創作活動の中に勢力を振ひ、その上に着色を與へて來、そして今後も恐らく加速度的に影響を與へるだらう。私の今度公刊した長編の現代小說『魔の山』の中でも、精神分析はその役割を演じてゐる。精神分析の代辯者とも云ふべきクロコウスキイ博士は、幾分變なところもあるが、彼の變なところは、たゞ著者が作品の內部に於て、精神分析に對してなした一層深い讓歩に對する一つの埋合せにすぎないであらう。

譯者附記――トーマス・マン Thomas Mann はハインリヒ・マンの弟で一八七五年六月六日リウベックに生れた。彼は早く父を失ひ母と共に十八歲の時ミュンヘンに移つた。暫く火災保險會社に勤めてゐたが、その後『ジンプリチジムス』の主筆とな

り、更に自由文筆家となつたのである。詩人アカデミーの一員で、またボン大學の哲學の名譽博士である。彼は一九〇一年の『ブッデンブロオク』で名をなした。この小說は前世紀の大きなブルヂョア家族の沒落を完全な形式で描いたものである。『ベニスでの死』(一九一三年)は死の歡樂と病中の救ひを非常に氣高く纖細に表現したものであり、翌十四年の『トニオ・クレーゲル』は市民的な几帳面への病的な憧れと、喜劇役者の綠色の旅行馬車への非常な憧れとを心に抱いた市民を描いたものである。『魔の山』は一九二四年の作で、二册からなる長編である。この他多くの小說と『ゲーテとトルストイ』其他の評論を書いてゐる。彼の作風は、整然たる寫實形式で冷徹な印象を與へ、しかもその形式を通して暖かな叡智と深い同胞愛を慘透させ明るい快適を覺えさせる。彼は主としてショーペンハウエルの厭世主義とリヒャード・ワグネルの神祕主義とに影響を受け、ドイツに於ける自然主義以後の大散文詩人として、一九二九年にノオベル文學賞を贈られた。

我が國では、彼の小說十數篇が、『トオマス・マン短篇集』と題して、昭和二年、日野捷郎氏に依つて譯出されてゐる。

本稿は『精神分析學一九二六年度年報』所載 „Mein Verhältnis zur Psychoanalyse" の譯である。

二、藝術家と精神分析(ヘルマン・ヘッセ)

特に藝術家と云ふものは精神分析に對して、卽ちこれを採用することに依つて種々の方面に豐富な觀察力を持つことが出來るやうになるこの學問に對して、速かに親しみを覺えるだらうと云ふことは、誰しも期待するところであつた。旣に多數の人が精神病者として、精神分析に興味を覺える事が出來たが、藝術家は神經病者としてより以外に、この全く新らしく創成せられた心理學に這入つて行かうと云ふ傾向と用意とがあつたが、旣成學者の方はさうは行かない。天才的で急進的なものに對しては、藝術家は大學教授(プロフエサー)よりも、常に容易に受容的なものである。

ところが、個々の藝術家に取つては、彼がカフェーでの新論題としてこの學問を受入れるだけで滿足せぬ限りは、この新らしい心理學から藝術家として學ぶために努力せねばならないと云ふことが直ちに生じた。――と云ふよりは

寧ろ、この新らしい心理學を理解することが、創作それ自身に果して役立つかどうか、もし役立つとすればどれほどの範圍に役立つかと云ふ問題が生じたのだ。

この新學說は、詩作の上へ應用して、又日常生活の觀察に用ひて効果のあることが、直ちに分つた。人々は今までより以上に、一つの鍵を握つたのである。――それはこれさへあれば何でも出來ると云ふ魔法の鍵ではないが、一つの價値ある、新らしい立脚地、一つの新らしい優れた手段であつて、それが如何に有效であり確實であるかは速かに認められたのである。と言つて私は、詩人の生活を出來るだけ細かく病歷として見る文學史的な個々の努力の事を言つてるのではない。が旣に、ニーチェの心理的認識と神經の細かい直觀とが經驗した色々の證明と訂正とは、我々には非常に尊いものであつた。無意識に就いてのこの新らしい知識と觀察とは、心的機制を抑壓とか、昇華とか、退行等々と解釋して、その結果、心的機構が明瞭になり、人をして直ちにその正當を首肯させた。

然し乍ら今や心理學を研究する事が、或る程度まで誰にでも手近く、容易にはなつたが、藝術家が果してこの心理學をどの程度まで利用出來るかは、全く疑問に附された儘でゐた。歷史上の知識が歷史文學の創作に役立たず、植物學又は地質學が風景描寫に殆んど何の役にも立たないと同樣に、最善の科學的心理學も、人間の描寫には殆んど助けにはなり得ない。人々も知る如く、精神分析學者たちは、昔の、卽ち分析學發辭以前の、あらゆる方面の文學を實例とし、典據とし、確證として利用した。この樣に、分析が認識し、そして科學的に斷定した所のものは、詩人等には常に分つてゐたのであつた。實を云ふと詩人とは、その特種な考へ方が本來分析的心理學のそれとは全然反對の方向をとる如き考へ方を代表するものであつたのだ。藝術家は夢を見る方であり、分析家はその夢想を解釋する方であつた。この故に、詩人としてはこの新らしい心理學をよしんば知つたからとて、やはり前同樣その夢想をつづけ、無意識の呼び聲に從つて行くより他に、何とも爲ようがないではないか？

さうだ、詩人としてはそれより他に道はなかつたのだ。嘗て詩人でなかつたものや、又嘗て精神生活の內的な組織と心臟の脈搏とを感じなかつたものは、凡そ如何なる分析もこれを心理の解釋者とはなし得なかつたのだ。かゝる詩

的傾向ある人間はたゞ、一つの新らしい學的方法を應用する事が出來るのみで、應用してゐる時には、なるほどうまく行くものだと感心はするだらうが、併しそれに依つて自己の力を本質的に高める事は出來ない。心理經過の詩的理解は昔も今も、常に直觀的な才能の事柄で、分析的な才能の事柄ではない。

然しこの問題はこれきりで片付いたわけではない。事實上、精神分析の方法は、藝術家をも亦著しく促進させる事が出來た。藝術家が藝術上の技巧の中へ、分析の技巧を取入れるのは誤りであるが、然し精神分析を眞面目に受容れ飽くまで研究して行くのは正しい。私は、藝術家に對して分析が與へる所の三つの確證と確信とがあると思ふ。

まづ第一には、空想 Phantasie と虛構 Fiktion との價値に就いての深い確信である。藝術家が自己を分析的に觀察して見てはつきりする事は、彼が自分で苦んでゐる弱點の一つがその職分に對する懸念であると云ふことだ。卽ち、空想に對する疑惑であると云ふことだ。市民的な物の考へ方や敎育を正當とし、自己のあるがまゝの行爲を、却つて『單に』美しい虛構（嘘ばなし、作り話）として見ようとする變な（自分本來のものとは思へぬ）聲が心に聞えることである。ところが分析は、藝術家が往々『たゞ單に』虛構としか評價し得なかつた事が、實は最高の價値ある事であつたといふ事を徹底的に敎へる。そして精神の根本的要求は重大であるが、凡そ外的權威の標準と評價とは大したことでないことを思ひ起させる。分析はそれ自身より以前に、藝術家を是認し、同時に、藝術家に、分析心理學の中で純粹に知的な活動をなし得べき領域を解放する。

この方法が如何に有益であるかは、これを單に外部から學ぶ人も亦恐らくきつと知るであらう。が、他の二つの價値は、精神分析を根本的に、そして眞面目に、身を以て體驗し、それが單なる頭だけの事ではなく、心臟の事にまでなり得た者だけに分るのである。自己のコムプレクスに關して多少の事が分つたり、その內的生活に就いて二三の簡單な理解が行つたゞけで滿足してゐる者には、最も重要な價値は分りつこはないのである。

精神の根源を記憶や、夢や、聯想から探求するところの分析の方法を眞劍に、相當の期間、自分でやつて見た者ならば誰しも、いつまでも失はれない利得として、『自己の無意識へのより深い態度』とでも名づけ得べきものを持て

るやうになる。彼は意識と無意識との間をより親しく、より效果的に、より情熱的に往來する。彼は、分析を知らないでゐる時ならばなか〳〵氣付かず、たゞ夢の中に見るに過ぎない事柄の中から、澤山のものを白日の中に取り出し來る。

そしてそれは更に、倫理的なものや、個人の良心やに對する精神分析の收獲と深い關係にある。分析は何よりも、まづ、一つの大きな根本要求を打立てるものだ。その根本要求を回避し、等閑にすれば、直ちに報ひを受け、その刺は深く徹り、その痕跡は必ず永久に消え去らぬのである。分析は我々が知り慣れてゐない自分自身に對する眞理を求めるのである。それは我々が最も首尾よく心の中に押し込んで了つたものを、觀察し、認識し、吟味し、そして眞面目に扱ふ事を我々に敎へる。これはすでに、分析に於て行ふ第一歩であるが、一つの力強い、實に恐るべき經驗であり、根本からの震撼である。これに耐え、更に繼續して行く者は、今や一歩一歩と孤獨になり、因襲や在來の見界から益々切り離されて行くのを知る。彼は何物に對しても敢然疑問の眼を向けないではゐられなくなる。が、そのかはり、崩壞して行く因襲の背後に、段々眞理の、自然の峻嚴なる姿が現はれて來るのを見る。何故ならば、分析による激しい自己試驗に於てのみ、一片の發展史は實際に經驗され、血の通つた感情で貫かれるからである。人間の起源や聯關や希望は、父母に遡り、農夫や遊牧者に遡り、猿や魚類に遡つて、かく嚴肅に、かく感銘的に經驗されること、眞劍な精神分析に於ての如きはない。學んだ事が眼前の事實となり、知つた事が心臟の脈搏となる。そして、不安や當惑や抑壓が明かとなる樣に、人生と人格との意味が益々純粹に、益々慾求的に高まつて來る。

分析のこの敎育的な、慾求的な、鼓舞的な力を、藝術家程に感得して助成するものは他にはゐまい。何故なら、藝術家の目的は、世間やその習俗への出來るだけ無難な順應ではなくて、彼が少くともその時に意圖するところの事を行はうとするものだからである。

過去の詩人中二三の者は、分析的心理學の根本的命題に非常に近い見方をしてゐた。最も近かつたのはドストイェフスキーで、彼はフロイド及びその一派の遙か以前、この方法をたゞ單に直觀的に取つたばかりでなく、また、この

種の心理學の或る實行と技巧とを既に持つてゐた。ドイツの詩人の間ではジャン・パウルがさうである。心理經過に就いての彼の見方は、今日の分析心理學のそれに最も近い。それのみならずジャン・パウルにとつては、强い生々とした感覺によつて自己の無意識とたえず親しく接觸する事が、永久に創作源泉となつた藝術家の、最も輝かしい例である。

最後に我々は一人の詩人の文を引用するが、この詩人を我々は從來、純粹の理想家とは認めて來たが、夢想家であるとか自己の中に凝り固まる性格であるとかは考へず、寧ろ全體として、非常に知的な藝術家と認め慣はして來たのであつた。オットー・ランクが初めて、次の書簡文の一節を、無意識心理に對する近代前の最も驚異的な確證の一つとして發見した。シルレルは、創作の障害を歎いてゐるケルネルに宛てゝから書いてゐる。『君の歎きの原因は、君の悟性が想像力に課する拘束の中にあると私には思はれる。流出する想像を、悟性が言はゞ既に門口で餘り鋭く吟味する事は良くなく、魂の創作には有害であると思はれる。一つの思想（觀念）はそれだけ切り離して觀察すると、甚だつまらなく、且つ奇妙なものゝやうに思はれるが、併し恐らくその觀念は、それより後に來る觀念によつて重大となる。恐らくそれは、同樣につまらなく見える他の諸觀念と或る結合をして、一つの非常に適切な一部となるだらう。かゝる事は凡て、悟性が、一つの觀念と他の觀念とが結び付くのを眺めることの出來るやうになるまで、その觀念を保持してゐることが出來れば、判斷がつくのである。反對に、創造的な頭腦に於ては、悟性はその見張り番を門口から引揚げさせて了ふから、色々の觀念がゴチャ〳〵に流れ込み、然る後初めて、悟性はその大群を見渡しそして吟味するものと私には思はれる。』

この文では、無意識に對して知的批評がとるべき理想的態度がクラシックに表現されてゐる。無意識や、混然たる思ひ附や、夢や、放肆な空想やから流れ込む財寶を排撃したり、無意識の形づくられざる無限の中へ不斷に歸依、沒入してゐるだけでは駄目である。隱された源泉に對してまづ懇切に傾聽し、然る後、批判を加へ、混沌の中から適宜に選擇し、かくして、凡ゆる藝術家は創造して來たのである。何か一つの技法がこの要求を充す助となり得るなら、

それは精神分析の技法である。

譯者附記——ヘルマン・ヘッセ Hermann Hesse は一八七七年七月二日ヴュッテンベルヒのカルヴに生れた。初めは機械製造者であつたが、後バーゼルの本屋をした事もある。彼はメリケの調を帶びた抒情詩から出發した。が、その名聲を高めた作は自叙傳小說「ペーター・カメンツィント」で、彼の特質たる抒情氣分の豐かな作である。

ボッカチオやフランツ・フォン・アッシシーの研究は、彼を客觀への發展へ向はせた。「車輪の下」は、彼のこの非抒情的な純粹に叙事的な創作態度を示してゐる。

大戰は彼には大きな經驗であつた。彼はフランシス派の生れの人間として、ヨーロッパ文明のこの危期を獨り征服し得た。彼はベルンに移り、こゝで最も深い最も美しい發展をなした。彼はドイツ青年運動への道を見出し、新らしい青年を取扱つた「デミアン」と云ふ最も美しい小說をものした。また、印度哲學への道は「ズィッタルタ」が示してゐる。彼は更にかの名著「荒野の狼」の中で、魂の深奧にまで突込んで、新時代の一種のヴェルテルを描いてゐる。

彼の中には二人の人間が住んでゐる。一は精神と意志で、一は魂と血である。彼は色々な世界の間を經巡つて、良いヨーロッパ民族性と、シュワーベン根性と、美しいドイツ國民性とを、一つの統一にまで結合してゐる。それは彼の藝術の將來を想見させる。彼の人となりは一九二八年の「瞑想」に最も明瞭に現はれてゐる。

この論文も、トーマス・マンの論文と並んで、『精神分析學一九二六年度年報』に掲げられた,,Künstler und Psychoanalyse"を譯したものである。ヘッセが文末に引用してゐるシルレルの書簡の一節は、フロイドもその論文『分析技法前史に就いて』の中で引用してゐる。(大槻氏譯、フロイド原著『分析療法論』二〇一頁參照。)

近代的人間の精神問題（ユング）（2）

武田忠哉

例へばエヂプトの場合のやうに、一つの理念的・儀禮的形式が外的に存在し、それによつて精神のすべての努力と希望が取上げられる際には、精神は外部に横はり、したがつてそこには何等の精神問題も生じることなしに、またわれわれの意味に於ける無意識的なものもみられないのである。かやうにして、すでに早い時代から心理的事實の認識のために充分の內省と叡知が與へられてゐたにもかかはらず、心理學の發見はやうやく最近にいたつて達成されたのであつた。この觀點から把握されるならば、科學的技術の問題についても全く同樣の沿革が認められうるのである。例へば、すでにローマ人はあらゆる機械的原理と物理的事實――（恐らくそれによつて一つの蒸氣機關の裝備が容易に實現されえたであらう）――を所有してゐたが、しかしながら、それは一つのヒーローの玩具より以上のものであることが出來なかつた。何故なら、そこには、より高度の生長を促すだけのいかなる困窮もみられなかつたからであり、かうして、やうやく前世紀における巨大な作業分配と專門化によつてかやうな意味の困窮がはじめて惹起されたのであつた。

同じやうに、われわれが心理學の發見にまで導かれるためには、やはりわれわれの時代の精神的困窮が要求されたのであつた。もちろん、以前の時代にも精神的事實は存在したが、しかし、それは强力に切迫しなかつたために何人もそれを注目することなく、かうして、時代は何らのいちじるしい精神的困窮なしに經過したのであつた。しかしながら、いまやわれわれは精神を缺除することができない。おそらく最初にこの眞の狀勢を事實的に經驗したのは醫者であつたやうに思はれる。何故なら、他の側の僧侶の場合には、一つの、障碍を受けた機能を治療するためには、精神を何らかの既知の形式へ導入し

適應させるだけで充分であるからである。かやうな形式が實際的に生活の可能性を與へうるかぎり、心理學は單に一つの補助技術として用ひられ、ここでは、精神はまだ心理學の部門の一要素を形づくるにいたらないのである。一般に人間が群居しつづけるときには、彼は何らの精神を所有することがなく、また一つの不滅の精神に對する信仰は別として、それ以外の何らの精神をも必要としないのである。しかしながら、彼が彼自身の西洋的地方宗教の圓周を越えて生長し、すなはち、彼の宗教形式がもはや彼自身の生活をその全き充實において包括しえないとき、そこでは、精神が、すでに通常の手段によつて屈服されることのできない一つの要素にまで複雑化されはじめるのである。かやうな理由によつて今日われわれは一つの心理學を所有し、それは教義あるひは哲學的要請にではなく、經驗的事實に基づいてゐるのである。かうして、同時に私は、われわれが一つの心理學を所有するといふ事實において、一般的精神の根本的動搖を示す一つの症狀を認めることができるのである。何故なら國民精神と個人精神のいづれの場合においても、すべてが順調に終始し、すべての精神的エネルギーが規則的且つ充分に適用されるかぎり、そこからは何らの障碍的なものがわれわれの前に呈示されないのである。ここでは、われわれは何らの不安と疑惑に襲はれず、われわれ自身との不一致におちいることは全くあり得ないのである。しかしながら、精神活動の運河のあるものが埋められると同時に、何らかの阻止の徴候が現はれ、いはば水源が氾濫しはじめ、不可避に内外の均衡が破れ、その結果、われわれはわれわれ自身との不一致を經驗するやうに強ひられるのである。ただこの困窮の場合においてのみ、精神は、一つの、他の方向に意欲するもの、一つの、われわれに未知なるもの、さらに、われわれに敵對し、不一致なるものとして發見されるのである。フロイドの精神分析の發見は、この過程をもつとも明瞭に示すものであらねばならない。ここで最初に發見されたものは變態性慾的・犯罪的幻想の存在であり、それは、文字通りに解するならば、文化された意識と全然一致することができないのである。もし何人かがこの存在の觀點に立脚するならば、疑もなく彼は一人の反抗者・狂人・犯罪者の道を歩まねばならないであらう。

もちろん、現代にいたつてはじめて精神の後景あるひは無意識なものがかやうな局面を展開したといふことは容認されることができない。おそらくそれはすべての時代とすべての文化において同様の狀態であつたやうに思はれる。あらゆる文化は、例へばアルテミス神殿に放火

したヘロストラトスのやうなそれ自身の敵を持つてゐたのであつた。しかしながら、かつて以前のいかなる文化もこの精神的後景をかかるものとして眞面目に把握することを迫られたことがなく、そこでは、精神はつねにただ一つの形而上的體系の一部に止まつてゐたのであつた。しかし、すでに近代的意識は、もつとも強力の、もつとも痙攣的の擁護にもかかはらず、もはや精神を認識することなしに過ぎることは全く不可能であるにいたつた。この事實は、またわれわれの時代をすべての過去の時代から區別するものであらねばならない。いまや無意識的なものの不明瞭な事物が活動的な力であること、そして、もはやわれわれの合理的世界秩序へ適應されえない何らかの精神力が存在すること、すでにわれわれはかやうな事實を否定することができないのである。さらに、われわれはこれらの上に一つの學を樹立し、あるひは、むしろわれわれがいかに眞面目にそれらを理解してゐるかに對する一つの證明を試みつつあるのである。多くの過去の世紀がそれらを無視して研究の圈外に置いたにもかかはらず、もはやわれわれは、一つの致命的なネソスのシャツのやうにそれらを脱ぐことが出來ないのである。

かやうにして、われわれの近代的意識は世界大戰の無限のカタストローフェの連續によつて動搖におちいり、そこでは同時に、われわれ自身とわれわれの善とに對する信念が道徳的動搖を受けねばならなかつた。かつてわれわれはややもすれば他の未知の人々を政治的・道徳的に惡しき人々として解したにかかはらず、いまや近代的人間は、まづ彼自身が政治的・道徳的にすべての他の人々と正確に同等であることを洞察しなければならないのである。すなはち、以前の私は、他の人々を秩序にまで呼び出すことにおいて私自身の天賦の義務を認めるやうに信じてゐた。しかしながら、實際やはり私自身も同じやうに秩序の呼聲を必要とすること、したがつて、何よりも先にわが家事の整理がおそらく私にとつて第一の急務であること、現在の私はやうやくそれを知り得たのであつた。かうして、世界が合理的に組織されうることに對する私自身の信念、空虚な平和と協力によつて支配される一千年王國のあの古い夢想、それらが動搖におちいるにしたがつてそれだけますます私の眼は謙遜に求心的な方向に投げられねばならなかつた。そこでは、かやうな意味における近代的意識の懷疑によつて、最早何らの政治的あるひは世界改革的熱狂が許されえないのである。いな、さらにこの懷疑は、種々の精神的エネルギーが滑らかに世界の内部へ流れ入ることに對してもつとも

強力な障碍を形づくるものであらねばならない。この懐疑によつて近代的意識はそれ自身の溯源を強ひられ、それが逆方向に溢れる結果、その際の抵抗によつて多くの主觀的・精神的現象が意識にまで導かれるのである――(もちろん、これらの現象はつねに存在したものであるが、しかしながら、すべてのものが摩擦なしに外部へ流出し得たかぎり、それらはもつとも深い投影の中に橫つてゐたのであつた)――。かつて中世的人間の世界は、現代と比べていかに異つた樣相をもつてゐたことであらうか。そこでは、大地は世界の中心點において永遠に鞏固に、そして平靜に休らひ、深い配慮を持ち・惜みなく溫熱を施與する太陽によつて圍まれ、すべて神の子の白人種は最高のものによつて愛をもつて守られ、永遠の冥福のために敎へられ、すべての人間たちは、地の無常を脫して一つの歡喜にみちた永遠的存在に達するためには何を行ひ、いかに身を處さねばならないかを精密に知つてゐたのであつた。しかしながら、この慈愛のヴェールはすでに久しく自然科學によつて引き裂かれ、もはやわれわれはかやうな一つの現實を夢みることさへもできないのである。あの時代は、かつてわれわれ自身の父がもつとも美しくもつとも強い人間としてわれわれに映じた幼年時代のやうにいまわれわれの背後に橫つてゐるのである。すべての、中世的人間の形而上學的確實性は近代的人間から遠ざけられ、その代りに、われわれは物質的確實性・一般的安寧・人道の理想を置換へたのであつた。かやうにして、もし人々が今日なほこの理想を不動に持ちつづけうるならば、おそらく彼等は一つの異常に深い樂觀論に卽することができるのである。しかしながら、この確實性もまた無效にならねばならなかつた。何故なら、近代的人間は、あらゆる外的進步がそれぞれ同時に一つの、より大いなるカタストローフェの、たえず昂揚しつつある可能性を生みいだすことを知つてゐるからである。この可能性に面して期待と幻想は恐れながら退かねばならない。たとへば、すでに今日、多くの大都會が毒瓦斯除けの練習を計畫しつつあることにおいてかやうな一つの現實の例證が見いだされ得るのである。

一般にすべての盲目的な出來事を支配するあの恐るべき法則。かつて、それはヘラクレイトスによつて、エナンティオドロミー(事物間の相互反撥)の概念を刻みつけられ、いまやそれに對する微かな豫感が、冷却する恐怖をもつて近代的意識を充してゐる。そして、またこの豫感は、何らかの形而下的處置によつてこの恐るべきものを取扱ふ可能性に對するすべての信念を不具におとしいれるのである。

それ自身の内部において建設と破壊が永遠に平衡を保ちつづける一つの盲目的世界。われわれの意識がこの世界に對する戰慄的な展望から放たれて主觀的人間へ復歸し、それ自身の後景を見入るならば、そこにも、われわれの各人の心を寒くする荒涼とした暗黑が探しいだされるのである。この領域においても、科學は一つの最後的な避難所を破壞し、かつてわれわれを保護する洞穴のやうに見透しされてゐた一つの地點を腐敗にみちびいたのであつた。

それにもかかはらず、われわれはかやうに多くの惡がわれわれ自身の精神の根柢に橫つてゐることを見いだして殆んど安らかさを感じるのである。少くもこの部分にわれわれは全人類におけるすべての惡に對する原因を發見しうるやうに信じてゐる。もちろん、何よりも先にわれわれは激動と幻滅に陷つてはゐるが、しかしながら、ここでは、つぎのやうな一つの感情がわれわれに與へられてゐるのである。それは、「これらの精神的事實はわれわれの精神の一部であるために、われわれは何らかの程度においてそれらを自ら所有し、したがつて修正し、あるひは、少くもそれらを效果的に抑壓することが可能である」といふ感情にほかならない。そして、ややもすれば人々はさらに一つの假定を設けるのである。すなはち、「もしこれらの修正あるひは抑壓が成功するならば、それによつて少くも外界における惡の一部が根絕されたことになるであらう。」かやうにして、無意識的なものに關する知識が一般に流布された結果として、たとへば一人の政治家が無意識的な惡しきモティーフによつて誘惑されるときには、それがすべての人々によつて洞察され、諸新聞紙が彼に對して、「どうか貴下自身を分析するがよい。實際、いまや貴下は一つの父コンプレックスの抑壓を病んでゐる」と叫びかけるやうになるかもしれないのである。

もちろん、何らか一つのものが精神的であるといふ理由から、ただちにわれわれがそれを操作しうるかのやうに解するのは錯覺でなければならない。およそかかる錯覺がいかに不合理的な歸結へ到達するものであるか、それを示すために私は故意にいま述べた一つの奇異な例を引用したのであつた。しかしながら、他の一面からみるならば、本來、惡の大部分が人性の無限の無意識に基づくこと、そして、われわれの洞察が深められることによつて惡の精神的根源に對する何らかの排除が行はれうること、それらは疑もなく事實であり、例へば、それは、科學の進歩によつてわれわれの外的障碍が效果的に除去されるにいたつた場合と類似してゐるのである。

かうして、最近二十年間において心理學的關心がいちじるしく普及され・世界的振幅を得た結果として、いまやわれわれは一つの狀勢を否定することができない。すなはち、そこでは、近代的意識がいくらか物質的外面性から退き、そのかはりに主觀的內面性の側へ移向したのであつた。およそ原則として一般的意識の最初の移向はまづ藝術によつて直觀的に捕捉されるのが常であるが、この場合にもやはり表現主義藝術によつてこの移向が豫言的に先取されたことが認められ得るのである。

われわれの時代の心理學的關心は、精神的なあるもの外的世界が與へえなかつたあるもの、われわれの宗教が當然それを含むべきではあるが實際には——本來、あるひは、最早、あるひは、近代的人間にとつて——含んでゐないあるもの、に對する期待を抱いてゐるのである。まことに、從來の諸宗教は近代的人間にとつて、もはや精神から由來する內的なものとして映じることなしに、むしろ、それは彼にとつて一つの外的世界の家具に化したのであつた。すでにいかなる超現世的精神も內的啓示によつて彼を捕捉することができず、ただ彼の側において、晴着を裝ひやがて遂にそれを着古して再び脫ぐにいたるやうに、多くの宗教と信念の選擇を試みるにすぎないのである。

不明の・ほとんど病的にみえる・精神の後景を形づくる諸現象。一般にそれらは過去のすべての時代を通じて拒否されたにもかかはらず、いかなる過程において突然いまやわれわれの關心を惹くにいたつたのであらうか。もちろん、われわれはそれを適切に解明することはできないが、しかしながら、結局、それらの現象は多かれ少かれわれわれの關心を眩惑しなければならないのである。ともあれ、それがわれわれ一般の關心の對象となりつつあることは、一つの、けつして否定されない事實として認められ得るのである——假令、この事實がよき趣味と一致しがたいもののやうにみえるにしても——。いま私はこの心理學的關心といふ云ひ方によつて、たとへば、學としての心理學に對する單なる關心、あるひは、さらにフロイドの精神分析に對する・より狹い關心、それらのものを意味するのではない。むしろ、ここでは、精神的諸現象・降神說・星占術・神智學・潛在心理學その他にする關心があのやうに全く一般的に流布しつつあることについて語られてゐるのである。まことに、十六世紀の終りと十七世紀との以後に、もはや世界はこれと類似の現象をみることなしに過ぎ來つたのであつた。もしわれわれが歷史を溯航するならば、一つの、これと比較されうる現象は、ただ西曆紀元第一第二兩世紀におけるグノーシ

ス*の極盛において見いだされるにすぎない。實に、今日の精神潮流はもつとも密接にこのグノーシスと關聯してゐるのである。さらに、いまや一つのフランス・グノーシス教會が生みいだされ、ドイツにおいても、明かにかかるものとしてそれ自身を記號づけるところの二つの派がみられ得るのである。

* （Gnosis ギリシャ晩期折衷主義時代の宗教における神の認識。すなはち超感覺的非形體的な神との一致融合において經驗される神祕的直觀をいふ。

もちろん、かやうな運動の中の、數的にもつとも重要なものは、神智學と、それの大陸的同胞としての人智學――一つの、インド的に修正された・もつとも純粹なグノーシス――において見いだされ、それらと比較されるならば、一つの學的心理學に對する興味のごときは意味乏しきものであらねばならない。かうして、グノーシスはただ精神の後景的現象を基礎としてのみ建設され、さらにそれは道德的深所へも到達するのである。それだけでなしに、このことは恐らくその學のあらゆる專門家によつて容認されるやうに、やはり潜在心理學についても同様に妥當することが出來るのである。（未完）

ヰルヤム・モリス『地上樂園』の研究（二）

——詩聖誕生百年祭記念論文——

大槻憲二

十五、アコンティアスとサイディップ

梗概——或る夢想家の青年アコンティアスがギリシアの海のデロス島に上陸し、美しい園の樹の下にまどろんでゐた。と、一群の少女がそこを過ぎて行つたが、その內の一人が殊に彼の心を捕へ、彼は遂にその面影を忘れず、その翌る日も同じ場所へ行つた。ところが、またその時も例の美しい少女は憂欝な面持をして、そこへ來合せるのであつた。毎日、そのやうな事を繰返してゐる內、或る日、一人の貧しい老漁夫が來て、この島の少女たちの內一人が恐ろしい女神（ダイアナ）に事へることにならねばならないのだと敎へる。

やがてアコンティアスはこの老人と懇意になり、老人の家に假寓することゝなる。老人は彼に、かの美しい少女サイディップが、八月が來ると恐ろしい女神ダイアナに事へねばならないであらう、さうなれば彼女は國中の尊崇を得るが、一生結婚は出來ないのだと語り聞かせる。

彼は翌朝、起き出ると、林檎の樹の下に行つて、そこに疲れた頭を横たへた。夢現の間に愛の女神ヴィーナスが來て、彼の額に手を觸れたやうに思つた、彼はフト眼をさますと、大きな、滑らかな金色の林檎が彼の側に轉つてゐた。彼は夢中でその林檎を取上げ、茨の棘でその面にかう刻りつけた。

『アコンティスと私は今日結婚する』と。

さうして彼はその林檎を持つて、ダイアナ女神の祭壇の前へ、人々の群に從つて進んで行つた。やがて儀式は始まり、サイディップは母親に連れられて祭壇の前へ立現れた。面紗に被はれた娘の顏は蒼ざめてゐたが、娘を

女神の使徒に捧げる母親の顏は、誇らしげであつた。

サイディップは祭壇の前に立つて暫時ためらつてゐたが、その時アコンティアスは件の林檎を少女の外套の間に投げ込んだ。少女は顏を赧らめ、これを眺めた人々は互に呟き合ひ、母親は心配して娘の側に急ぎ寄り添つた。が、サイディップはそれを讀みあげ敢然として祭壇の前に進み寄つて、その林檎を神の前に捧げた。人々の内には、彼女が懲罰のために殺されるだらうと思ふ者もあつた。併し僧侶が愈々彼女を殺すつもりだと云ふことが分ると、人々の間から反對の聲が擧り、

『いや、御兩人を結婚させよ、それが愛神の意志だ！』

と叫んだ。僧侶たちは呆氣にとられてゐたが、やがてその内の一人は云つた。『恐れることはない。我々でなく全國土が、一度提供したものを取戻すのだ』と。僧侶たちがそんな事を云つてゐる間に、當の御兩人たちは、互に肩を抱き合つて祭壇の前に突立つてゐた。その樣子は如何にも幸福らしく、嘗てあれほどの惱みがあつたらしくも見えなかつた。

典據――アコンテアィスとサイティップの戀物語は紀元前三世紀のギリシアの文學者カリマクス Kallimachus の書中にある有名な話であるが、併し彼の書いたものは極めて斷片的にしか殘つてをらぬ。次にこの物語はオーギッドと、紀元五、六世紀頃の詩人アリステネートスとに依つて歌はれた。

モリスはオーギッドに依つたのであるが、併し傳說の取扱方に於いては、全く獨立的である。たゞ根本思想に於いて、兩者が共通的であるのみである。

分析――分析眼を以てこの物語を讀んで最も興味を索かれる點は、少女が恐ろしき女神ダイアナに依つてその性生活を禁斷されるが、別の女神ギイナスに依つて、それを解放せられると云ふことである。併しギイナスは、『キユピッドとサイキ』に於いては、少女サイキの美を嫉んで、そのキウピッドとの戀をさまたげた女神である。ダイアナは『國津姬』に於いて、やはり惡神として少女の性生活を禁斷してゐる。

分析的解釋を下すならば、ダイアナもギイナスも共に母である。母の觀念は少女（娘）のアムビヴァフレンツに依つて二分せられて、善母と惡（恐ろしき）母とに別れる。それがダイアナとギイナスとであるが、この二者は元來同一體であるが故に、ギイナスはまた時に惡母となつて娘の戀の邪魔をする。

我々日本人はこの物語を聽くと共に、その無意識自由聯想に依つて『舌切雀』を想起する。『舌切雀』の婆さん（惡母）は、自分の所有であるところの糊を盜んだ廉

に依り、雀（常に少女として子供繪に表現せられてゐる如く、たしかに娘の歪められた姿である）の舌を切つて（去勢して）放逐する。爺さん（父）は併し、娘を慕つてその跡を追ふ。爺さんは寶を以て報ひられ、婆さんはお化けを以て復讐される。我々はこれ等の物語に於いてエレクトラ（女エディポス）コムプレクスを認識せざるを得ない。

十六、遂に笑はずなりし人

梗概——バラム Bharam と云ふ青年は、元は富家の子であつたが、今は貧しくなつてゐる。彼は或る日、元の知人ファーラヅ Firuz に伴はれて、或る立派な家に行きそこで不思議なものを見せられる。さうしてその家の陰氣な人々の間で暫く暮してゐたが、それ等の人々はやがて死んでしまつたので、彼は何よりもその人達の話を知りたいと思ふ。かくて彼はその話を知ることになるが、それがその人の身の終りとなつた。

典據——モリスはこの話をアラビヤの七大臣の物語から借りて來てゐる。このアラビヤの話は英譯にもドイツ譯にもなつてゐる。英譯はジョナサン・スコット J. Scott がこれを試み、ドイツ譯はブレスラウ Breslau の千一夜物語の譯の中にある。

我々の話は五番目の大臣の話である。その大臣が自分の息子への死の宣告を早くしないやうに王にして貰ふ話である。でないと彼もやはり或る人——その人は罪への後悔のために生涯の間笑はなかつた——と同じやうに、早く死なねばならないことになるのである。ところで、その或る人の話が、この物語の內容である。

モリスがアラビヤの原書を參考してたは、考へられない。獨譯に存してゐて英譯に缺けてゐる特徵も取入れてあるところを見ると、英獨兩方の譯に依つたものであらうと、リイデルは斷じてゐる。

他の總ての物語の場合に於けると同樣に、この物語に於いても、詩人は典據の大體の特質を保存して細部では多少自由に振舞つてゐる。スコットの書いたところではその書き出しは、かうなつてゐる。或る金持が早く死んで、その息子はその遺產を蕩盡し、零落し、遂に飢えに迫られて日傭人となり、職を與へられるのを待つてゐる間に或る老人に會ひ、その老人が彼を傭つてくれると云ふことになつてゐる。モリスの物語に於いては、その書き出しは大分違つてゐる。まづ或る金持の家を點出し來り、その家の主人が來客を待つてゐると云ふことになつてゐる。そこへ零落した著者が來て、その富豪の門の側の大理石の塀に憑る。彼の顏付から見ると、彼は働くこ

とを知らない人間である。そこへ白馬に跨つた老人が來て彼の昔を知つてゐる者であることを告げ、その不幸を尋ね、彼を傭入れる。

モリスに於いては七人の、罪を悔ひ悲しんでゐる人々が出て來るが、典據に於いては十人の老人が出て來る。後悔せる十人の最後の者が、死に追付いた時に、（典據の方に依れば）好奇心が强い青年は、その老人の悲哀慟哭の原因を、尋ねずには居られない。老人は答へる『そんなことを訊いたつて碌なことはないから、よした方がおためぢやぞ、お若いの。お前さんも、そのために、わしたちと同樣の罰を受けるだらうと思つて、それが不愍ぢや。惡いことは云はないから喃、お若いの、あそこの錠のかかつた扉を開くんぢやないぞえ。』と云つて、向ふの扉を指したので、若者は一層そこを開きたいと云ふ願望をそゝられる。モリス作に依れば、バラム青年は始めの程は、この好奇心を克服し、自分の出身の都の豐かな財寶に滿足してゐたが、やはりこれには滿足しきれず二年の後に、再びこの老人の宮殿に戻つて來て、禁斷の扉を開くのであつた。すると、彼は更に一層仄暗い洞窟の中へ這入つて行く。暫くあちこちとさ迷つてゐたが、やがて意識を失つて地上に倒れる。程へて眼をさますと或る靜かな海の岸邊に居るのであつたが、（スコットに依ると彼をこゝへ連れて來たのは鷲であつた）そとからまた或る少女に依つて船に乘せられ連れ去られる。旣に舟中からして、彼はかなたに美姫の待つてゐるのを見る。彼は美女と美歌とに依つつて歡迎される。

結婚の直前に、（スコットに依ると）美姫は青年に、或る扉を開いてはならないと警告する。モリスに於いては、その美姫が青年と百ケ日の間、別れてゐるために、何處かへ行かうと云ふことになつてゐる。美姫がゐなくなると云ふことは、スコットにはないが、ブレスラウの獨譯の方には、その事が出てゐる。ところで、彼はさう云はれると、又もや好奇心を燃え立たせ、美姫の不在を利用してその禁斷の扉を再び開くことゝなる。スコットに依ると、彼はその室内に這入り、二十歩ばかりも進むと、そこで彼は昏倒する。そこへ、先に彼を運び去つた鷲が再び出現して、彼が出て來た元の入口のところへと連れ戻して了ふ。

モリスの作に於いては、バラム青年は自分の危惧が根據のなかつたことを發見する。そこの室は別に變つた樣子も見えず、たゞそこに卓子があつて、その上に水呑みがあり、更にその側に木片があつて、その木片に『大膽に飲め、思ひもよらぬ事が目に見える。』と書きつけてあつた。彼は思ひ切つて飲む、眠る、さうして目がさめ

ると、彼は先の悲しげな老人たちのゐる庭に再び戻されてゐるのであつた。

それからなほこの物語の最後のところにも、なほ一寸變化が加へられてある。スコットに依ると、この好奇の青年は『やがて老人たちの宮殿に入り、彼等の魂のために祈りをしてやり、さうして彼等と共に、死に至るまで嘆き悲んだ』とあるが、モリスに於いては、バラムは不幸な先行者たちの家に於いて何等の安息を見出さず、その死に至るまであちこちとさ迷はねばならなかつた。』さうして都の貧しい住居の方を好み、そこでその生涯の殘りを過ごした、とある。

分析――禁斷の扉の事は東洋の傳説に隨分多いが、あちこちの古城に多くある『開かずの扉』も、やはりこれ等の傳説に於けると同じ心理的根據から生じたものに相違ない。分析的に見れば、これは無論、母胎の象徴であることは、疑ふまでもない。母胎の象徴と輪廻の思想とが、いみぢくも一つに混融して、この傳説を形成してゐる。さうして『愛・卽・死』の詩人モリスにとつては、これは實にうつてつけの題材でなければならない。

十七、ロドープ物語

梗概――ギリシアの或る都に、昔、住んでゐた或る人が海賊との戰爭に行き、その分捕品を分配する時に、種々の寶物を受けたが、中にも可愛らしい銀の靴が手に這入つた。その時以來、彼はする事なす事不運であつて、段々貧乏するばかりであつた。遂に彼は愈々困りぬき、この大事の靴を手離すことにした。この靴は、近所に居る神僧が欲しいと云つてゐたので、彼はこの靴を一人娘のロドープに持たせて、神僧のところに遣つた。

ところでこのロドープは彼の夫婦の間の一人娘で非常に美人であつたが、人中に出ることを好まず、その僧の息子との玉の輿にさへ乘らうとはしなかつた。物好き心からその靴を穿いて寺院へ行く途中で、ロドープはその神僧の息子と出會し、息子からまたその愛を語られるが相手にせず、お父さんは居られるかと尋ねる。ところがその神僧は不在であると云はれたので、待つ間の徒然を慰めるために、池に浴みしてゐた。浴みしてゐる間に、彼女の脫ぎ棄てゝゐた例の不思議の靴は、高空から舞ひ下つて來た鷲に奪はれ、何方へともなく知らず、また運び去られてしまつた。靴を奪はれた事を知つても、ロドープは別に驚かず。却つて嬉しいやうに思つた。とにかく忽ち氣も輕やかになつたやうに覺え、そのまゝ直ちに家に歸つて來て了つたが、それ以來、家運も漸次に挽回して行つた。

一年程經つて彼女は或る港町に買物に遣らされた時、そこに異國の人々が祭壇に、自分が嘗て鷲に奪はれた靴を三脚臺の上に大事さうに据えてゐるのを見た。彼女はその靴の片方のを脱いで、貴方方はこれを捜してゐられるのですかと、その異國人等に尋ねた。異國人は喜びの叫びを擧げ、鷲がこの靴を彼等の王様の前に落したので王はこの靴を穿いてゐた女以外の女とは斷じて結婚しないと云ふので、一年も前から彼等は遙々その女を諸國に尋ね歩き、今この祭壇に捧げものをしてゐるわけであるが、到頭尋ねるその人を捜しあてることが出來、こんな嬉しいことはないと答へた、かくて、彼等はその翌日、ロドープを連れて、その故國の王の許へと歸つて行つた。

典據と分析――この物語に類似の話はイーリアナス Claudius Aelianus（紀元二二〇年頃の人）の Varia Historia XIII, 33 にある。またストラボー Strabo（紀元前六四年頃に生れたギリシアの史家）の Geogr. XVII, 808 にも出てゐる。モリスがこれ等の典據に依つて、この物語を書いたことは疑ふ餘地がない。ロドープと呼ぶ少女に就いては、ヘロドトス Herodot もその史書の第二編、一三四、一三五章の間に書いてゐる。さうして寓話家イソップとは同じ奴隷仲間であつたと云つてゐる。イーリアナスとストラボーとに出て來る少女と、ヘロドトスに出て來るのとが同じものであるかどうかは我々には明かでない。ヘロドトスのロドープはエヂプト女王ニトクリスの事であると、ドイツの神話傳說學者リニッヒ Linnig は云つてゐる。リニッヒはまた、このロドープの物語がシンドレラの物語と、二つの點（靴が證據になる點と、身分の賤しい娘が異常な出世をする點）に於いて共通してゐると云つてゐるが、それは誰しも認めるところである。また靴が愛神的象徵となつてゐる點を研究してゐる者には、リイブレヒト（Liebrecht, Zur Volkskunde 492 ff.）がある。

この物語は、非常に內容複雜で、簡單に分析解釋することは出來ないが、シンドレラ物語と比較研究して見るならば、これは幼兒の里子空想、ナルチスムス、出世願望などであらう。またシンドレラ物語に、死の願望が見られる（フロイドの論文「匣選みの主題」を參照のこと）やうに、このロドープにもそれが認められると思ふ。彼女が男（神僧の息子）を拒否して、水浴（入水）してゐる間に、靴（彼女自身の本質の象徵）が高く天上に昇ると云ふことは、彼女の男性忌避と現實逃避とを意味するものであるやうに思はれる。因みにロドープ Rhodope とは Rosenwange（薔薇の頰）卽ち美貌の意である。

十八、グウドランの戀人たち

梗概――九百年前、アイスランドの西海岸に、ハードホールト Herdholt の大農場があつた。そこの主人を孔雀のオーラフ Olaf the peacock と云つて、人々これを尊敬してゐた。妻をソーガード Thorgerd と云つて、二人の間に五男二女があつた。然るにオーラフの兄弟ソーライク Thorleik の子ボードリ Bodli はこの家に育てられ、オーラフの長男キアルタン Kiartan とこのボードリとは從兄弟ではあつたが、非常に仲がよく、却つて兄弟以上親密であつた。

オーラフの親友なるオスキフ Oswif は、ハードホールトから七哩離れたバーススステット Bathstead に住んでゐたが、彼には五男一女があつて、その一女の名をグウドランと呼び、當時十五歲の美少女で、この一家の花であつた。

或る日、兩親の不在中に、グウドランの家に白髮の老人が來訪した。彼は時に人々の將來の豫言する力を持つてゐたので、人々彼を『賢者』と呼んでゐた。グウドランは來客を歡迎し、種々待遇してゐる內に、グウドランが嘗て見た四つの夢の話が出る。その話と云ふのは、かうであつた。――第一の夢に於いて、少女自身は小川のほとりに立つてゐた。その時急に、彼女は自分の纒ふてゐる帽子が醜く不似合であると考へ、それを頭から引離して川の中に投げて了つた。と、彼女は眼がさめて、大笑ひをした。第二の夢に於いては、少女は大海の岸邊に立つてゐた。その時、彼女の腕には白銀の輪が掛つてをり、彼女はそれを非常に好いてゐたが、それを手で握つた時に、その銀輪は滑り落ちて波間に匿れて了つたので彼女は宛も親しい友を失つたやうに嘆くのであつた。第三の夢に於いては、彼女は自宅の近くの道を步いてゐてその腕に金の輪が掛つてゐた。突然、彼女は倒れさうになつたので、自分を支へるために手をさし延べた時に、輪は石に當つて二つに碎けた。さうして壞れた端から血が流れ出た。彼女は悲嘆に暮れてそれを眺めてゐたが、こんな不幸なことになつたのは、その金輪そのものゝ咎ではなくて、自分の咎であるやうに思はれた。第四の夢に於いて、彼女は寶石をちりばめた金甲を冠つてゐた。それは重かつたが、それを戴いてゐる事が自慢で、重いことは何とも思はなかつた。永くそれを頂いてゐたいと思つてゐたのだが、突然それは彼女の頭上から滑り落ちて、風雨荒々しい入江の中に見えなくなつてしまつた。彼女は泣かうと思つたが、淚も出て來ず、その時眼がさめた。』

老賢者はこの夢を判斷して、かう云つた。——彼女の見たその帽子とは彼女の夫君で、彼女はその夫を愛せずその破れ帽子のやうに捨てゝ了ふであらう。銀輪は愛し愛される第二の夫君であるが、緣は長からず、彼女の側から引離される。金輪は第三の夫君で、これは第二のよりは彼女の愛に價する男であるが、併し悲嘆に導く如き缺點を持つてゐる。金甲は彼女の第四の夫君であるが、彼もまた入江に呑まれて死ぬので、彼女は悲嘆するであらう。

　彼女の運命は、果してこの夢の解釋の如くなり、始めの二夫はソーワルド Thorvald とソードと Thord であつたが、程なく別れ、第三に現れたのがキアルタンであつた。さうしてキアルタンと仲のいゝボードリは、常にキアルタンと同行してゐた。從つてグウドランを中心として二人の仲のいゝ青年の間に戀愛の悲劇的なシチュエーションが生ずることになつた。キアルタンはグウドランと相愛し、二人は極めて幸福であつた。さる程にキアルタンはアイスランドを離れてノルウェイに行つて、そこのオーラフ・トリグギゾン王に事へなか〳〵歸つて來ない。ボードリも途中まで同道したが、先に歸國した。

　グウドランは愛人の歸國せぬに焦慮した。ボードリはキアルタンがオーラフ・トリグギゾン王女と戀仲になつてゐるから、なか〳〵歸國すまいと云ひつゝ、彼女の愛を求めたが、グウドランは、初めの程は憤りを以て應へ、中頃無關心的であつたが、遂にそれを受容れて了ふことになる。ところが間もなく、キアルタンは歸國することになつたので、グウドランは自分を欺いたボードリを痛烈に批難する。ボードリは良心の苛責に深く懊惱する。キアルタンも歸國してこの事を知り、友の不信に深く苦惱する。その後、いろ〳〵の經緯があつて、キアルタン、ボードリ、グウドランの三人を圍む人々の間の感情と事情とは、非常に込入つて來るが、キアルタンはレフナ Refna と云ふ別の女（キアルタンをノルウェーに運んだ船長の娘）と結婚し、グウドランとボードリとの夫婦生活はそのまゝに存續してゐる。併しボードリは良心の苛責に惱み、キアルタンとグウドランとは相互の愛着を忘れ兼ねてゐると云ふのが底の事情であつた。然るにこゝにグウドランの兄弟たちはキアルタンとボードリとを憎んでゐるので、（それも實はキアルタンとレフナとの結婚を妬むグウドランの唆かしに因るのであるが）この二人を嚙み合はせようとたくらむ。キアルタンが供の者も僅かに遠出する機會を覘ひ、これを道に擁して暗殺しようとする。ボードリはその先頭に立つてはゐるが、彼は實はキアルタンを殺す意志はなく、寧ろ彼に殺されるこ

とを願望してゐたのであらうと思はれる。この危険な行動にその夫ボードリを、知つて出してやつたグウドランは、自分の最も愛してゐる男を他の女に與へておくよりは、これを殺して了つた方が…と云ふ心理ではなかつたかと思はれる。キアルタンは攻撃し來るボードリ以外の者等を勇敢に撃退するが、最後にボードリが澁々向つて來た時、故意に自分の大刀を取落してボードリの刃を彼の傍腹に貫通させるのであつた。キアルタンの死體を見た時、グウドランの心の氷は始めて解け、今や苦惱と後悔との涙を彼の屍の上に注ぐのであつた。

その後、レフナは夫の死に絶望して敢なくなり、ボードリはキアルタンの身內の者等に復讐されて死し、グウドランはまたその後の夫に見ゆるが、晩年は平穏の內に過ごすのであつた。或る日、ボードリとの間に出來た息子の尋ねるまゝに、彼女の數々の夫の思ひ出を語るが、最後にキアルタンの事に及び、『私は自分の最も愛した人に最もつらくあたつた』"I did the worst to him I loved the most." と述懐した。

典據と分析――モリスがこの作を書いたのは、一八六九年六月で、彼がアイスランド傳説に沒頭し始めたのがその前年からであるから、丁度その研究から生れ出た子の一人であつたと云ふことが出來る。これより先、同年四月には、"Story of Grettir the Strong" を書き、これより後一八七〇年には "The Story of Volsungs and Niblungs" を書いてゐる。

『グウドランの戀人たち』の典據となつたのは、"Laxdaela Saga" で、モリスは多分それの Hafniae (1826) 版を用ゐたのであらう。

この物語の特色は各人物、殊にその主人公グウドランの性格の顯著な點にあるが、リイゲルの云ふどころに依ると、典據に於いて既にその性格描寫は甚だ判然してゐるさうである。が、併し典據に於いて描かれてゐるところでは、見えてゐるその性格の低調なところもモリスに於いては除かれて、グウドランの性格は、その缺陷はともかくとして、甚だ强烈な、高調な、雄偉なものとなつてゐる。

愛憎二元の兩極性(アムビファレンツ)は甚だ顯著に發現し、强烈な愛が强烈な憎みとなつて、その愛人の上に迫る趣は、實に悲劇的であり、北歐的である。我々は同じく北歐の傳說であるニイベルンゲン物語の女主人公クリイムヒルデの復讐譚を聯想して、この北歐傳說の共通特質を認識せざるを得ない。この物語に於いてのみ、我々はモリスの他の物語に於けるやうな夢幻性を發見することが比較的少い。誠に、現實の人間性が痛烈に、血

のしたゝる如くに描寫されてゐる。

十九、黄金林檎

昔、あるフェニキアの舟が故郷タイヤーに向つてギリシアの海を舟出した時、これに便乘させてくれとて呼留めた二人の男（一人は强さうな若者、一人は老人）があつた。彼等は澤山の贈物をして乘船を許されたが、航海の途次、暴風雨が起つて舟は却つて西方に押流された。二十日の漂流の後に、舟はヘスペリデスの島に着く。二人の便乘者は如何にも目的の地に達したやうに上陸したので、舟人たちは始めて、こゝに漂着したのは彼等乘船の本來の意圖であつたのだと感ずる。

ハーキュリーズとニヤリウス Hercules and Nereus の二人はヘスペリデスの園の前に行き、ハーキュリーズは園の壁を棍棒もて打開し、單身侵入して行く。ニヤリウスは見えなくなる。園の中に黄金の林檎の實る樹が立つてゐて、その周圍に三人の乙女と恐ろしい蛇とがそれを見守つてゐる。ハーキュリーズはその蛇を殺し、黄金林檎を奪ひ、さつさと引揚げて行く。乙女等は顏色も變へず、默つて見送つてゐた。園の門の前で見えなくなつたニヤリウス老人は、またその姿を現はして、ハーキュリーズと共に舟に戻つて來る。舟の中でニヤリウスは舟人たちに語り聞かせた。——如何に自分がさま〲な姿に形を變へてもハーキュリーズには克服されるかを——。如何に彼がハーキュリーズに强制せられて、ヘスペリデスの島に導いて行つたのであるかを——。で、如何に近くに居合せたこの舟を呼び留めて乘り込み、黄金林檎獲得の目的に資したのであるかを——。語り終つてこの海神は海鷗の姿に身を變へた。かくてこの舟は芽出たくその目的を果して、タイヤーの方へと歸航して行つた。

典據——イウリスティウス Eurystheus 王の命を受けて、ハーキュリーズが第十一番目に行つた冐險は、このヘスペリデスの林檎獲得の仕事であつた。

ハーキュリーズが神々の園に行き、恐ろしい蛇を殺し自力を以てその樹の林檎を奪つたと云ふ物語は、アポロドールにも、ポンポニウス・メラにも、プリニの博物書中にも、ストラボーにも見られる話である。またプレッラのギリシア神話書や、ハーン Hahn の傳說科學研究書中にもある。スミスの古典小辭典には、ヘラ Hera がヂウスと結婚した時、地神ゲーがヘラに與へたのがこの林檎であると云つてゐる。

結婚に關係あるこの林檎を三人の乙女と蛇とが番してゐるのを、猛者が勇氣を以て奪ふと云ふ話は、何としてもそこに象徴的意義の存することを、否むことが出來な

い。併し、その象徴の果して何であるかは、私こゝに明言することを避けておかう。只今の場合、その證明が確實でないからである。

二十、アスラウグの養育

梗概――ブリュンヒルド Brynhild はその愛する夫シガードに死なれて、自分もその後を追ひ、あとには三歳になる一女アスラウグが殘された。で、この孤兒の世話をすることになづたのは、ブリュンビルドの養父ハイマー Heimir であつた。

ハイマーは始めの内は悲嘆に暮れてゐたが、かくてはならじと思つたか、その翌日から鍛冶場に一人籠つて連りに何かを作つてゐた。十日ばかり經つて、彼は鍛冶場から出て來ると、アスラウグを連れて何處へともなく行つてしまつた。久しく歸つて來ないので、人々は彼等が死んでしまつたものと思つてゐたが、二人は死んではゐず、たゞ二人とぼ〳〵とアトリ Atli の國へと遙かな旅に出てゐたのであつた。ハイマーは腰に劍を下げ、肩に竪琴を負ひ琴の太いところの空洞の中にアスラウグを容れて、森を越え谷を渡つて遠くへ〳〵行くのであつた。

遂に日は暮れて、彼はとある小屋の前に立つて一夜の宿を乞ふた。中からは痩せた老婆が出て來て、粥を作つてゐたが、ハイマーの持物の見事なのに目をつけ、これはうまい鴨が飛込んだと睨んで、彼を物置に休ませた。夜中、彼女はその氣の弱い夫を督し、自分等が富者になるべき千載一遇の好機とばかり、老人をその熟睡中に襲撃させ、鎗を以てその心臓を貫き殺させた。やがて思ひがけなく、竪琴の胴の中から幼兒アスラウグが出て來たが、これは殺さず、その美事な衣裳を奪つて、子供は下女代りに酷使する事にした。

アスラウグは惡い老夫妻に對して始めから全く沈默の戰法をとり、年頃になつても老夫婦は彼女を啞と思つてゐた程であつて、たゞ山野に逃れた時、自然草木を友として思ふ存分歌ひ戲れた。或る時、彼女が山に登つて脚下の灣を眺めてゐると、灣内には美事な帆船が投錨し、舟人が上陸しつゝあるのが見えた。ところで、このあたりには家としては、自分の居る小屋以外にはないので、何處の珍客が自分の家に訪れたのであらうかと、彼女は大急ぎで驅け戻つて見る。舟人等はこの家で必要の食料その他を得ようと思つて來たのであるが、喰へるやうなものは得られなかつた。併し娘の美しさには一驚を喫して歸船した。歸船した舟人たちから娘の美しさを聞いた船主なるデムマークの貴人ラグナア Ragnar は、その娘を見たいから連れて來よとの御諚である。舟人たちは、再

び小屋に引返して老婆を說いたが、老婆は自家の品物を高價に買入れて呉れた人の申出を斷りきれず、澁々承諾した。

アスラウグが舟中に行くと、公子ラグナアは非常にその美を讃え、殊に舟人たちから彼女が啞であると聞かされてゐたのに、立派に口を利くことが出來ることを發見して、一層嬉しく思つた。二人の間に戀は直ちに燃え上り、ラグナアは彼女を妻にと乞ふたが、公子がこれから果すべき光榮の事業を終へて歸るまではと、これを拒んだ。二人は互に惜しい別れの內に、再會の日を樂しむのであつた。

その後十二ケ月は過ぎ去り、五月の或る朝、公子ラグナアは約束の如く、この灣に船を寄せた。アスラウグは老婆に財寶を與へて別れを告げ、芽出たく公子と舟中に結婚をする。その第一夜の夢に、ラグナア、アスラウグ共に、天國にゐるシガードとブリュンビルドの事を見、それに依つてアスラウグの生れの尊いことが始めて明かとなつた。

典據と分析——アスラウグの物語は、Wölsunga Saga と、Ragnar Saga Lodbrokar にそれぐ〵部分的に出てゐる。さうしてハイマー逃亡の物語は、Wölsunga 傳說群の最後に、第四十三章に書いてある。さうしてラグナア傳說の第四—八章にも、後日物語が出てゐると云ふ。

モリスは例に依り、大體の筋に於いて典據に從つてゐるが、細々したところでは自由に振舞つてゐるやうである。『たゞモリスが落して了つてゐる一つの事柄は』とリイゲルは云つてゐる。『この物語の筋に於いて必ずしも無用のものではなからうと思ふ。卽ち、アスラウグが舟人等に伴はれてラグナアの船に來たとき、ラグナアは彼女に謎を課したことである。——彼女は着物を着て來てもいけないし、着て來なくてもいけない。彼女に食物を饗してもいけないし、饗さなくてもいけない。また彼女は單身で彼の前に現れてもいけないし、人が從つて來てもいけないと云ふのである。私はこの點に相當重要な意味が含まれてゐるのだと思ふ。何となれば、アスラウグがこの謎を美事に解いた、その悧巧さが、彼女の美貌と共に、この公子をして彼女をその妃にすることに決心せしむる原因となつたのだからである。この點に就いてはまたグリムの „Kinder-und Hausmärchen," III^3 170 を參照ありたし。』と。

モリスは、恐らくは近代の他のあらゆる傳說文藝家と同じやうに、典據中の比較的不合理な、滑稽的に荒唐無稽な要素を出來るだけ抑壓する方針をとつてゐることは已むを得ない。併し彼は勿論、合理主義一點張りなどで

はない。また詩人特有の鋭さを以て各々の傳說の心理的意義を表現してゐるところも、固より多々である。リイゲルが指摘してゐるこの個所はモリスの本文にないのであるから、筆者には只今こゝでリイゲルの說に就いて何とも云ひようはないが。アスラウグがその美事な、長い金髮を以てそのみすぼらしい着衣を匿したと云ふところがあるから、恐らくそのやうな方法を以てこの謎を解いたのであらうと察せられる。この謎の解き方が分らなければ、この謎の意義の分析も最後的解釋を與へ得ないから、これまた控へておく。

この物語の分析的解釋は如何？　我々の無意識聯想は直ちに、シンドレラを想起せしめる。その主人公たる少女が微賤より身を起して異常な出世をする點と、その啞（よしんばその眞似をしてゐることになつてゐるにもせよ）である點とで、兩者は共通するが、併しアスラウグは元は身分のよい者であつたと云ふ抗議が出るであらうが、傳說に於ける空想性は、かゝる點をその願望に基く妄想として分析解釋することを我々に許す。分析術語を以てすれば、養父母空想（里子空想）である。養父母空想の事を、英語では foster-parent-phantasly と云ふが、このモリスの物語にも fostering と云ふ語の用ゐてあるのは興味がある。

わが國のシンドレラ型傳說としては『紅血・缺血』がある。この物語の主人公もやはり啞である點では　シンドレラのみならず、このアスラウグとも共通してゐる。シンドレラと紅血、缺血との關係に就いては拙稿『リヤ王と缺血』（昭和七年四月號「藝術殿」）を昭照ありたい。

養父母空想のわが國の典型的な傳說としては竹取物語がある。赫耶姬が竹取の翁夫妻の實子であることに就いては證據があるが、それが天界の者と自惚れて昇天して了ふのであつた。アスラウグは階級的に昇天して了つたのであつた。その點が竹取物語の赫耶姬と違ふと云へば云へるのみである。

×

なほ四篇の物語が殘つてゐるが、已むなくまた來月に延す。讀者諸氏の寬恕を乞ふ。（未完）

逃　亡　（カェサリン・マンスフィールド作）

"The Escape" (1920) ——Katherine Mansfield.

岩倉具榮譯

彼等が汽車に乘り後れたのは、彼の誤ちであつた。全く彼一人の誤ちであつた。どんな馬鹿なホテルの奴等が勘定書を差出すことを拒絕したりしよう。二時迄に勘定書を持つてくるやうにと、晝食の時に給仕によく云つておかなかつたばかりに、さうなつたのではなかつたか。他の人だつたら、ホテルの者が勘定書を渡してくれる迄は、そのまゝ食堂に止つてゐて、席を立つことを拒んだらう。ところが彼等はさうでなかつた。彼はあまり人間の性質を信じ過ぎてゐる爲、席を立つてホテルの馬鹿者の一人が彼等の部屋に勘定書を持つて來るのを待つてゐたのである。…それから車（Voiture）が着いた時には、彼等は未だ（ほんとに何て事だらう！）釣錢の來るのを待つてゐたやうな始末だつたのだが、少くともその金が渡されるや否や直ぐに出發出來るやうに、彼は車席の云付けを何故しておかなかつたのだらう。彼女が外に出て、暑い中を日除の下に立つて、彼女のパラソルで合圖をしてくれるとでも彼は期待したのであらうか。イギリス家庭生活の大變樂しい光景さ。彼は馭者に大急ぎでやつてくれと云つた時にさへ、ぼんやりしてゐて——たゞニヤ〳〵してゐるだけであつた。『おや〳〵』と彼女はうめいた。『若しも私が馭者だつたら、こんな呑氣さうな樣子をして居ながら、口さきだけで大急ぎだなどゝ云ふ滑稽なやり方を、笑はずにはゐられなかつたでせう。』そして、彼女は後に腰掛けて彼の聲を眞似た。『急いで、早く、早く』（Allez, vite, vite）そして馭者にはさぞ、うるさかつたらうと思つてあやまつた。…

やがて停車場――忘れもしない停車場――へ來ると、陽氣な小さな列車がノロノロと動き出すのが見え、憎らしい子供達が窓から合圖してゐる。『おゝ、どうして私はこんな目に會ふのでせう。どうして私はこんな羽目になるんだらう‥‥。』待つ間もなく、人々の目がちらついて、ほんとにうるさい。そして彼と驛長とは、時間表の上に額を集めて、この別の列車を見付けようとしてゐるが、勿論、彼等はこの列車には乘る氣はなかつた。周りに集つて來る人たちつたら、變な顏の赤ん坊を抱いた女の人つたら‥‥。『おゝあの人たちは私の氣持などは――私の感情などは――而も少しも救はれないのだ――これがどんなか、一瞬間だつて分らないのだ‥‥。』

彼女の聲は變つた。それはもう震へてゐた――もう泣いてゐた。彼女は袋をまさぐつて、その中から香水をつけたハンカチーフをとり出した。彼女はヴェイルを上げて、宛も他の誰かの爲にしてゐる樣に、憐むやうに、宛も他の誰かに話掛けてゐる樣に、云ふのであつた。『よく分つてゐますよ。お前さんの氣持は‥‥』、さうしてハンカチーフを目におし當てた。

その小さな袋の口は、銀色に光つて、彼女はそれを膝の上に載せた。彼は彼女の白粉刷毛、べにさし、一包みの手紙、種子の樣な小つちやい黒い丸藥の硝子瓶、くしやくしやになつた煙草、鏡、それからごたごたと書き込んである白い象牙の銘板、等を見た。男はそれを見て、『エヂプトでなら、彼女が死ねばさういふ物も一緒に埋めるんだらう』など考へてゐた。

彼等は愈々最後の家をあとにして進んだ。それ等の小さな家はごたごたと並んでゐて、その花の床には壞れた壺の小片がちらばつてをり、戸口の踏段の周りには毛の半分むしれた鷄が何か連りにひつかき廻してゐた。今や彼等は、丘をめぐつて灣に迄まはりくねつてゐる長い嶮しい道を登つて行つた。馬はあまりに重いものを曳かされてか、つまづいた。五分毎に、二分毎に、馭者は馬に鞭をあてた。彼の丈夫な背中は木の樣に頑丈であつた。彼の赤い頸には腫物が出來てゐた。そして彼は新しい、光る樣に新しい麥藁帽を冠つてゐた。

少し風が吹いてゐた。それは丁度果樹の新しい葉を繻子のやうに吹き立て、綺麗な草をなごやかに撫でさすり、煙色のオリーブを銀色に見せる位に吹いてゐた。――丁度車の前に渦卷を起させ、非常に細かい灰の様な塵を彼等の着物の上にためる位の風であつた。彼女がその白粉刷毛を取出した時に、白粉は彼等二人の上に飛んで來た。『おゝ、ほこりが』と彼女は溜息をした。『いやな捲上るほこり。』そして彼女はヴェイルを下して、宛かも打ちひしがれた様に後にもたれかゝつた。

『何故、日傘をさゝないの?』と彼は云つて見た。日傘は前の席にあつた。で、彼はそれをとつてやらうと思つて、前の方によりかゝつた。それを見て彼女は坐り直して、又怒り出した。

『私の日傘ならほつといて下さい! 私、日傘なんか要りませんよ! 私こんなに疲れてゐるのに、日傘なんかさしてゐられるかゐられないか、それが分らないなんて隨分鈍感な人だわ。それに、こんな風に傘をさしてゐるなんて骨が折れて....。もう止めておいて下さい』と彼女はせいて、その上彼から日傘をもぎ取つて、後の皺になつた幌の中に投げ込み、そしてあへぎ乍ら崩折れて了つた。

道をもう一つ曲ると、山を下つて一隊の小さな子供達が叫んだり、クスクス笑つたりしてやつて來た。小さな娘は日に焦けた髮をし、小さな男の子は色の褪せた兵隊帽を冠つてゐた。彼等は手に手に花を持つてゐた――いろんな種類の花を――花の頸の邊をひつつかんで、車の側をかけ乍らこれ等の花を差出すのであつた。ライラック、色褪せたライラック、綠白の山榮樹(カンボク)、百合の花、一握のヒヤシンス。彼等は花を、茶目らしい顏を、車の中に突込んで來た。ある子供などは、彼女の膝に一束の金盞花を投込んだりさへした。哀れな鼠つ子達! 彼は、彼女の前で自分のズボンのポケツトに手をさし入れた。『決して子供達には何もやつてはいけませんよ。まア、あなたらしいわね! 困つた、小さな猿共! もうかうなつては彼等は道中しまひまで吾々について來ますよ。彼等を奬勵しないで頂戴。あなたは乞食を奬勵なさるのね。』それから彼女は車中から花束を投げ出した。『ねえ、どうか、私の居ない時にして頂戴。』と云ひながら....。

彼は子供達の顔に妙な驚きを見た。彼等は、かけるのを止め、後れて了つた。それから彼等はまた曲り角を曲る迄叫びつゞけた。
『おい、丘の頂上に着く迄は未だどの位あるのかね？　馬は一度も驅けないんだね。ずうつと歩かせてばかりゐる必要は慥にあるまい。』
『もうほんの少しです』と彼は云つた。そして、煙草入れを取出した。それを聞くと彼女は男の方へぐるりと向きかへつた。彼女は自分の兩手を摑んで、胸の所に持つて行つた。彼女の黒い眼はヴェィルの後に、深く、哀願してゐる樣に見えた。彼女は鼻孔をふるはせ、唇をかんで、頭は少し痙攣でふるへた。けれども彼女が話をした時にその聲は全く弱く、そして極く輕く靜かであつた。
『私、あることをあなたにお尋ねしたいのです。あなたに或ることをお願ひし度いのです。』と彼女は云つた。『私は以前にも何遍もあなたにお願ひしたのに、あなたは忘れてお了ひになつたんです。それはほんのつまらないことなんですが、私に取つてはどんなことかを若しあなたが分つて下さればねえ……。』彼女は兩手をギュッと握りしめた。『けれどもあなたは分りませんわ。どんな人間にも分らないし、又あなたほど殘酷でもありません。』それから、ゆつくり、まじ〳〵と、大きな淋しい眼で彼を見つめながら彼女は云つた。『私達が一緒に車に乘つてゐる時には、煙草をのまないやうに、これを最後に、私お願ひしますわ。煙草の煙りが私の顔のあたりにたゞよつて乘る時に、私がどんなに苦しむか、考へても見て下さい……。』
『宜しい』彼は云つた。『のまない。忘れてゐた。』そして、彼は煙草入れをしまつた。
『おゝ、いゝえ』彼女は云つた。そして殆ど吹き出しさうであつた。それから、手のうらを眼の所に翳した。『あなた、忘れて了つたなんてことないでせう？　そんなことありませんわ。』
風は益々強く吹いて來た。彼等は丘の頂上に來た。『ハイ、ハイ』と馭者は叫んだ。彼等は小さな谷にはいり込む道をゆれ乍ら下りて行き、谷の下の海岸に沿うて進み、それから、向ふ側のゆるやかな高地を越えてまがつた。さて

そこにはまた家があり、日除のためにあおいひがしてあつて、庭は輝き燃えてをり、桃色の壁にはゼラニウムの敷物がかゝつてゐた。海岸線はうす暗かつた。海の端の方では白い絹の様な縁が丁度動いてゐた。車は丘をゆれつゝ下り、ドンとぶつかつて振動した。『ハイ、ハイ』馭者は叫んだ。彼女は席の兩側を掴み、眼を閉ぢた。そして彼は、勝手にこんな目にあつてゐるのだと彼女が感じてゐるのを知つた。この振動と衝撃とは、――もう少し早く行けないかと彼女が賴んだために、彼女への面當てに、みんな爲されてゐたのだから――。尤も、それには、彼にも多少の責任はあつたが――。けれども、彼等が谷の底に着いた丁度その時、不意に恐しく傾斜した。車は殆どひつくりかへりさうになつた。そして彼は、彼女の眼が自分に對して燃えてゐるのを見た。すると彼女は、斷然と非難して云つた『あなたは今、いゝ氣味だと思つてゐらつしやるんでせう？』

彼等は進んで行つた。彼等は谷の底に着いた。急に彼女は立上つた。『馭者さん！　馭者さん！　早く、早く急いで頂戴。』（"Cocher ! Cocher ! Arrêtez-vous !"）彼女は見廻して、後の皺になつた幌をのぞき込んだ。『私知つてゐましたわ。』彼女は叫んだ。『私知つてゐましたわ。私、あれの落ちるのを聞いたんです。あの最後にどんと來た時に――。あなたも承知してゐたんです。』

『何だつて？　何處で？』

『私の日傘よ。なくなつて了つたのよ。お母さんの日傘だのに。私がそれは――それは大事にした日傘だのに……。』

彼女はたゞもう、我を忘れてゐた。馭者はぐるりと向きかへつた。彼の廣い顏は愉快げに笑つてゐた。

『わしにも何か聞えましたつけ。』彼は簡單に、愉快げに云つた。『だが、わつしは旦那も奥さんも何とも云はなかつた様に思つたんで……。』

『あら、お前さんにも聞えたつて？　ぢやア、あんたにも聞えたに違ひないんわ。そうれ、そんな顏して變に笑つてゐるぢやないの、それ見たつて分るわ。……』

『そこら見て御覽』と彼は云つた。『なくなつた筈はないよ。落ちたとしたら、未だその邊にあるだらう。このまゝ

動かないでね。僕が捜して來るから。』

けれども彼女はそれを見貫いた。おゝ、如何に彼女は見貫いたか！『いゝえ、いゝんです。』さう云つて彼女は、馭者のゐるのも構はずに、その怨めしげな、微笑の眼を彼に向けた。『私自分で行きますわ。私引きかへして歩いて見付けて來ますから、屹度ついて來ないで下さいね。だつて』――馭者には分りつこないと知つて、彼女はおだやかに、やさしくかう云つた――私、一寸の間、あなたから逃げなけりや、氣が狂ひさうよ。』

彼女は車から下りて歩き出した。『私の袋。』彼はそれを、彼女に渡した。

『奥さんのお好きな様に……。』

けれども馭者はもう彼の席からとび下りて、欄干の上に腰掛け乍ら小さな新聞を讀んでゐた。馬は頭を垂れて、立つてゐた。靜かであつた。車の中の男はのびをして、腕を組んだ。彼は、太陽が膝にあたつてゐるのを感じた。彼の頭は胸の上に垂れてゐた。『ヒュッ、ヒュッ』といふ音が海から聞えて來た。風は谷の中で溜息をして、靜かであつた。彼はそこに横になつて、自分を、宛かも灰の様にうつろな男、ひからびた、しなびた男の如くに感じた。そして海は音を立てゝゐた『ヒュッ、ヒュッ。』と。

彼が樹立を見たのは、それが丁度庭の門の內側にあるのを氣付いたのは、その時であつた。それは圓くて厚い銀色の幹と、光をてりかへして而もくすんだ色をした大きな弓形の銅色の葉とを持つた、大きな樹であつた。その樹の向ふ側に何かがあつた。――何か細い柱のある何か白い、柔かい、透明な塊が、半ば隱れてあつた。――彼はその樹を見てゐると、自分の呼吸が止つて了ふやうに感じ、彼はその靜寂の一部分となつた。その樹は益々成長し、ふるへる熱さの中に擴がつて行く様に見え、とうとう大きな刻み目のある葉は空をかくして了ふが、それでもその樹は靜かであつた。その時、その底から、又はその向ふ側から、一人の女の聲が聞えて來た。女が歌を歌ふ聲が聞えて來た。熱心な、何物にもわづらはされない聲は、空中にたゞよつた。そしてそれは、彼が靜寂の一部分であつた様に、凡て靜寂の一部分であつた。急にその聲がやわらかく、夢見る様に、おだやかに起つて來た時、彼はそれがかくれた葉から

彼の方に流れて來るのを知つた。そして彼の平和は破られた。彼はどうしたのだらうか。何事かゞ彼の胸中に起つた。何か暗い、何か堪えられない、又恐ろしいことが彼の胸にこみあがつて、大きな雜草の樣にゆらゆらとなびき動いた‥‥あたりは溫かくて息が詰まりさうであつた。彼はそれに打勝たうと踠いて見た。すると同時に――凡ては終つた。深く深く、彼は靜寂の中に沈み、樹を見つめてゐた。さうして女の聲が流れ、落ちて來るのを待つた。が、やがて彼は自分が沈默の中にすつかり包まれてしまふのを感じた。

‥　‥　‥　‥

汽車はガタ／＼ゆれてゐた。車室外に立つてゐた。夜であつた。汽車は暗をつらぬいてつき進み、唸り聲を立てた。彼は兩手で眞鍮の手摺をしつかり摑へた。彼等の列車の戶が開いた。

『御心配なさらないで下さい、車掌さん。あの人は氣が向けば入つて腰を下しますから――。あんなことが好きなんです――好きなんです――あの人の癖なんです‥‥。‥‥はア、奥さん、私は少々惱まされます‥‥私の神經がね。(Oui, Madame, je suis un peu soffrante‥‥Mes nerfs.) おゝ、併し自家の夫は旅行してゐる時程、幸福なことはありません。あのひとは不自由な旅行が好きなんです。‥‥私の夫は‥‥私の夫は‥‥。』

その聲はつぶやいた、つぶやき續けた。その聲は少しも默つてゐなかつた。けれども彼はそこに立つてゐた時、その天國の樣な幸福が大變大きなものだつたので、彼は永久に生きてゐてもいゝと思ふのであつた。（完）

時言六題

大槻憲二

一、非醫者の分析者出でよ

精神分析學は、その父祖フロイドが醫家であつたゝめに、醫者でなくてはこれを研究するに、實施するに不適當なものであるかの如くに誤解されてゐるらしく、この誤解もまた斯學の健全な發達を阻害してゐる原因の一つではないかと思はれる。

併し精神分析學は心理學であつて、醫學ではない。治療に關係するものは總て醫學の範圍內にある如く思ふのは、最も俗な考へ方である。フロイド自身が、既にかう云つてゐる。『精神分析は心理學の一部である。また陳い意味に於ける醫術的心理學又は病的過程の心理學ではなく、當り前の心理學である。慥に、心理學の全體ではないが、寧ろその下部構造、恐らくは抑々その基礎である。精神分析はこれを醫術的目的に用ふることが出來るからとて、人々は誤つてはならない。電氣やレントゲン光線とても醫術に利用することが出來たが、併し兩者はやはり物理學と云ふ學問に屬してゐる。また歷史的に考察して見ても、これ等の所屬は變更されない。電氣に關する學說の全體はその出發を神經筋肉裝置に於ける觀察から始めてゐるが、それ故にとて今日では電氣が生理學の一部であると主張せんとするやうなものは誰もない。精神分析に對しては、これが或る醫者に依つて、患者の惱みを助けてやらうとして發見されたものである事を人々は云々する。併しその事は斯學の本性を判斷するに就いては、どちらでもよい事である。またこの歷史的論考は誠に危險である。歷史的論考を進めて行く內に人々の想起すべきことは、如何に醫者なるものが始めから分析に對して敵意と憎惡とを以てこれを拒否したかと云ふことである。從つて、彼等は今日となつてこれを自分等に於いて壟斷すべき權利がないことになる。』（拙譯「分析療法論」三二五頁）

フロイドはかくまで極言してゐるが、彼が醫者たちから、非常に迫害を受けたるための個人的感情も多少はあるかとさへ思はれるほどである。とにかく斯學父祖が、非醫者の分析を承認してゐるのであるだけ、非醫者はそれだけ自重して分析の實施に際しては、出來るだけ要愼深くあらねばならないことも、反面に於いて、固より當

然の義務となつて來る。

思へば、醫學そのものが、治療法の歷史から見れば新參者で、現在とてもその一部分に過ぎないのに、その全般であるかのやうに迷信してゐる。昔は、治療の事は、專ら宗敎家の任であつたのだ。それが近世に入ると共に科學が片手落にも唯物的思想と結びついたが故に、病氣は肉體的のもの、醫療は肉體を扱ふものと云ふことになつてしまつたのだ。併し、宗敎家が人々の精神の病を治癒した歷史はまた忘るべからざるものである。宗敎家の治癒した病氣とは心の病である。さうして精神分析は、唯物的ならざる對象（心理現象）に科學的方法を適用するものである。その意味に於いて、精神分析は古代と近代との結婚であり、科學と宗敎との握手である。唯物的ならざる對象に向つて醫學的（科學的）方法を適當するものだからである。精神分析は、それ故にまた、醫學と宗敎的治療法の兩者に向つて警告を發するものでもある。醫學に向つては、病氣が單に肉體的原因にのみ存するものにあらず、身心の相關々係に存するものなることを悟るべきを……。また宗敎的方法に向つては、病氣が神樣や惡魔とは關係なく、患者自身の心理現象に外ならないものであるが故に、この現象の內に病原を發見し、その發見に基いて神祕的にでなく、科學的に處置すべきものであることを……。

假りに一步を讓つて、治療の事は、全部醫家に一任するもよからう。精神分析の應用と研究との範圍は專ら病氣治療のみに存するのでないから、精神分析學者はあらゆる他の精神文化に關係する人々の間から輩出すべきである。誠に、文學者、宗敎家、敎育家、民俗學者、人類學者の間から輩出すべきである。何となれば、これ等の學者の專攻對象こそは、精神分析學の必然的の對象に外ならないからである。精神分析は變態心理學に非ず、常態無意識心理學である。凡そ、無意識心理現象に交涉ある一切の分野は、この學問の對象であり、この對象に交涉ある一切の學者は、ある意味に於いて分析學者であらねばならないのだ。

本誌本號は文學研究號である。私は世の文學者たちに向つて要求したい。卿等の間から、よき分析學者出でよと。抑々、東西古今の一流文學者にして事實上（形式上はともかく）分析者（又は無意識心理の觀破者）でなかつたものが、果して幾人あつたかと。

二、野心の小さい文藝家

文藝家が大分頻繁に死亡するやうであるが、それに就いて過日、都新聞『大波小波』欄に某氏の書いてゐたこ

とは大いに我が意を得たものであつた。

それは、生前非常に流行した文士の葬式に際して、その會葬者の數が政治家の場合に比して非常に少く、政治家どころか、大きな料理屋や待合の女將のそれにさへも及ばないのは、文士の社會的勢力が如何に微弱であるかを證明するものであると云ふのだ。ドストイェフスキーの場合などには二萬人からの會葬者があつたと云ふ。勿論、それ等は生前個人的關係があつたわけではなく、たゞその作を通じてこの文豪を敬慕する意味の人々であつたのだ、とも云つてゐた。

全く、『大波小波』子の云ふ通りである。會葬者の多寡など、固より問題とするに足らぬ。併し抑々文藝家たるものが、人々への働きかけの力が、よしんば一時は華やかに見えようとも、その根柢に於いて微弱であつたとすれば、それはその文藝家の存在意義を空しくするものだ。近頃の文藝家の內には新聞雜誌の流行作家になつたり學校教師になつたりして、甚だ自得の色を示した人々が居るが、一度死んで見たらあとに何が殘つてゐるのであらうか。財は固より、事業さへも殆ど何の形もない。『成功』や『流行』だけを目的とするなら、文藝家などになるのは愚だ。いくら成功したつて、流行したつて、結局賃仕事だから高が知れてゐる。文藝家の野心はもつと別のところになくてはならない。

フロイドはリビドーの三つの型を擧げ、人々の事業はそのナルチスムを、その價値はその超自我を、その感化力はその人のエロスを意味すると云つてゐる。文藝家たらむとする者がナルチスムスも貧弱、超自我も低調、エロスも微弱だとすれば、實に何の存在理由ぞや。寧ろ、俗人となつて市井に隱れ、よき父、よき夫、よき市民として、一生を無事善良に過ずものに比してその價値及ばざること遠し。學藝は豐富なるナルチスムス、高らかなる超自我、廣大なるエロスを有する者のなすべき事であつて、區々小才人のなすべきことではない。尤も讀者の方がさう云ふ小才人で滿足する讀者であれば、已むを得ぬが——。

三、歐語假名書きの基準に就いて

坪內博士は『藝術殿』三月號で、『外國語の表音記號法を簡易にすることの必要に就いて』、例によつて誠に行屆いた、細緻な意見を發表してゐられる。なほ同稿は四月號にまで續くやうであるが、大體の意見は『發音記法の原則を單純にし、符合の數を僅少にすることが必要である。』と云ふにあるやうである。私も全く同意見である。『迚も國字を以てしては、どう工夫して見たとこ

ろで、精確な發音標示は不可能だからである。……要するに當人の氣休めに過ぎない。全くの局外者には通じかねる。』

併し、私もこの問題に就いては嘗て（昭和五年九月中）都新聞に『歐語假名書きの統一』の題下に、愚見を述べて見たことがあつた。その當時、私が假りに與へた基準は、——

（一）原語の原音を寫すこと。（二）習慣を重んずる事。（三）發音の正確、精細を期すること。（四）文字の經濟化を圖ること。（五）文字配列の美を考慮すること。

以上五つが相互に相牽制し合ひ、相影響し合ひ、妥協し合つて、時の流れと共に一つの統一へと向ふやうにしたいと云ふのが、私の論旨であつた。只今、坪内博士の云はれるのは、私の與へた、第四基準に該當するわけである。

先頃、帝大の齋藤勇氏に會つた時、氏は William の書き方は『ヰリヤム』がよいと云はれた。私は實は本誌先號及び本號に於いて『ヰルヤム・モリス』と云ふ書き方を採用してゐるのが、問題の契機となつたわけである。實は私は、久しく『ヰリアム』と書き慣はして來、壽岳文章氏その他の人々が『ヰルヤム』と書いてゐるのを、いさゝか氣取り過ぎてゐるやうに感じてゐたのであるが、ジョーンズの發音辭典を見ると、（ˈwiljəm）とあるから、壽岳氏その他の人々はこの記號に準據せられたのであらう。それならば自分も壽岳氏の驥尾に付して、さう書いてもよいと考へたのであつた。かう云ふことは異を樹てるべきことではなく、私の與へた基準の第二にもある如く、なるべく『習慣を重んずべき』だと考へてゐるからである。然るに齋藤氏は『ヰルヤム』がよい、『ヰルヤム』はジョーンズの記號を正しく讀んでゐないのであらうとまで云はれた。齋藤氏が『ヰルヤム』を排せられる一つの理由は、『ヰル』のところで音が切れるかの如くに見える缺點があると云ふにあるらしいが、そんなことを云へばジョーンズの記號とても、さう見えさうである。よしんばこゝで切れる如くに見えると承認してもよい。それも却つて、l音に近くなる如き長所も反面にないではない。また『ヰリ』とするならば、リの內に既にイの音が含まれてあるから、その次にまたイ音を含むヤの字を持つて來ることはイ音の重複であつて、無用である。その故に、私は從來『ヰリアム』として、『ヰリヤム』とはしなかつたのである。

イ音の含不含、または重複と云ふことに就いては、私は『シェイクスピヤ』、『キャット』、『ギョウテ』なども好ましい書き方ではないと平生から考へてゐる。何とな

れば、ピの内に既にイ音があつて、その次にまたイ音を含むヤを持つて來ることは重複であり、Cat の音にはアとエとこそあれ、イ音の這入る餘地はないのに、キの內には無用のイ音が含まれてゐる。『ギョウテ』ではキの內にそれは含まれてゐないのに、Goethe の內にもイ音が含まれる。これは寧ろ『ゲーテ』の單純率直なるにしかないと考へてゐる。

何れにもせよ、私は學界又は俗界一般の習慣に順應するもので、必ずしも『キルヤム』を固執するものに非ず。たゞ私個人の考へを云へば『キルヤム』が必ずしも『キリヤム』に劣らず、却つて勝るとさへ考へてゐるものであることを、率直に云つておきたい。

四、小山良修氏の分析畫

醫學博士小山良修氏は、また、水彩畫界の新人でもある。頃日、上野美術館に開催せられた第二十一回、日本水彩畫會展覽會に出品せられた同氏作畫數點は、甚だ活氣ある特異の畫面に依つて、人々の注意を牽いてゐた。

出陳せられた作品は、『寂在』、『行路』、『思母』、『波彩』、『意想』、『更生』など數點で、主題は多く、これ等の題名に見ても察せられる通り、生死の問題を心理的に幻覺的に取扱つたものである。幻覺的なものゝ表現は、

（小山良修氏作「思母」）

夢の場合に於けると同じく、最も典型的な象徴を使用してある場合の他は、その人の個人的無意識を自由聯想の調査に依つて研究して見るまでは、それに就いての判斷を下すことは絶對に不可能である。小山氏のこれ等の作品では、『行路』と云ふのが、典型的な象徴を最も判然と用ゐてあるので、疑ふまでもなく、それが死の幻覺を取扱つたものであることが知られた以外は、多くは氏の個人的なものを以て全部的に、又は部分的に構成せられてあるので、只今何とも明白な解釋を下すことが出來ないものが多かつた。たゞ、こゝに前頁に、その復製を紹介しておいた『思母』は、その中央に位する印度佛像的な女性の背後に輪後光のある點で、これが母の象徴的表現であることが察せられる以外は、その暗褐色と群青色との仄暗い交錯に依つて、我々に坪内博士の『役行者』の舞臺面を聯想させた點に、興味があつたことを告げておきたい。

かゝる主題の表現が、氏の將來の藝術に於いて、如何なる發展を示すかは、向後に於ける我々の一つの興味であるが、醫家として生死の活問題に日常的に接觸しつゝある氏から、かゝる繪畫を示されたことについては、甚だ切實な、嚴肅な感じを受けざるを得ないのである。

五、水谷八重子に與ふ

私は、去る二月四日の都新聞夕刊に、類似表題の一文（文責在新聞記者）を揭げたが、紙面に限りあり、言葉の不足であつたゝめ讀者の誤解を恐れ、今一度その意を詳細に說くであらう。重ねて分析の苦汁を飲まされる同孃に對しては誠に同情を禁じ得ないが——。

さき頃、朝日新聞に同紙記者と水谷八重子との問答が揭げられてゐた。記者は八重子に向つて『あなたは現在藝の行詰りを感じてはゐませんか、人氣の頂點にある俳優は最も危險だと思ふのですが……』と云つたに對し、八重子は『感じてはゐません……まだ開拓すべき畑が色々ありますから勉强のやり甲斐があると思つてゐます』とはね返してゐるが、併し同紙記者の云ふやうに、八重子の『藝の有力な武器は（泣き）の一手です、見物を泣かせる事にかけては當代稀なる女優だと』私も思ふ。つまり、八重子の藝術の力は、只今のところ、同記者の所謂『催涙彈』の一手につきてゐるやうだと云つても、敢て不當な批評ではなささうに思ふ。八重子自身が感じてゐないと云ふことは、客觀的に見て行詰つてゐないのではない。主觀的に行詰つてゐるだけの事であるかも知れない。

藝術家の藝は一本調子ではいけないと云ふわけでは決してない。男優でも中車や左團次は一本調子の俳優であるが、あれはあれだけでよい。何となれば、あれなりに完成してゐるからだ。併し水谷孃の場合は一寸違ふ。何となれば、彼女は女優だからだ。女優は――殊に水谷孃のやうな女優は、こゝらで一つ打開しなければならない境地に、慥に來てゐると私は考へる。これまでの水谷孃の藝術は『催涙彈』式の藝術であつて、彼女の催涙主義は、慥にそれ自身とし　完成してゐるが、併しこの催涙主義が成立するための一つの重要な條件は、同孃が若くて美しいと云ふことにある。若くて美しい女が困難な、劇的境遇（シチユエーシヨン）に立てば、觀客は分析學の所謂『救助願望』を起し、同情して泣く。それが同孃の催涙主義を成功せしめた觀客の心理的機制である。

併し、水谷孃と雖も、永遠に若く美しくあるわけには行かない。やがて彼女もその若さと美しさとを失つて行く。その時、同孃の催涙主義はその重大な條件を失ふことになる。假りに同孃が永久に若く美しくあつたとしても、さう催涙主義の一點張りでは、觀客に飽きの來る時が必ず至るであらう。

『行詰りを感じてゐない』と頑張る意氣も負惜みも一概に排斥すべきではなからうが、自分の藝術の單調に對して一應反省し、自己を豐富にして行く工風をすることも必ず無駄ではなからう。聰明な水谷孃は、私の婆言に對して必ず耳を傾けてくれるだけの、寛宏な人であるに相違ないと思ふ。

では、何故に孃の藝術は單調で、催涙主義に終始してゐるのであらうか。若く美しいことは、この主義實現を可能ならしめた重要な條件ではあるが、その根源ではない。その原因は何か。それを精神分析的に觀察して見ることにしよう。

×

水谷孃の催涙主義の根本動機、換言すれば彼女が何故に催涙主義の藝術家となつたかの心理的起源は、彼女の自己戀慕（ナルチスムス）的傾向と、同性愛的傾向と少女的心理特質（父コムプレクス）とにあると私は考へてゐる。

あれほど若くて美しい、水谷八重子孃のことであるから、さうしてファンの多いことにかけては劇壇第一と云はれてゐる同孃の事であるから、そのファンの中にはさぞ若い男が大部分あらうと人々は思ふことであらう。が實はさうではなく、女が多いのである。これは一寸變つた現象だ。婦人は一體に嫉妬深いものであるから、若くて美しい女には、原則的には反感を持ち易いものである。然るにこれに對して反感でなく同感を持つと云ふこ

とは、そこに『競争者』を意識させず、一種の安心を感ぜしめると云ふことを意味してゐる。競争者の位地に立たれる危険さへないならば、同性者や同類者は、美しくて立派で優秀であればあるほど同感を覺え易い。人間は棺を蓋ふて始めて正當な評價を下されると普通に云はれる通り、死んだ時には、みな美人となり、偉人となり、功勞者となるものであるのは、そこに人々がその死者に對して既に競争者を感ぜず、たゞ同性者を、同類者を、同族者をのみ感ずるやうになるからである。

何故に婦人ファンがまだ生きてゐる彼女に於いて競争者を感じないかと云へば、それは同孃がエロティックでないからである。あれほど美しく立派であるに拘らず、意外に色つぽくなく、異性の心を不都合に擲亂しない。或る左翼文士某君が、或る雜誌上で甚だ無作法にも、水谷孃には冷感症的な印象を受けると云つてゐたのを見たことがあるが、これは或る意味で男性の遠慮のない本當の聲である。

何故に同孃がこのやうに異性に對してその美しさほどには魅惑的でないかと云ふに、それは彼女自身が異性に對して魅力を感じてゐないからである。分析學的にこれを換言すれば、異性に對してその愛慾(リビドー)を禁制してゐるからである。何故に同孃が異性に對してその愛慾を禁制するやうになつたかは、同孃の幼兒時代の個人生活を微細に研究して見なければならない。併し私は同孃の個人生活に就いては、何等の豫備知識がない。けれども幾多の類似の場合の分析實驗の結果から類推すると、同孃は、一先づその愛慾を父に纏綿させ、これを近親姦恐怖に依つて自己に禁制して了つたものと思はれる。さうしてその禁制されて行き場のなくなつた愛慾を、悉く自分自身に引揚げてしまつたものと思はれる。かくて彼女の自己戀慕症的傾向は成立したが、それの成立を好都合にさせるに大きな力となつたものは、その美貌であつた。多くの美貌の女が得てしてツンとしてゐて無愛想なのは、その女が自己に戀愛してゐて。それで充分であつて、他人からの愛情を必要とせぬからである。

水谷孃が一先づその父(異性の原型)に愛慾を纏綿しこれを近親姦恐怖に依つて禁制し(父コムプレクス)、行き場のなくなつた愛慾を自分自身に引揚げてゐる(自己戀慕)ことの證據は、次に擧げる同孃の一語に於いてよく表はれてゐる。

戀愛問題に就いて尋ねた新聞記者に向つて水谷孃はかう答へてゐる。

『男のお友達は隨分多いのですが、別に何とも感じませんの。……一體エライ男の人といふものは少いんぢやあり

ませんか？　一體、戀愛つてどんなものでせう……。』
　この一語よく同孃の愛慾（リビドー）の特性を表明してゐる。『別に何とも感じません』と云ふのは、（もしこれが正直な聲とすれば、さうしてどうやら正直な聲らしく見えるが）同孃に異性愛的傾向のないこと、判然と云つて了へば、同性愛的、自己戀慕的、卽ち變態的であることを表はしてゐる。次に『一體エライ男』が少いと云ふのは、もし強いて異性と結婚するとすれば、その相手はエライ男でなければならないと云ふことを意味してゐる。これはつまり、自分がエライ女であるから、それの相手となる男は必ずエライ男でなければならない。然るに、エライ男は少いではないかと云ふ、無意識の自己戀慕症（平たく云へば自惚）を告白してゐると共に、その父コムプレクス（少女型の戀愛傾向）をも告白してゐる。

　同孃の自己戀慕と同性愛的傾向とに就いては、既に相當論じたやうに思ふが、その少女的傾向に就いては、まだ大いに云ふことが殘つてゐる。

　判然と云つて了へば、水谷孃の舞臺は子役の舞臺である。觀客を泣かせようと思へば、舞臺に子役を出すに限るとは、芝居道の人々の常々云ふところであるが、同孃の催涙主義は孃自身が精神的の子役であると云ふことを考へれば、首肯出來ることである。孃の身體はもう立派に一人前であるが、その愛慾（リビドー）特性は少女型であり。孃が今だに世人から『八重ちやん』との少女視的愛稱を以て呼ばれてゐることは、私の見解を裏書きして餘りがある。誰が森律子を嘗て律ちやんと呼んだか。誰が今日、入江たか子をたかちやんと呼んでゐるか。水谷孃は萬年少女だ。少女の戀愛の相手は常に父親型の男である。別言すれば、『エライ男』である。性愛的に一人前の女（卽ち母親型の女）は、その相手として却つてあまりエラクない男を選ぶやうになる。『若き燕』として、自分の子供として愛撫出來る男を、愛撫出來ると共にイヂメることの出來る男を、選ぶやうになる。卽ちヴンプ型の女となる。ヴンプ型の女は必ず異性愛型の女であり、非同性愛型、非自己戀慕型の女であることを考へて御覽なさい。このやうな正反對型の女を考へて見ることに依つて、水谷孃の少女型ははつきりと理解せられて來る。

　孃は自分の藝の行詰りを感じないと豪語してゐるけれども、こゝらで少しは感ずる方が本當であらうと思ふ。いつまでその少女型の催涙主義が維持出來るであらうか。孃が私の分析に對して『抵抗』を示さず、素直にこれを受容れて、自己の少女的コムプレクスを卒業し、一人前の女となり、そのヴンプ性も適宜に生かし、複雜な性格を養成するのでなければ、到底女優として大をなす

に足らぬであらうと思ふ。東朝記者は、松井須磨子のカチウシヤほどの『後世に語り傳へられる名舞臺』が水谷孃にないではないかと云つてゐた。それは本當だと私も思ふ。須磨子には相當のヴンプ性があつた。水谷孃のフアンの一人として猛省を乞ふものである。

六、川端龍子氏の『愛染』

　三月九日から十三日まで三越で催された、第二回春の青龍社展覽會に出品せられた川端龍子氏作『愛染』は、私には種々な意味で興味が深かつた。圖柄は、碧潭の上に楓の紅葉が散り布いて殆ど水面を被ふて了つてゐる、その上を更に、雌雄一對の鴛鴦が別々の方面から游ぎ來つて相互に近付いて、今や相對立し相顧みてゐると云ふところである。潭水は畫面の下右端に僅かにその深碧を殘してゐるのみで、他は殆ど全畫面紅葉を以て埋められてゐるが、併しその紅の毛氈の上には、双鳥の水路がやゝ白けて斷ちきられたまゝに歴々と印されてゐる。

　作者は展覽會のためのパンフレットの中で、この畫に『解説』を附して、かう云つてゐる。――『佛典によれば、六ケしい解釋があります。勿論、名題はそれによつてゐますが、こゝでは碧潭が散紅葉に彩られる――それに愛の禽としてのおしどりにかけて輕く御覽下さい。』と。

　作者はあまりむつかしく解釋されることを避けたがつてゐるやうだけれども、固より作者に相當の用意がなければ、特にこの名題を用ゐなかつたであらう。いで、『愛染』とは何の明王か、それを先づ調べて見よう。明王とは、異相を現し、三寶、國土、人民等を擁護する神で、不動明王、愛染明王などの種別がある。さうして愛染明王とは、梵語 Raga の譯で、愛慾を司り、身色日光の如く、三目怒視し、六臂に杵、鈴、弓、箭、蓮華を執り、光燄中に住す。

　更に Raga を調べて見るに、サンスクリットの rabh より來るものゝ如く、『摑む』、『暴力を以て制す』などの意味あり、英語の rage と同根語のやうである。英語 rage にも "The subject of eager desire; that which is sought after or prosecuted, with unreasonable or excessive passion" の意があるとヱブスターは說いてゐるところを見ると、『愛慾』、殊にサディスティックな愛慾を意味するものであることに於いて、これ等英語、サンスクリット語は同樣であると云つて差支へはないやうである。

　ところで『愛』の字にそれほど暴虐の意が明白であるとは考へられないが、『染』の字にはどうであらうか。

これもサディズムを意味するとは、一寸常識では考へられない。併し本誌本號所載、岩倉氏の『講座』を精讀して御覽なさい。『汚染』、『不潔』が如何なる部分本能の轉位であり、昇華であるかゞ分る。岩倉氏のあの表は、CJフリウゲルに據られたものであるが、肛門・虐待的性愛の特徴として疑ふ餘地がない。

肛門・虐待性に聯關させないまでも、『處女を穢す』などの表現もある通り、愛慾の行使は汚染の觀念に於いて表象せられる。また白紙を穢し、畫を描き、書を作ることなど、同じ部分本能の昇華であることは、フリウゲルの說く通りである。然らば畫人川端氏が『愛染』を描く。實に必然中の必然たり。

川端氏がその藝術家的銳敏さを以て、色を染めることに愛のサディズムを直觀してゐるらしいことは、さうしてその直觀が基礎となつてこの作畫となつたことは、殆ど疑ひの餘地がないやうに思はれる。氏は碧潭を染めるその反對色の楓紅に一つのサディスティックな愛を感じた。更に、その紅葉を截斷して行進することを喜ぶ兩鳥の運動に別種のサディズムを感じた。從つて、このサディズム愛を全面的に表現してゐるこの畫面に於いては、通例として互に相馴合つてゐるところを描かれてゐることの雌雄鴦鴛が、こゝでは少しも馴合はず、寧ろ毅然として兩々相對峙し、今にも双方から飛蒐らうとするかの如き緊張した態度を持し合つてゐるところを描いてゐることは、誠にこの畫の根本的意圖に適切するものであると云はねばならない。その技巧に就いては敢へて、今言及せず。併し何れの意味からするも、近來畫壇の好收獲たることは、何人も承認せざるを得ないであらう。殊に、分析眼を以てこの畫を評し、その基くところ甚だ深きを作者のために評者は甚だ喜ぶものである。作者が象徵主義的感覺にすぐれてゐることは、評者が屢々論ずるところ、今またその一證を加へたるは、これまた欣快の一。

（口繪參照）

『子供への理解』

今福由江

現代の學校又は家庭で一番缺乏してゐるのは、子供への理解である。子供への愛は言ふまでもなく普通の人ならば當然持つ事が出來る。然しそれが如何なる理解の下に於いて爲されねばならぬか、問題はそこにある。

近世になつて、日本の子供等は種々な意味に於いて解

放され、愛護され、教育されるやうになつた事は私共の子供の時代に較べれば驚く可きものがある。子供の爲めの歌、子供の爲めの映畫、子供の爲めの何々……と、昔は聞く事さへ出來なかつた樣々なものが新聞に雜誌に街頭に滿ちてゐる。それらの中には、勿論內容價値に於いてみぢめな、寧ろ子供等を害ねるやうなものもあるにはあるが、ともかくもこのやうに子供等への關心がさかんになつた事は喜こんでいゝと思はれる。然しながら子供への關心卽理解であるとは云ふわけには行かない。盲目的な感傷愛のみで子供を敎育する事も親にとつては幸福であらうが、子供にはあまり幸福な結果を齎さない。

如何なる時にでも、子供はその境遇に應じて幸福でなければならぬ。これは大人の場合にも言ひ得る事であるが、殊に子供の場合には『幸福』はその生活にとつて絕對條件で無ければならない。肉體生活は健康に、精神生活は適度の發達の經路を辿つてなされねばならぬ。然しながら、此の子供等の生活に必須な條件である心身共に適度の發達は如何に周圍の者の無理解によつて防げられてゐる事であらう。愛情はあり餘る程有りながら、親又は敎師は自身の無意識のコムプレクスを支配する事が出來ず、子供等を誤まると云つても過言ではない。「子供への理解」の著者である霜田靜志氏は、これについて强く論じてゐる。氏が明星學園に於いて一年から六年間受持たれた子供等からの體驗に依り、樣々な場合に見られた實例を擧げて、周圍の理解如何が子供等をいかに幸福にするか不幸にするかを說いてゐる。英國の子供への理解者エー・エス・ニイルに對して、日本の子供への理解者と呼ぶにふさはしい霜田氏が、永年の體驗をかくも率直に著はされた事は、敎育家、家庭の親達にとつて誠に喜ばしい事である。體驗の裏付けあつて始めてかゝる書は誰人も尊敬し、實際に役立つもの價値あるものと認めるのである。殊に高學年の子供等のため社會化の生活指導、職業指導等への親切な言及は讀者を喜ばせるであらう。

子供敎育の本義は百萬人の子供の中から一人の乃木將軍を、一人のエヂソンを作る事には存しない。何百萬人の子供等に出來る丈け幸福な生活が營めるやうな基礎を與へる事である。それは子供への理解をもつてなされねばならない。幸福な子供等が大人になつて作る社會は何と美しく樂しいものであらう。人間は、自己が幸福になつてはじめて他人の幸福を喜び得、又それをわかち與へ得る程、偏狹にして正直なものなのである。そして最後の結びに私の意見を言はせて貰へば、私は、はつきりと精神分析學によつてのみこの理解と幸福と健康が得られる筈だと言ひ度い。

資料

文豪マコーリ卿の妹コムプレクス

大崎黃村

今時の若い方々はマコーリ Thomas Babington Macaulay (1800—1859) などはあまり讀まれないやうだが、我々年配の者には、今なほ相當に讀者がある。現に德富蘇峰氏などは常々マコーリを云々されるし、また氏は私かに日本のマコーリ、現代の賴山陽を以て自任してゐられるのであらう。私も及ばずながらマコーリの年久しい愛讀者の一人で、近頃閑地に就いたまゝに "Life and Letters of Lord Macaulay," by Sir Gorrge Otto Trevelyan, 2 vols (1923) を全譯して見たのである。マコーリは優れたる文豪であり、大雄辯家であると共に眞摯純情にして頗る潔白な政治家であつたから、これを腐敗の底におちいつてゐる現代日本の政治家に對比して見る時は、誠に一服の清涼劑となるほどである。

然るにそれほどのマコーリではあるが、その傳記を讀む内に誠に解し兼ねる奇妙な一面の存することを私は發見してゐたのである。それはマコーリの姉妹に對する心持である。

それに就いて傳記者トリヴェルヤン Trevelyan はかう云つてゐる。

『マコーリの政治的行動及び彼の公にした著書に因つてのみ彼を知るところの世人には恐らくはたやすく信じ難いであらうが、併し彼の生涯を概括して見れば、彼の幸福に影響し又彼の思想の資料を給する力の優れて大きかつた彼の氣質中の或る特性が、彼の手紙の中に表れてゐるのを見出して、驚く人々も多いことであらう。マコーリを偏好すること最も薄い人々も、彼の智力は大體に於いて男性的であつたことを認めるであらう。彼は男らしく書き、男らしく考へ、男らしく語り、男らしく行動した。世人は彼を元氣と快活と自信との權化であるやうに思つてゐる。併し彼の愛情があまりに優しきに過ぎ、彼の感受性が餘りに鋭きに過ぎることを知つてゐたのは、彼の家族と、彼の友人中の一人、而も恐らくは唯一人だけであつた。

『他の人々としては、彼が隱してゐることを誇示するこ

とを好まぬと云ふは尤であるが、マコーリの人物を描寫するにこれ等の特徴を省いたのでは、その描寫は不完全で、描寫を誤まると同じ結果に陷るであらう。そして彼が愛する場合には、自己のために宜しき度を過ごして餘念なく心を專らにして愛したことを認めなければならない。近親の人々にして如何に深く彼に愛着するとは云へ、いつまでも其の時間を盡し其の心情を盡して彼に報ゆるわけに行かないものに對してこのやうに熱心な感情を集注したことは、彼の慮りを缺いたところだと云ふべきである。彼はこの慮りを缺いたゝめに頗る苦んだ。併し近親の者等をして敢て自己と苦みを共にさせるには、彼はあまりに正しく、あまりに親切であつた。彼と同じ遺傳に依り無限の優しさを持つてゐる者が、彼と同じ弱點を憾むには及ばぬことである。彼は自分の義務としてその弱點を憾むだのであつた。

『マコーリが、如何にその妹との別れをつらく思つたかは、十分に云ひ盡すことは出來ない。彼は妹たちとの愉快な、愛情こまやかな親密の久しき不斷の習慣に依つて全き男の兒らしい調子を長養して來たのであつたが、彼は再びそれを恢復しなかつた。このやうに親密であつた兄弟姉妹たちは何れも、この親密がその本質上一時的のもので、儚ないものであるとは思ひも寄らずにひたすらにそれに耽つてゐたが、マコーリは始めて自分の生き方が、果して賢明なものであるかどうかを疑ふやうになつた。否、寧ろ、彼は自分がまだ生きる方針なるものを全然樹てもしなかつたことを、氣付き始めたのである。併し彼はその人格及び生涯の基調をなしてゐる非利己的精神を以て（彼のこの我儘ならぬ精神は時として我々が——男に於いてよりは寧ろ——婦人に於いて認めて感心する類のものであつた）彼は自分の悲慘な心持ちを妹たちに悟られぬやうに骨を折つて首尾よく匿し終せたのである。もしこれを匿さなかつたならば、妹たちの幸福の上に暗い影を投げかけたであつたらう。

『一八三二年十一月に彼はかう書いてゐる。「兄弟姉妹の間の愛着は潔白にして溫雅に、また歡ばしいものではあるが、併しそれは別の愛情のために頗る斥けられ易いものであるから、分別ある男はそれを自分にとつて缺くべからざるものにしてしまつてはならない。女子たちがその生家を去り、その血緣よりも一層懇親なる緣を結ぶと云ふことは、人類歷史の最初の記錄と共に舊き法則であり、人間の心身の資質ほどに變らぬ法則である。自分の眼先が見えなかつたゝめの結果として、事物の本性や社會の根本的大法が自分に堪え難い程重苦しくなつたからとて、これに愚痴をこぼすと云ふは、最も卑怯にして

最も馬鹿らしい我儘であらう。
『私はこの上尚も一つの支柱を失はなければならないのだ。まだもう一つやがて來るべき事件が殘つてゐる故、その事件の到來した時に、希くは自分の覺悟も出來てゐる筈である。その事件の到來以後は、家庭の幸福に向くやうには何人にも讓らず出來てある心情を持ちながら、この世では功名心の外には私には何も殘されたものはなくなるであらう。併しながら如何なる創傷も時間と必要とに依つて堪え得るやうになされぬはない。さうして所詮、私は私の祖先たちに何の優る所があらう。人生の鬮引で氣に入つた番號を倍の値で購ひ、その切符が空鬮となつた時に倍の失望に陷つた幾千萬の人々に何の優るところがあらう。』
何と云ふ悲痛な聲であらう！ 一代の文豪マコーリにこれほどまでにいとしく思はれた姉妹たちは、どんな女性であつたらうか。マコーリが倍の價を支拂つて購つた番號はどんな素晴らしい鬮であつたらうかと、想像されるが、それは存外平凡な女性であつたかも知れないのだ。併しマコーリ自身にとつては、その番號は倍の値段に價したのだ。丁度一切の人間にとつて幼兒時代からの親しいものが、倍の値段に相當する如く……。私はマコーリのこの悲痛な手記を讀み、彼が生涯獨身で過ごしたことを考へ、この二つの事實の間に何か必然的な心理關係が存するに相違ないやうに、漠然とながら考へてゐたが、頃日、精神分析學の敎ふるところを讀むに及んで、なるほどこれは妹コムプレクスに相違ないと首肯したのであつた。（完）

分析俎上の三名作

瓜山森巢

一、「闇の力」の分析

トルストイの『闇の力』は農夫としては可成りの暮しをしてゐるピーターの後妻アーニシヤが、雇人のニキータと通じて、小金を貯めてゐる夫を殺してニキータを後釜に据えたが、元からニキータはピーターの先妻の娘アクリーナに氣があつたが、家庭內に於ける自分の位置が確立して來るにつれてアニーシヤを袖にしてアクリーナと懇になりその關係が段々露骨になつて來る。娘アクリーナも漸次繼母に對する反抗を露骨に示して來、ニキータに買つて貰つた新調の肩掛けなどを母の前でこれ見よが

しに身につけたりする。（私が嘗て見た映畫ではさうであつたが、原作とは多少違つたところがある。）母親はたまり兼ねて『人の亭主を寢取りやがつて……』と毒付く、と娘の方でも負けてはをらず、『手前だつて前の亭主を殺したぢやないか……』と亡父のために憤りを發する。やがてアクリーナは身重となるが、それをかくして他へ緣付けることになる。

ところが緣談のまとまつた時、アクリーナは物置小屋の中でニキータの子を産み落すのである。ニキータはその子をひそかに殺し、アクリーナは口元を拭うて知らぬ顏で嫁入らうとするが、その婚禮の席にはニキータの最初に捨てた女マリーナも來てゐたりして、ニキータは良心の苛責に堪えず、實父アキムに說かれて、婚禮に集ふた人々の前にその罪を懺悔する。さうして警官に引き立てられてシベリアの荒野に罪人として苦業を嘗めに行くのである。

これは精神分析學から見ると、エディポス・コムプレクス、エレクトラ・コムプレクスの入交り複雜した關係であつて、トルストイは教訓的な意圖を以て書いた作品であるかも知れないが、我々から見ると、そんな教訓は古くさくなつても、彼の描いた人生の姿は永久に新しいのである。彼が無意識的に觀察し描寫し表現してゐるところに、さま〴〵な深い示唆があるのである。

ニキータにとつてアニーシャは明かに母代理である。主人の婦には、屢々母のコムプレクスが轉位せらるゝものであることは精神分析學の常識である。ニキータとアニーシャとピーターとの關係は正に神話に於けるエディポス（子）とジョカスタ（母）とライウス（父）との關係に外ならぬ。ニキータは父を殺して母と婚したが、今度はエレクトラ・コムプレクスのために復讐されねばならぬ順番となつた。アクリーナにとつては、アニーシアは、自分の愛する父を橫取りにした惡むべき姦婦である。父を橫取りして、自分の實母の位置にとつて代つたばかりか、更にまたその父を殺したのである。エディポス的無意識願望（父への愛、母への憎しみ）は今や意識面に於いて道德の假面を被るに都合のよい、お誂へ向き事情が出來してゐる。

アニーシャは正に女ハムレットである。而もハムレットよりまだ條件が惡い。ハムレットは異性親（母）を奪はれたゞけであるが、アニーシアは異性親（父）を奪はれた上に殺されてゐる。アクリーナの復讐心の根強く根深い事は當然である。

併しこゝで考へ直して見ると、ニキータの懺悔なるものは甚だエゴイスティックである事が分る。彼はそのた

めに當然生ずべきアクリーナの不利益を考慮せず、たゞ自分一人の精神的滿足のために一切の事實を衆人の前に暴露する。それに就いて『耳遠く痴鈍である』ところのアクリーナは如何に考へてゐるか、また彼女のニキータに對する未練、新郎に對する愛情などが如何なるものであるかと云ふやうなことに就いてはトルストイもあまり深く觸れてをらぬらしく思はれる。（私の手許にある吉村繁俊氏の邦譯は『早稻田文學』に分載せられたものゝ切拔で、第五幕が缺けてゐるのでよく分らぬが。）少くともかつて見た活動寫眞だけでは、這般の消息は全然無視されてゐた。

トルストイはこゝで人心の闇の中から、自ら光明の輝き出すべき力を描いたつもりであつたのであらうが、實はこの光明なるものは存外エゴイスティックなもので、他人の立場などは、あまり考慮におかぬものである。

少くともトルストイの意識は何處にでもあれ、その無意識的の意圖はやはり近代的の、農民的の、平凡人としての、新しいエディポスを描き出して、人類の被抑壓感情を解放し、淨化せんとするにあつたと解するのが、最も新しい精神分析學上の立場に卽しての『闇の力』觀であるのだ。

二、『野鴨』の新解釋

私はかつてまたウェルネル・クラウス主演、ヘンリック・イプセン原作『野鴨』を見たことがある。

この作は人の好い寫眞師ヤルマア・エークダルが主人公と云ふ事になつてゐるが、實は紳商ヴェレルの子グレーゲルス・ヴェレルが本當の主人公である事は申すまでもなからう。ヤルマア・エークダルはヴェルレのお土産を持つた同家の婢ギイナを嫁に貰ふのであるが、程なくして生れた娘へドヰッヒを實の我が子と思ひ込んでゐて、家庭は平和であり幸福である。が、こゝにヴェルレの息子グレーゲルスは父の母に對する虐待に憤り、母の死を悲しみ、ギイナに對する父のみだらな所業に眼を被うて父の家を去つて遠くの山林へ行つて仕事をしてゐる。

この度、父が適當な後妻を得たについて、息子に紹介しておきたいと思つてそれとなく呼び寄せるのであるが、息子のグレーゲルスは父の家には寄付かず、親友ヤルマア・エークダルの家に宿をとつてゐる。

『ヴェルレ　昨宵お前が口走つた所から察して見ても、又かうしてエークダルの家へ宿を取つた所から見ても、お前は何か俺に對して敵意を持つた計畫を立てゝゐるの

だと思はないわけに行かんがね。
グレーゲルス　私はヤルマア・エークダルの目を開けてやらうと思ふのです。彼の男は彼の男の地位を有の儘に見なければ成りません――それだけの事です。
ヴェルレ　それがお前の人生に於ける使命なんだね。
グレーゲルス　さうです。その外、貴方は私に對して何も殘して下さらなかつたのです。
ヴェルレ　グレーゲルスや、それぢやお前の心を不具(かたわ)にしたのは俺(わし)なんだね。
グレーゲルス　貴方は私の全生涯を不具にしたのです。私はお母さんの事を云つてゐるんぢやありません――併し私が絶えず良心の苛責を受けて、一日も安んじてゐられないやうになつたのは、皆貴方のお蔭です。
ヴェルレ　あゝお前は良心が疚しいと云ふのだね、左様か。
グレーゲルス　私はあの時から貴方に反對して立たなけれりや成らなかつたのです。エークダル中尉に對して陥穽が設けられた時からですよ。私はそれを悟つた時からして、彼の人を警戒して遣らなけりや不可なかつたのです。
ヴェルレ　左様だ。言ふならその時だつたね。
グレーゲルス　私にはそれが出來なかつた。それほど卑怯な、勇氣のない男でした。其當時ばかりではない、ずつと後まで、私は死ぬ程貴方を怖れてゐたのですよ。
ヴェルレ　今はその恐怖にも打勝つことが出來たらしいね。』（森田草平氏譯）

この邊の會話は實によくグレーゲルスの父に對するエディポス・コムプレクスを表してゐる。
父に對する反抗、母を虐待せられた憎しみ、父殺しの神經症的恐怖などグレーゲルスの心理はよく描寫し盡されてゐる。
かくてグレーゲルスは『理想の要求』に基いて父とギイナとの關係、ヘドキッヒの眞實の父の何人であるかなどを、ヤルマアに打明ける。ヤルマアは強くなつて更に生活を眞實の基礎の上に立直すであらうことを豫期したのであつたが、その結果は、ヤルマアの自暴となり、ヘドキッヒの自殺となつて、思はぬ悲劇は生じ來るのであつた。グレーゲルスはそこで怖ろしさに顔の筋肉をビク〱させながら、『どうしてこんなことになつたか、誰だつて分るものか』自分のとつた處置の可否に惑ふのであつた。さうしてこの困惑は、恐らくはまた原作者自身の困惑であり疑問であらうが、それは意識的の問題であつて、無意識的にはこれ明かに父殺しの懺悔であつて、

エディポスが眼をくりぬいて流浪の旅に出たのも、ニキータが罪に服してシベリアの獄舍に苦役する身となつたのも、みな同じ懺悔の行爲である。たゞ各々形が少しづゝ違つてゐるだけのことである。

グレーゲルスが『理想の要求』に基いて父の罪を暴くと云ふのは、これ明かにジョーンズ博士の所謂『理屈づけ(ラショナリゼーション)』であつて、無意識の願望としては父への反抗であり母のための復讐である。その根深いエゴイズムがその結果としてどう云ふ悲劇をもたらさうと、グレーゲルスは存外苦痛を感じてをらぬらしいのである。それはあだかもニキータがたゞ自分だけ懺悔すればよいので、アクリーナやその他の人々の立場がどうならうと一向介意してをらぬかに見えるのと一般である。ヤルマアの自暴が大きければ大きいほど、ヘドキッヒの自殺が悲慘であればあるほど、ヴェルレの苦惱も大きいのであるから、グレーゲルスの反抗と復讐との願望は正比例的に滿足させられるのである。從つて懺悔の苦行に赴くことが愈々容易になつて來るのである。

人間の懺悔の行爲の前提には、必ず何等かの父代理への反逆と、母代理への戀情滿足、又はその何れか一つが先行してゐるものである。

『闇の力』の場合には二つがあり、『野鴨』の場合にはその一つだけがあるのである。

三、『春の眼覺め』

ヴェデキンドのこの作は自由なもので、場面のとり方なども突發的で活動寫眞にするにはお誂向きのものであるやうだ。併し全體が一つの教訓で、傾向的なものであるので、その點いさゝか藝術的（無意識的）の深さには缺けたものであるやうに私には思へた。併し少年期に於けるさまざまな性的感情や欲望の發露が百科全書的に展列せられてゐるものではある。その方面の描寫から云ふと、また別の價値も生じて來る。

主人公はメルヒョールと云ふ少年、これの親友がモーリッツ。メルヒョールは學校の成績もよく秀才であるがモーリッツは劣等生である。而もこの二人は非常に仲がよい。私が嘗て見た活動寫眞ではその方面の描寫はなかつたが（或はカットされたのか）彼等兩人の間には同性愛が生じてゐるのである。こゝにまた異性愛の對象がメルヒョールに出來る。それはヴェンドラである。彼女は赤ん坊は鸛の鳥がくわへて窓か煙突の中から這入つて來るのだと云ふ傳説的説明に滿足せず、も少し科學的な説明を要求してゐるが、母親がそれを十分に教へなかつたので、枯草倉で——有名な枯草倉の場で——枯草の匂や

かなる空氣の中で、メルヒョールと互に無意識的に誘惑し誘惑されて共にタブーを犯すことになる。そこでヴェンドラはただならぬ身となるが、醫師の診療の結果を母親からそれと聞かされて、『だつてお母さん、私はまだ結婚もしないし男を有りたけの心で愛しもしないのよ、私はお母さまの外には誰も愛しはしなくてよ。お母さまだけよ。何故、本當の事を云つて下さらなかつたの?』と云つて嘆く。

一方、メルヒョールは不良少年の銘を打たれて山紫水明のところにある某感化院へ收容されるが、そこの冷嚴な空氣に堪え兼ねて一夜ひそかに感化院を脱出する。直ちに院の人々はそれと氣付いて追跡する。メルヒョールは彼等を避けて墓地に身をかくす。そこにヴェンドラの墓を發見して嘆きくやんでゐる内に、或る見知らぬ黑衣の人に導かれて山上に登ると、新しい曙はほの〴〵明けて自由の都は脚下に朝霧の中に晴れて行く、と云ふ筋である。

『ヴェデキンド:::は少女ヴェンドラが鸛が赤坊を咬へて來ると云ふ虛誕の物語によりて欺かれた爲め、終に枯草倉でメルヨヒールの爲めに誘惑せらるゝに至つたと云ふことを以て、性慾上の事を兒童に說明する必要を證明するものであるが、これは實際何等の證明にもならない。なぜかと云へば、ヴェンドラはヴェデキンドの戲曲に於いては徹頭徹尾墮落したる少女の如く見え、ヴェンドラは假令母から有丈の事實を說明して貰つたとしても、メルヒョールを追懸けて枯草倉に登り兼ねないやうに思はれるからである。』云々と、日本に於ける恐らくは最初(明治四十一年)のヴェデキンド紹介者たる片山正雄氏は云つてゐるが、私としてはこの批評には半ば贊成し半ば反對する。

性的知識を與へておけば墮落しなかつたであらうと云ふのはあまりにヴェデキンドのセンチメンタリズムであると共に、またヴェンドラを以て『徹頭徹尾墮落したる少女』とするのも、極端であらう。

ヴェンドラに於いては性慾の變態性が尙早的に發現してをる事は事實であるかも知れないが、性慾の變態性、倒錯性(パツアシヨン)を全然持たない人間は考へられぬからである。健全なる性慾との區別はただ我々の觀念上にのみ存し得る事であらうから。

換言すれば、多少の性的變態、性的異常を有つた人間に、他方フロイドの所謂超自我(シウパーエユー)の力を、その故に否定することは出來ないからである。くどく云へば、人格高い人にでも、多少の性的變態者がないとは云へないであら

あらうが…。
う。勿論、その人はその場合、人一倍の惱みを惱むでは

×

鸛の鳥の傳説は勿論科學的説明ではないが、それ故にヴェデキンドや片山氏の云ふやうに全然『虚誕の説』であると云ふのも極端であると私は考へてゐる。むしろ文學的な美しい表現であると考へてゐる。首の長い鸛の鳥は何の象徴であらうか。それは首の長い鶴と、楕圓形の甲に四肢首尾を四方に放射する龜とが日本に於いて何の象徴であるかを想像すれば直ぐ分ることである。また耳の長い兎が圓い月の中で餅をつく事が何の象徴であるかを想到すれば直ぐ分ることである。少くとも文學的傾向ある人々はこれを以て一旣に『虚誕の説』として葬り去るに忍びないものがあらうと思ふ。半分眞實で、半分噓であり、半分抑壓され、半分解放(アプレアギーレン)されてゐるかゝる『虚誕の説』の效用を認識することが必要だ。結局、人生の健全な常識は、すべてかゝる妥協にあるからだ。(完)

どもりは治る

三月十九日の朝日新聞の「子女相談」欄に、どもりの子の相談が出てゐたが、それに對して東京市吃音學級擔任の小林宗男氏が答へてゐた。氏が『冷笑したり、叱責するやうな事』をするなと云つてゐるのはよいが、『どもりは十中八九まで幼少年時代の人眞似から起るもので、始めは面白半分に眞似たのが、知らず〳〵習慣になつた言語上の惡癖です』と片付けてゐるのは、チト簡單すぎる。人眞似はどもりの契機であらうが、その原因は他にある。あらゆる人眞似の幼少年が全部どもりになるとは限らぬに徵しても分る。それは神經症的少年に限つてゐる事實を考へねばならぬ。本研究所に於いては、どもりは大分矯正した經驗がある。

アブフウブ

分析ヴリエテ

高水力太郎

一、尼寺と小匣

野口米次郎氏は嘗て『文學リーフレット』(昭和七年十月一日號)と云ふ小雜誌に『尼寺』の題下に、美しい話を書いてゐた。あの無愛想なヨネ野口のどこを押せばあんな甘い聲が出て來るのかと思ふやうだ。少し引用して見る。

『私の生故鄕の田舍町に一つの尼寺がある。少年時代にこの前を通り、(中略)時たまそのなかを覗いて、怖いやうな嬉しいやうな感じに怯えたことを今に記憶してゐる。之は私に取り、町に一つしか無かつた神祕的存在であつた。門はいつ通つても綺麗に掃除され、打水などがされて、まことに淸淨の極みであつた。私はいくたびかそのなかへ入つて行きたいと思つたが、入つたら最後再び歸つて來られないかも知れないといつたやうな恐怖心に擊退された。それで私は門からなかを覗いたのみであつた。……小さい門と同じ幅の通路が七八間もつゞき、それに平たい敷石がしき詰められて、秋になると、紅や白の萩が細長い帶のやうな敷石を狹んで、支那の陶器に見るやうな靑磁色の土手を築いた。この通路のどん詰りに、繪に描いた龍宮のやうな抹門があつて、私は一度この樓門に頭を剃つたはかりの年若い尼さんが立つて居るのを見たことがあつた……この尼さんがどんなに神祕的に見えたであらう。樓門の前に象が鯱立ちしたやうな恰好の石碑が立つてゐた。』

野口少年が、この尼寺を覗くことに、『怖いやうな嬉しいやうな』矛盾した感情を抱いたのは、何故であつたらうか。この矛盾した感情はまた『なかへ入つて行きたいと思つたが、入つたが最後再び歸つて來られないかも知れないと云つたやうな』矛盾した衝動ともなつて現れてゐる。併しこれは精神分析から見ると、少しも不思議でもなく、矛盾でもない。是非行きたい『極樂』と、行くことの恐ろしい『地獄』とは、元來同じ胎內へのアムビファレントな感情の、二元的表現であるからだ。

私は嘗て四歲くらゐの自家の子供を連れて郊外を散步してゐたことがあつた。自家では子供等に一切宗敎敎育をしたことはないのだが、その子供が、或る農家(地主階級らしい)の入口の奧深い道路を望んだ時、『こゝはおがむところでせう?』と云つた。私は人類無意識の遺傳的知慧の根强さと必然さとに、少し呆れたのであつた。同じ子供はやはりその當時、妻の帶留の小箱――長方形の白木の箱で表面に硝石が張つてある――を見てこれは神樣を入れるものであらうと云つた。同じ知慧からの判斷であることは、申すまでもない。

二、ゲーテの『盲目牛』

『おゝ、可愛いテレーゼ、
お前のパッチリした眼は
直ぐに見えなくなつて了ふ。
眼をふさがれてゐて
直ぐにお前は私をつかまへる。
どうしてお前は丁度私をつかまへるのか。
『お前は私を一番うまくつかまへる。
さうして、しつかりと私をつかんでゐる。
私はお前の腕の中に抱かれる。
『彼はよろ〳〵と手探りする。
腰付が危つかしく崩れてゐる。
皆の者がそれをからかつてゐる。
だのに、お前は私を愛してくれないのか。
それなら私はいつも悲しく、
宛も眼かくしをされたやうにさ迷ふ。』

譯はまづいが、大體の意味だけを傳へればかうだ。少年時に『めくら鬼』を遊び、好きな少女とつかまへたりつかまへられたり仕合ふ時の歡びがよく表はされてゐると共に、またこの遊びの象徴的な意味もよく詩的に把握してある。流石に大作家の珠玉小品だと云ふ感じがする。

三、『穴』に關するドイツ語

ドイツ語で Gr…b の付く語は、大抵は『穴』に關係がある。その實例を擧げて見る。表面的語義は變化してゐても、根本の觀念がそこにあることは疑へない。またこの根本觀念を把握することに依つて、その語の眞の意味が容易に、適切に把握される。

das Grab（名詞）墓。
der Graben（同）溝。
die Grube（同）穴、墓、凹み。
die Gruft（同）穴、墓、地下聖堂。
　Grübeln（動詞）思辨す、穿鑿す。
die Grübelei（名詞）穿鑿、思辨。
　grabbeln（動詞）摸索す。
　graben（同）掘る。

何故に gr…b の付く語に『穴』に關係あるのが多いかと云ふに、それは多分、gr ともに喉音であるからだらうと思はれる。發語する場合に、最も端的に『奥深い穴』を示すものは、『深奥い穴』＝喉から發音するにまさることはないからである。『思辨』、『穿鑿』などの昇華された人間行爲も元を正せば穴を掘ることの慾求に發してゐることは、この言葉の觀念上の發達史が證明してゐることを興味が深い。

も一つ『穴』を意味する語に "Schacht" がある。この語は ch が喉音である以外に、これと云ふ推論の根據がないがこの語から（勿論）變化して『筥』又は『女』を意味する語に "Schachtel" がある。el は指小詞であらう。『箱』と『女』との同一視は、日本の俗語にもその實例が多々ある。『おばこ節』などの『おばこ』はやはり、『少女』を意味するのであらう。

も一つ『穴』に關係のあるドイツ語に "Schoss" がある。これは普通の辭書の第一義に『膝』とあり、第二義に『子宮、胎』とあり、"im Schosse der Erde" と云ふ場合には『地中深く』、『母なる大地の胎』と云つたやうな意味になり、時間

的に用ゐては "im Schosse der Zukunft" 即ち『遠き將來に、彼の世に』と云つたやうな意味となる。さきに擧げたゲーテの『盲目牛』の詩の中に『お前の腕の中』と私が譯しておいた原語は "in deinen Schoss" である。ところでこの „Schoss" なる語は、勿論、„schiessen" (『發射する』、『放つ』)と關係があるのだらうと思ふ。"Schiessen の過去形が „Schoss" であるに徵しても……。『發射』や『放つ』と『膝』や『胎內』は一見關係がなさゝうに見えるが、併し考へて見ると、『胎』や『膝』は子供が『發射』されたあとの空洞であると云ふ風にも考へられ得る。恐らくこの觀念からこの二語は派生して來たものであらうと察せられる。

四、言葉の味

本莊可宗氏が嘗て某紙に書いてゐた日本語の『ホコリ』の兩義の話は私に興味が深かつた。天理教では『ホコリと云ふ言葉は第一に「塵埃」の意義がある。第二には「虛傲」の意がある。第三に「名譽」の意味がある。で、ホコリを捨てるといふときには、人間のあらゆる虛傲、自力、造作を捨て、何か依て以て立つ所の名譽や矜恃、よしそれが內的のものであつてもそれを捨てよとの含蓄がある。夫等のものは、神の前には塵埃であるといふコトバの味がある。』と本莊氏は紹介してゐる。併し本莊氏はこれも『甚だ多くの出鱈目なこぢつけ』の一つであるかも知れぬとの疑ひを殘してゐるやうである。

これは從來の常識人から見ると、全く出鱈目なこぢつけ』に聞える。然るに、その常識人たちかち最も信賴されてゐる『言海』を引いて見ると『ホコリ（埃）』は元來『誇りの意ならむ』とある。更に『誇る』を引いて見ると、『大ごるの約、廣ごる、と同意』とある。即ちこれ等兩語は元々『大きく廣がる』の觀念から由來したものであることが察せられる。人に酒肴をふるまふことを『おごる』と云ふのは、自分の持つてゐる金が大きく廣がるの意であらう。併し寳を大きく廣げることは同時に埃のやうに捨てることを意味してゐる。即ち、元來同一觀念から派生して相反の意味となつた二語であるが、果して天理教の敎へるやうに、神の前には『誇り』も『埃』と云ふやうな、都合のいゝ敎訓的、道德的意味があつたかどうかは、なほ疑問だ。併し本莊氏の疑はれるやうに『全然出鱈目のこぢつけ』ではなく、そこに多少の根據の存することだけは明かとなつたわけである。

併し、道德的な意味と判然とは云ひ去れないまでも、併し（單なる觀念的でなく）價値感情的な意味がこの相反兩義の內に含まれてあつたかも知れないと思はれることは、昔の人の語感に於いては、常に一語の內にその反對の意味が含まれてゐることが精神分析の研究に依つて明かにされてゐるからだ。即ち、エヂプト語に於いては、「强」と「弱」とは一語で表はされ、ラテン語に於いて高と低は一語で表はされてゐる。そのやうな例は各國語に於いて無數に發見せられにゐる。（フロイドの『原始語に於ける相反

兩義に就いて』を參照。）で、この場合も、名譽の如き高尚なものと、埃の如き無價値のものと、高低相反の二義を一語に含めたと察することは、必ずしも出鱈目だとは云へないのだ。

相反兩義が一語に代表されると云へばドイツ語の Boden は床とか土地とか土臺とか云ふ意味があると同時に、屋根裏の意味もある。上下相反が一語で意味される。さう云へば、日本語で屋上の事を屋根と云ふのはをかしい。床の事を屋根と云ひさうなものだが――。さう呼んだ時代はなかつたものかしら。『言海』では『家（や）の上（へ）』の約音であると説明してゐるが、こぢつけに非ずんば幸である。では、峯（みね）や『高根』の『ね』はどう説明するかと尋ねられたら、大槻文彦博士も困るのではなからうか。

春の自由聯想

高橋鐵

百貨店は雛市で――
買へない親子がぞろぞろ通る。
劣等感で濁つた瞳の行列だ。
金色と赤色はプリミチヴな誘惑らしい。
崇物症を破るのはけたゝましいレヂスター の現實感。
オヒナサマなんて――チェッ！
貴族的なゼニタリゼーションめ！
花びら・豆・貝・白酒・重箱……
「……致和乃火爐介足泥蛤跗無（チワノコタツニアシテカヒフム）」（毬歌國（テマリウタコク）字解（ジカイ））か?!
聯想が頭ン中でこみ合つてるが
一番大きなのは幼那染の大きな瞳が一つ
レヴュの様に並んだお雛様の顔は皆
テラテラとナルチスムスで光つてる。
百貨店は雛市で――

×

櫻花（はな）の噂がきこえて來る
元祿花見踊のヂンタといろは歌留多の繪
それから漠然として花の雲
卅年も東京にゐて、貧弱な前意識ばかりだ。
春の溫度の中で喘ぐ群衆
可哀さうな群衆！
リビドーの踊りも知らずぐ
「自然」に理窟付け（ラショナライズ）して浮かれてる。
幸福な群衆！
鐘は上野か淺草か――ナンテ
變な贖罪願望を起すなよ、群衆よ！

×

この頃の新聞紙の面（つら）
戰場の様にゴタゴタで
工場の様に喧騷で
魔窟の様に秘密が呼び叫んでゐる。
君は確かにノイローゼだぜ
それも尤もかも知れぬ。
飢えを脊負つた人と、
頽廢のサディスムスを閃かす人と――
それ丈ツきやゐない世の中、
抑壓の代物になつた新聞が
自己色情くらゐ起すだらう。
鉛のお化粧は汚ねえコムプレクスさ。

×

春のモードは
飾窓にも舗道にも紙面にも
デモンストレーションをやつてゐる。

古典のイマゴーや
アニマ、アニマスの顯はれや——ETC.
露出症の女性獸は腰を揺がせて、
窃視症の男性獸は薄笑ひを浮べて、
モードを凝視してゐる最中。
去來する流行魔物（モードトイフエル）を捕へる積りで
愚かな補償作用を動かして……。
だが飾窓の中のモードよ
そして心細き追跡者よ
君達のエロスを
巧みに操つてゐる影法師を
見た事が有るかしら?!

×

今月の雜誌に
うき世のナムバーワン達を叩いたら
その中から
二人死んで了つた。
直木氏と武藤氏と——。
それを書いた鐵の心臟から
血がたらりたらり……
やけに迷信的な外傷から噴き出す
阿呆らしい罪障感の毒瓦斯！

——（完）——

前號正誤表

頁數	行數	誤	正
表紙第一面	六	岩名	岩石
同	九	機織地	機織池
同	一四	競爭	競走
本文 一六	下段 二	中山日	中山臼
同・一九	上殺 六	日本傳記集	日本傳說集
同 三八	上段 四	第三卷	第四卷
同 三九	上段一九	彼女	彼女等
同 四五	下段一八	急ぎ是	急ぎ足
同 五五	下段 七	木蔭にに	木蔭に
同 七七	下段一九	ミッドライド	ミットライド
同 八八	上段一四	Einbiedung	Einbildung
同 九八	下段 一	『稻英』三	『稻英』二
同 九九	上段二二	分析學と	分析學を
同	下段一二	心持にはつて	心持になつて
表紙第四面	一一	Volkgebräuche	Volksgebräuche

講座

性感と性格との關係

岩倉具榮

部分本能とは、性的に一人前となつた人間の性活動の準備となつた幼兒的な性本能（詳しく云へば、口唇、尿道、肛門の性感）を云ふのであるが、これ等の部分本能は、所謂變態的性本能を示す大人に於いて、やゝ純粹な形で見られるのである。之等の變態は、性器的本能の統裁が、大なり小なりの程度に、他の或る部分本能の支配によつて置き換へられてゐる狀態である。かくして所謂『窃視症者』に於いては、見ることが彼の主なる性滿足のよすがとなる。從つて他人に取つては單に豫備的手段に過ぎないものが、彼にとつては目的となる。露出症者にとつては見られることが、サディストにとつては彼の戀愛對象に苦痛を與へることが、マゾヒストにとつては自分で苦痛を耐へることが、それぞれその主なる性的滿足となる。フロイドは、幼兒には未だ何ら性器の統裁がなく、且つ實際、如何なる種類のリビドー的組織も存在しない爲に、凡ゆる變態の芽が見られると云つて居る。彼が兒童を『多形倒錯』"polimorphous pervert"と呼ぶのは、その意味である。この言葉には人々は一寸面喰ふであらうが、併しかう云ふ考へ方は、人間の性慾の發達が如何に連續するかを本質的に洞察するには實際に役に立つのである。

さて吾々は個人の部分本能のあるものに就いて、特にその發達の途中に生ずる轉位と昇華とに關して考へて見よう。口唇段階（卽ち旣に說明した如く、口唇に關係する部分本能が最も著しい段階）は、原始人の文化に深い印しを殘したが、その印しは今日でさへもなほ、宗教の中心儀式や童話の如き、一見すると全然無關係の如く思へる諸現象の中に見出されるのである。食べる事は、愛と憎みの最も原始的な同時的表現である。何となれば、食べて身體の中へ入れて了ふことは、交涉の最も緊密な形式であり、又愛の近接を肉體的に可能ならしめることであるからである。併し、その肉體內に取込まれた對象は破壞せられてゐるには相違ないから、それは亦憎みの表現でもあり得るわけだ。（現に、齒で引裂くことは、多くの動物に於て最も自然な敵意の表現となつてゐる。）

従つて口唇段階は——吸ふこともさることながら殊に噛むことは——甚しくアンビヴレントである。宗教の最初期を成す所のものは多分トーテミズム（民族靈として動物を崇拜すること）の儀式で、これはアムビヴレンツを非常に明瞭に示して居る。原始的トーテム種族（或は更に嚴密に云へば、種族のある部分）は、ある種の動物を同時に兄弟又は祖先と見做して尊敬するのである。この種族の者は平常はこの動物を食べることを禁ずるが、時たまには彼等は一種の儀式としてこの動物を食べる。そしてこの儀式は、心理的にも文化的にも共に、神人交通の禮儀と直接的に連續してゐるのである。さうしてこの儀禮は世界の大抵の宗教の特色となつてをり、またこれは多くの場合に、食べられる前に殺されねばならない神に對する愛と憎しみの双方を、明かに示してゐる。祖先及父としての神は、時としては子供を食べることによつて復讐する（クロノスとモロク Cronos and Moloch の神話が證明する如く）。そして吾々が今も尙、兒童たちに話してきかせる古い物語に就いて見る時には（これは昔のトーテミズム儀式の反覆であるのだから、それを兒童に聞かせるのは甚だ適切である。そうして精神分析學は、この反覆說を心理學方面から支持した）、そこには動物、魔物、妖巫、或ひは巨人などによつて食はれる例が澤山あることを知るのである。

多分それ程にはまだ十分に確實ではないが、同じほどに興味あることは、個人の性格に對する口唇性感の影響である。現在のところで信じ得べき證據によれば、口唇性格には二つの明かな典型がある樣に思はれる。之等の型は、人生初期の口唇段階に於る個人が滿足と安心の經歷を持つてゐるか（食物は欲しいと思つた時に、いつでも與へられたか）、或は不滿足と不安との經歷を持つてゐるかに依つて分れる樣に思はれる。前者はあまり屈托のない、幸福な樂天家になる。この型の者は、たとへ現在よいことがなくても何でも好轉することを期待し、未來に希望をかけることが出來る。彼等は社交的で、批評的ではなく、又新思想に對して受容的である。第二の型の人々は、せつかちで、忍耐的でなく、又悲觀的になり易い。彼等は常にもの欲しさうで、要求的で、がつ〳〵してゐる。或ひは又——缺乏の脅威に對して自分を守るために——彼等は冒險やあて込みよりも、むしろ、安全第一の道（例へば、年金が貰へると云つたやうな）を求める。ある場合には彼等は、彼等自身が苦んで來た口唇の失望に對する復讐を、無意識的にしようとすることがある。即ちこの型の男が、友達を食事に招いておいて、それから客が飢ゑて了ふ樣に家を留守にする如き一つの

著しい例がある。また別の場合には、敵意は言葉を通じて現される。かゝる場合の言葉は、もつと原始的な敵意表現法たる、嚙むことの置換となる。かゝる置換に如何なる性質があるかは、『棘すやうな議論』"incisive argument," とか、『嚙む様な冷嘲』"biting sorcasm," とか又『毒舌的の頓智』"mordant wit," の如き普通の熟語によつて見ても明かである。

肛門性感(即ち排糞の經過と關聯する部分本能の性常)に關聯する性質は非常に多數で且つ多樣であるから、それ等は次の如き表にするのが一番分り易い。

× × ×

置換(轉位)と昇華

留保
1、延期
2、反抗
3、頑固
4、吝嗇
5、所有好き
6、蒐集慾癖
7、浪費嫌い

生産
8、集中(特に延期後)
9、寛大
10、贅澤
11、汚染
12、不潔
13、騒音(音樂)
14、印しを殘す事 } 虐待的
15、破壞 }

玩弄
16、演說
17、書くこと
18、描くこと
19、形作ること
20、料理すること
21、化學
22、寫眞
23、建築
24、技術

生産物
25、子供
26、金
27、紙幣

反動構成

秩序
28、臆病
29、組織
30、術學
31、明快な思考
32、行き屆ける
33、時間嚴守

清潔
34、洗濯
35、掃除
36、蓄積を妨げる。
37、汚染の恐怖(例へば、自己又は「自然」の)
38、「純潔」
39、現實

支配
40、強き意志(誘惑に抗ふ)
41、禁慾主義

本源的の積極的慾望の直接置換を現す諸性質は、上列にかゝげてあり、之等の慾望に對して寧ろ反動形成となるものは下列に掲げてある。從つて下列のそれは屢々上列のあるものとは反對の性質を現してゐるのである。

本源的慾望の置換（上列）は、これを四つの主要題目下に分類することが出來る。――

(1)糞便の留保と關聯するもの――これ等は如何なる場合に企てられる行動かと云ふに、まづ第一に、(a)排泄行動の偶然的快樂を增加せしめん爲に、(b)極く幼い兒童が乳母や母に對して反抗を示し得る方法の一つとして。この過程はやがて排泄物（「生產物」）に屬する價値の觀念と聯關する様になり、かくして置換の過程によつて、價値ある物を貯へたり集積したりする慾望を起させるのである。

(2)排泄行動それ自身に屬する快樂と關聯するもの。之等は勿論、ある點に於ては、前のグループのそれとは性質が必然的に反對である。かくて貯へ保留する慾望は、（愛と關聯した時に）與へ度い慾望と對比せられ（憎惡と關聯する時――勿論この場合にアムビヴレンツは屢々あるが）汚したい慾望と對照されるのである。

(3)排泄物が出された場合、之を玩弄せんとする慾望と關聯するもの。

(4)排泄物を價値ある物として興味を持つのは單純な場合であるが、それに呼應してゐる複雜なもの。

本來は、排泄行爲は樂しく誇るべき事であり、又排泄物それ自身は價値あり喜ばしい對象であるのだが、兩親や乳母の感化によつてやがて排泄行爲は汚い下品なこととして認めさせられ、その行爲は嚴しく抑制され調節されねばならないものと變ぜしめられるのである。この様にして主なる反動形成が起るが、それ等は大部分は改めて說明するまでもない。

右に擧げておいた表の內、二三の項目に關して簡單に附言しておいてもよい。

第一と第八とは一緒にしてもよいものであり、又肛門性格の重要な型として交互的に現れることがある。その二つの特性は共に、先づ保留しておいてそれから多量にして產出しようと云ふ傾向に結合される、これがその置換である。例へば、この様な人々は重要な事件に於て出來るだけ『行動』（"action" は本來『驅逐』の意であることを注意せよ）をおくらせ、それから熱烈に勢力を出して短い時間に驚くべき仕事を成就する。或ひは又彼等は、例へば手紙の返事を書いたり、勘定を支拂つたりするのを澤山たまるまでほつておくことがあるだらう。併しいよ〳〵となると彼等はそのまつた仕事を一生懸命

に遂行する。第四、五、六、及び七は、勿論普通には第廿六と結合して出るが、この最後の第廿六は多分文化的には、肛門性感の最も重要な昇華である。實際、吾々の現代文明の經濟的基礎の大部分はかう云ふ形の置換によつて供給されてゐることは疑ひの餘地がない。第十四と十五とは、吾々の公園や田園を塵やごみ屑で汚さないやうに保護しようとの近頃の運動が如何に困難に直面してゐるかを見れば、思ひ半ばに過ぐるものがある。之等の傾向が肛門性感と如何に深い關係があるかは、殆ど凡ゆる公衆便所に見出される落書を研究する勞を惜まない人々は誰にでも明らかになるに違ひない。第廿五は、一見すると奇異に思はれるかも知れないが、多くの幼兒が人間は肛門から誕生するものだと考へてゐることに起因するので、かう云ふ考へは彼等幼兒が膣の機能を、否、その存在をさへ知つてゐないといふことを思つて見れば、甚だ當然の事となるのである。

　尿道性感、卽ち尿の通過に關係する性感の效果は、只今分つてゐる限りでは肛門の方よりは少く、限られてゐる。併し尿道性感に高度の興味を持つことは、兎に角男性に於ては、野心的な性質と關聯するところがあるらしいことを示す相當の證據がある。それが漸次に轉位（置換）せられて、問題の興味はパイプと水とに、それから水道管業、水力技術、電氣技術（後者は火と水の無意識的同一視による）に專心する樣に導く。併し水は何らかの形に於ては、常にその魅力を持つてゐる。英國の分析學者フリウゲルが自身で研究する機會を持つた所の、並はづれて著しい尿道性感の二つの場合の中、一人は水夫で、他は上手な水泳家であつたと云ふ。

　サディズムとマゾヒズムとは共に、實際の性生活に於てある重要さを持つてゐるのが常態である。少しの程度では、それ等は常態的な愛慾の要素をなしてゐると見做されねばならない。更に、大抵の人々にあつてはそれ等は生涯を通じて力強く作用してゐる。從つて、適當な刺戟を加へれば、それ等は『變態』に近い强さにまで興奮させることも容易である。例へば、拷問その他恐ろしいこと見てゐる人々が殆どみな性的魅惑を感じてゐる如きが、その證據である。この樣な變態が統制を失ふやうになれば、それは勿論極度に危險となり、そして八つ切り事件の樣な殺人狂となつて現れることさへあるのである。それは屢々肛門性感と正しく一致する。そして鞭打の空想を實行させるやうになる。高度のサディズムをさへも十分に昇華するによい機會を提供するらしく見えるある職業が存在する。卽ち、屠牛者や外科醫の職業の如きがそれだ。もつと適度のサディズムは多くの種類の仕

事に利用され得る。けれども普通の程度を超えては何事でも（その個人にとつては滿足でも）社會的には危險な職業が他にある。卽ち判事、行政官、警察官、教師、醫師（外科醫以外の）の職の如きである。本誌二月號に於ける大槻氏の時評『非心理學的な醫師觀』をこゝでも一度讀返して御覽になることを讀者諸氏にお勸めする。

精神分析語彙（十）

一、接吻――幼兒の指しやぶりの成人に於ける名殘の男女相互的顯現である。

一、潛在內容――夢の顯在內容は、夢の潛在內容が夢の仕事に依つて歪められて顯現したものであつて、從つて顯在內容を分析することに依つてその潛在內容を判斷することが出來るやうになる。

一、洗淨强迫症――水を以て洗淨しないではゐられない神經症。

一、戰爭神經症――戰爭に於いて勃發し、歸還すれば平癒する神經症。精しくは本誌第一卷第七號「戰爭神經症とその治療」參照。

一、洗淨――「洗ひ流し」又は「カタルシス」を見よ。

一、前意識――人間の心理を局所的に考へて、意識、前意識、無意識とし、意識界に呼び出さうとすれば、何時にでも呼び出し得る記憶內容の全般を云ふ。

一、躁鬱病――燥狂及び憂鬱病に、交互的に轉變する精神異常を云ふ。

一、躁狂（マニイ）――『自我分析を根據として疑ひ得ないことは、躁狂の病狀に於いて自我と理想我とが互に融合し、冥利及び自己滿足の氣分を、自己批判のために全然擾されないが故に、この人は、克己、他人に對する思ひやりの感情、自責の念などの廢止を、樂むことが出來るのである。』（フロイド「集團心理」）

一、早熟――『兩親の愛撫があまり度を過ごすことは、勿論、有害である。何となれば、それでは子供があまり早熟になり、また荒さみ、後年に於て一時的に愛を放棄し、又は少量の愛で滿足來出ないやうになるからである。子供が兩親に甘へて飽くことを知らないやうであると、それは後年神經症となるべき最も明白な前兆の一つである。』（フロイド「性說三論文」）

一、早發性痴呆症――『本病は一八六〇年モーレル氏 Morel が少壯者に癡呆となるべき精神病多しと云ひ、之に Demence précoce の名を附せしに始まり、一八九六年クレプリン氏が其の意義を變更して其の病名を踏襲したものである。然し本病は少壯者に限らざるを以てウォルフ Wolf 氏は精神不調和症 Lysphrenie の名を提唱し、ブロイレル Bleuler 氏は精神分裂症 Schizophrenie の名を提議した。』（春秋社

版「現代醫學大辭典」）フロイドはこの病氣を『知力喪失症』Paraphrenie と名付けてゐる。この『患者たちは二つの根本的特徴を示してゐる。即ち誇大妄想的であることゝ、外界（人間並びに事物）に對する興味を失つてゐることゝである。』（フロイド「ナルチスムス概論」）

一、相反意義——一語にして强弱、高低などの正反對の意義を有すること。古語に多し。フロイドはこれをアムビファレンツを以て說明す。

一、素質——『吾人は、幼兒時代に受けた印象の意義を强調するものであるが故に、素質上の契機を否定するものであるかの如くに誤解されてゐるが、この機會に於いて、かゝる批難に對して辯明しておきたいと思ふ。さう云ふ批難は人々の因果觀の狹さから來るのである。彼等の因果觀は實現の普通の形態とは正反對に、原因的契機を唯一の事に求めて滿足しようとするのである。精神分析は病源の偶然的要素に關しては多くを語り、素質的要素に關しては少しゝか語らなかつたが、併しそれはたゞ精神分析が前者に就いては何か新しいことを語り得たが、後者に就いてはそれに反し、普通の人々が知つてゐる以上には語り得なかつたからである。』（フロイド「轉嫁の動力性」）

一、退行——心理がその發達の早期の段階に逆轉することを云ふ、老年又は病氣の場合には、その精神は幼兒期に退行する。また『性本能の成分の何れか一つがあまりに强烈であつたり、あまりに早期の滿足の體驗を持つたりすると、その結果として、發達途上の或る個所に於いてリビドーが定着するやうになる。この個所へと、リビドーは、後年に抑壓を受けた場合に、戾るやうになる。さうしてこれ等の個所から病的徵候は吹き出て來るのである。その後の洞察に依つて更に分つたことは、如何なる個所に定着を見るかに依つて、如何なる神經症に罹るかも決定されると云ふことである。』（フロイド「自傳」）

一、對象——『性的魅力を感ぜしめる人物を性的對象と呼び、この本能に驅られて行ふ行爲を性目的と云ふ。』（フロイド「性慾論」）

一、對象選擇——『對象選擇に二期あること、つまり二度對象を追及すると云ふことは、正に典型的であると云ひ得る。第一番目は二歲から五歲の間に始まり、潛在期間中休止してゐる。その性目的が幼兒的であることは、その特徵である。第二番目は思春期と共に始まり、性生活としての一定の形態をとるのである。』『性心理發達上の障碍を愈々深く調べて見れば見るほど、近親姦的對象選擇の意義は益々明白となつて、到底否めなくなるのである。神經病患者に於いては性慾拒否の結果として、對象發見に對する性心理の働きが無意識中に殘つてゐる。』（フロイド「性慾論」）

—（未完）—

探訪

(七) 小峰病院の鈴木雄平博士

市電駒込終點から飛鳥山線に乘繼ぎ、蠶糸學校前で下車すると、線路を隔てゝ學校と斜に相對峙する灰色の大きな建物が小峰病院である。記者がこの病院に鈴木雄平氏を訪れたのは、三月上旬の風の強い日で、病院の硝石戸は風のために押されて自然に開かれるほどであつた。何となく落寞たる氣持になつて、受付にその意を通ずると、二階の應接室に待つてゐてくれとの事で直ちに階上に昇る。

間もなく、鈴木氏はその純白の診察着の姿を現はし、記者を改めて別室の讀書室(?)に案內せられた。色白で眉目秀麗の、如何にもお醫者さんらしい風貌であるが、態度は少しも容態ぶつたやうなところはなく、率直で、寧ろ謙譲なほどである。診察着の下の洋服のチョッキにはやゝ太目の金ぐさりがからみついてゐるが、その邊のボタンが一つ二つはづれてゐるのも、如何にもこの人らしい。一分のスキもなく身構へをすると云ふやうなキザなところは少しもない人である。が、その代り鬪志や覇氣は多くない人に見受けられた。

×

小峰病院は普通の病院で、その背後にある王子病院が精神病院であるが、兩者は二身同體の關係にある。精神病院でやゝ經過良好の患者はこちらに移して、その後の治療をすることが出來るし、こちらに這入つてゐて精神病的經過が強くなれば王子病院に移すことが出來ると云ふ仕組みになつてゐて、病院のためにも患者のためにも種々の點で好都合であるらしい。病院への入口で奧の方の別の門柱に見た『王子病院』の木札は、記者に中村星湖氏の小說『少年行』の主人公を聯想させた。この主人公はこゝに入院したことになつてゐたからだ。

×

鈴木氏は大正九年に東北帝大精神科を卒業した人で、丸井氏の門下であり、古澤氏の先輩である。卒業後數年を丸山教室に殘つて研究し、大正十三年上京してこの病院に勤務して今日に至つた。その當時は東京でも精神分析學を云々する人が比較的少く、氏は時々あちこちから依賴されて講演などを試みたこともあると云ふ。わが國、殊に東京に於いては斯學弘通の上での先輩の一人である。

×

氏が博士號を得られたのは病理組織學上の研究に依つてゞあつて、腦神經細胞と他の細胞、殊に肝臟のそれとの關係を主題としたものであつた。

×

『患者を分析せられて何か面白い御經驗はありませんか』と尋ねたが、氏は『普通の病院では分析治療を施すことはなか／＼困難です。今時の患者はせわしくて、一寸來て注射でもして貰つて直ぐに治つて歸つて行くと云ふやうな對症療法的なことばかり考へてゐて、ゆつくり病源に遡つて根本治療をすると云ふやうなことはやらせてくれないので、困ります。かう云ふ患者は分析を施せばいゝのだがなアと思ふやうなのは隨分澤山にあるが、遺憾ながらその機會が多くない。併し自分は醫者として良心の滿足を得るためには、是非分析治療を施さねばうそだと考へてゐます。』と答へられた。私はさう云ふ時の氏の眞劍な顔付に深い敬意を覺えた。さうして世の人々の無理解をひそかに嘆いた。

×

辭去するに際し、『近影を一つ拜借したい』と頼んだが、『寫眞と云ふものは寫すと面白いと思ふが、とんと撮つたことがないので……』と、——かう云ふ言葉は、云ひ手によつては時々隨分氣障に聞えるが、氏の場合には全くその反對に——如何にも卒直に、無邪氣に、云はれる。記者は愈々、この非ナルチスティッシュな人格に好意を持つた。院內を見せて貰ひたかつたが、多忙らしく見えたから遠慮して退去した。氏は記者を玄關まで慇懃に見送つて來られた。

ヘルマンヘッセの事

本號所載ヘルマン・ヘッセの論文を見て、彼の精神分析への理解の深く正しいのに驚いた。彼は印度思想に興味を持つてゐる文豪で、從つてニイチエやショーペンハウエルにも同感を持つてゐる。さうして必然的に精神分析學への共鳴を持つやうになつてゐるのは、甚だ自然である。『作品』四月號にヘッセに關する三井光彌氏の文が載つてゐるから、その一節を一寸借用させて貰ふ。

『ヘルマン・ヘッセは今日獨逸でも日本でも決して「流行る」作家では無い。世界大戰の勃發當時非戰論を唱へて排擊せられ、瑞西の山奧に逃げ込んで、今でもモンタニオラの山奧に閑居してゐるからナチスに追ひ出される心配は無いが、本國に歸つても到底今のナチス獨逸に歡迎されるやうな作品の書ける人では無い。我が日本では彼の有名な印度小說「シッダールタ」の拙譯が出てから昨秋又拙譯の「內面への道」「シッダールタ」他二篇が出るまで、ざつと十年もの間、彼の飜譯が出なかつた。（中略）彼は今眼病を患つて弱つてゐるさうだ。』云々。

內外彙報

獨逸「國際雜誌」第十九卷第四册

一、『パルキンスン式の身體態度』（S・E・ジェリフ、ニウヨーク）――身體を動かすことの意義が漸次に理解されやうになつて、神經學は靜的な見地から動的な見地に進むやうになりつゝあるとて、無意識の憎惡が如何に身體の態度に影響するかを研究した論文。

一、『同性愛心理論』（F・ベーム、ルベリン）既に同誌の過去に同じ題目に就いて三篇の論文を揭げてゐる筆者が第四篇目の論文。男性同性愛の二つの型を論じてゐる。

一、『バゼドー精神症の心理過程』（テレーゼ・ベネデク、ライプチヒ）――躁鬱病とバゼドー精神症との關係を研究した論文。

一、『嘘の心理』（A・キイルホルツ、ケーニヒスフェルデン）――妄想的な嘘の問題に就いての論。實例に面白きもの多し。

一、『男のマナ・コムプレクス』（E・ベルグラー及びL・アイデルベルグ共稿、ギイン）――男性の口唇段階に於いて、女性の乳房に對する種々のコムプレクスを持つに至るその心理を研究せるもの。

一、『ヒステリー發作に就いて』（M・ウルフ、テル・アギブ）――その動作の意味、反覆の傾向、知覺、その他に就いての研究。

一、その他、雜報多數。『東北帝大精神分析業報』第一輯の內容紹介もしてある。

米國詩人の分析自傳

米國詩人フロイド・デル Floyd Dell は既にわが國にも作品の飜譯その他により屢々紹介せられ、この名は若い人々の間に親しい名となつてゐるが、彼は一九三二年『精神分析季刊』第一册誌上に於いて『自傳的批評』なる一文を寄せてゐる。彼がこの文を書くに至つた動機はオットー・ランクが幼兒期性經驗と詩人活動との無關係を論じた書を讀んでその說の自分に妥當せぬことを感じたゝめであつて、この書は自傳と云ふよりは、寧ろ自己分析と云つた方が適切である。即ち、彼が如何なる動機に依つて詩人としての活動をなすやうになつたかを、分析的に自己觀察した結果の告白である。フロイド・デルの自傳に依れば、彼が創作活動をなすに至つた動機はかうだ。自分のエディポス・コプムレクスとそれと對立的に生ずる不安との間に釀される葛藤から罪障感を覺え、その罪障感のために內向的となる、その內向を免れるための最好適な手段が彼の場合の創作活動であつたのだ。

ヒッチマン博士の新著

ギイン精神分析移動診療所長エドゥアルト・ヒッチマン及びその助手エドムンド・ベルグラー兩氏は『婦人の冷感症』に關する新著を最近公にした。婦人性感の發達。婦人性生活の特徵。冷感症の語義、症候、程度。冷感症の特殊形態及び病歷の特徵。冷感症患者二例の治療經過報告。冷感症の處置……などの諸章から成立つてゐる。

最近國內事實

★『カラクテール考』（アンドレ・ジイド）河合亨氏譯。『佛蘭西文藝』（二月號神田神保町、金星堂發行）

★『戰爭批判』（アインシタイン、フロイド、ショウ）神田駿河臺同人社發行――本誌昨年十一月號所載のものと、ショウを除き、同書なるべし。

★『戀愛心理考』遠江二郎氏稿。『女性評論』二月號（澁谷代々木上原一三三三、同社）

★『初戀以後の初戀』大槻憲二氏稿。『人生創造』四月號（千葉市、同社）

★『戀愛問題座談會』。『人生創造』四月號。大槻憲二氏分析者として出席。

★『ヰルヤム・モリスの涅槃思想』同氏稿。（早稻田學園『稻英』三月號。）

★『精神分析と子供の取扱方』長谷川誠也氏稿。（『子供の敎養』三月號。』

★本誌前號內容に關しては、卷末廣告參照。

本研究所研究會三月例會

十六日（金）夜、例に依り、萬世橋アメリカン・ベーカリ階上に開く。本夕は新出席者として、麻布笄小學校訓導小杉長平氏と、東洋大學出身、元藤倉學園（大島元村）敎師、辻修氏とが見えた。で、まづ、小杉氏は精神分析學に興味を持つに至つた經路としてそのフロイド全集其の他の諸書の閱讀の經驗を語られ、次に辻氏は藤倉學園に於いて、低能兒敎育に從事した間の種々の經驗を仔細に物語られた。低能兒の體臭的特徵、その日常の一般的な癖などを細かく語られ、一同非常に興味深く傾聽した。

次に、長谷川誠也氏は內山勇二郎中佐著すところの『戰爭心理學』（昭和二年發行？）の讀後感を語り、その中の種々の興味ある實例を紹介せられた。殊に『決死隊』と云ふ語は兵卒を鼓舞するが、同じ內容の概念を表はすべき筈の『選拔隊』と云ふ語では、兵士を鼓舞するに足らず、從つて志願者が少いと云ふが如きは、甚だインストラクチヴな事實でなければならない。

第四番目に、高橋鐵氏は『噓の心理』に就いて、四月フール

の話から、笑話、小話に至るまで東西古今の幾多の實例を擧げて、甚だ才氣豊かな研究談を試みられた。

第五に大槻憲二氏は、高橋氏の擧げた實例の一つを契機として無意識論理と意識論理との區別に就いて、組織的に所感を語られ、民俗學の研究方法にも言及せられた。

出席者は右言及諸家の他に、小林五郎、野村吉司、長崎文治、小松德、大槻岐美、岩倉具榮の諸氏であつた。誠にしんみりとして、內容充實した一夕であつた。田內長太郎氏、奥村博史氏、及び霜田靜志氏等から已むなく缺席との挨拶があつた。

本研究所公開講習會

豫報の如く本研究所の公開講習會は、阿佐ヶ谷小山、組合會館に於いて、本月各日曜に催された。時あだかも各學校の卒業入學の繁忙期に相當し、敎育關係者を聽衆に豫想したこの會の目的としては、いさゝか不首尾であつたが、來聽者は少數ながら何れも熱心に傾聽せられ、若い講習生諸君のノートをとる眞劍な姿に、講義を終つて退出する講師を追蒐けて質問する家庭夫人の知識慾に、講師諸氏は感激した次第であつた。

日次、及び講習題目を次に報告しておく。

第一日（三月四日）——

一、精神分析とは何か……長谷川誠也氏

二、子供の心理……大槻憲二氏

三、精神病治療と患者取扱法……諸岡　存氏

第二日（三月十一日）——

四、精神分析と敎育……長崎文治氏

五、女性の敎育的取扱方……宮田　修氏

六、兒童敎育と母親敎育……高崎能樹氏

第三日（三月十八日）——

七、アードラー説と敎育……田內長太郎氏

八、青年期戀愛心理……大槻憲二氏

九、藝術敎育と人間敎育……霜田靜志氏

第四日（三月二十四日）——

（本稿執筆現在に於いては將來のことであるが、左の如き順序の筈である。）

十、精神分析發達史……岩倉具榮氏

十一、安達原傳說の分析談……長谷川誠也氏

十二、精神分析と精神修養……古澤平作氏

研究所當事者として記者は、講師諸氏及び講習會員諸氏の本講習會への翼讃を、玆に深く感謝しておく。

相談

店員去つて病む主婦

問――私は或小店主の妻で、當年四十七歳の女でございます。家族としては私達夫婦に娘一人店員三人でございます。十年前から當時十五歳の男子を店員として使つて居りましたが、此者は誠に心掛のよろしい者で、行く〳〵は娘の婿にと樂みにして居りました。處が二ヶ月前に其店員を養子にほしいと申す人があり、周圍の者が皆贊成でしたので、當人は私の心を知らない事もなかつたのですが、其方へ行つてしまひました。

今となつては諦めるより外に道はないのですが、手中の珠をとられたやうでどうしても諦めきれないのでございます。其爲に日に增してやつれて目方も減る一方でございまして、時には自然に忘れられると慰めてくれますが、私のは日に增しひどくなつて行くやうです。どうしたら私の心から此事を取去る事が出來るでせうか。(佐野町、ぬい)

答――記者はかつて貴女と全く同じやうな境遇と、同じような病狀にある患者に接したことがありますが、その家族の人が精神分析に對する理解を持たなかつたゝめに中斷して了つて、今でも非常に殘念に思つてゐます。その人の場合(この場合とても徹底的に分析するまでに至らなかつたが)を參考にして貴女の場合を診斷して見ると、貴女には男兒がないと云ふことが非常に大きな神經症的不安になつてゐるのであらうと思はれます。男兒のないことの不安は、精神分析の術語を用ゐて云へば去勢不安であるが、その去勢不安が大きいのであらうと思ひます。併しこんなことを分析者でなく被分析者である貴女に申上げたつて始まらない話ですが、紙上相談ではかう云つてたゞ、『說明』するより外に途はありませんからね。それがいやなら分析を受けるのです。

要するに貴女は幼兒時代からの去勢不安が强かつた。そこへ男の兒が出來れば、その不安は非常に醫せられたであらうが、生れたのが娘であつたので、この不安は少しも醫せられなかつた。やうやく自分の店員の中からこれと思ふ青年に目星をつけて、これを婿にと思ふことに依り、貴女の去勢不安は貴女一人では大いに醫せられてゐたのだが、それは貴女一人の思惑で、當人はそんな事はあまり頓着しなかつたのでせう。『手中の珠をとられたやうで』と云ふ文句の中に、この去勢不安が出てゐると思はれます。

やはり分析を受けて、この根深い幼兒的不安症をとり去るより外に途はなからうと思ひます。

質疑應答

馬鹿・卽・盲目の問題

問――本誌前號『研究會餘談』欄に、馬鹿は常に盲目の形に於いて象徵せられると云ふ說がありましたが、馬鹿に二通りの

意味があると思ひます。『俺は馬鹿だづた』（Ａ）と云ふやうな場合は、それが解らなかつたので不明と云ふことになるが、『誰々は馬鹿だ』（Ｂ）と云ふ場合は、低能を意味する。明き盲目は文字が見えないので、低能の事ではない。低能者を少し足りないと云ふが、盲人は目が足りないのではない。故にＡの場合にのみ、馬鹿は盲目と云ふ形で象徴せられると云ふべきではないでせうか。（北海道、浪越生）

答――明き盲目や文盲は文字が見えないので、低能の事ではないと貴君は云はれる。その通りです。一體に低能の事を盲目で代表させ、その內文字の知識なきものを殊に「文盲」と限定したのでせう。これは意識的見地の混入を意味してゐます。その他いろ／＼細かくお考へになつた點は殊勝の事に存じますが併し何れもそれ等は意識的見地からの考へ方で、無意識的見地の考へ方には緣のない事です。意識的見地からすれば、先天的低能と後天的な無教育（文盲）とは全然別物であるが、併し無意識的見地からはそんな細かい區別は立ちません。一體に、能力の低いことを總括して『盲目』の形に於いて象徴してゐるのが事實であります。

『不明』の反對の『賢明』、『聰明』の場合を考へて御覽になると一層判然して來ます。耳さときを『聰』と云ひ、目さときを『明』と云ふのですが、意識的に云へば、目のいゝものだつて頭の惡いものがゐますし、耳のよく聞えるものにも馬鹿はゐます。併し耳と目とのよく利くことに依つてその人の頭のいゝことを象徴的に表現してゐるのは、無意識論理の常套的方法であります。

序に云へば、目と耳とは受働的、又は認識的能力を象徴し、口と手とは表現的又は能動的能力を象徴してゐます。『口八丁手八丁』と言ふやうな言葉があるし、佛菩薩の多藝多能を示すに、澤山の手（千手觀音の如き）を具へてゐる像として表現されてゐる如き、その例の一二であります。また佛に三つ目のものがあるのは、これその頭のいゝことを象徴的に表現してゐるのですが、一方また惡魔の方にも三つ目小僧のあるのは、面白いことです。これまた精神分析での所謂アムビファレンツの一例であらうと思ひますが、一方佛像に於いて多眼を以てその賢明を象徴させてゐるほど賢明を尊敬してをりながら、他方では馬鹿と盲人とを尊敬すると云ふことも、これまたアムビファレンツとして興味のあることです。併し馬鹿・卽・盲人への崇拜の心理過程はもつと複雑ですから、また他日を期してその研究を試みるでありませう。今日はたゞ馬鹿・卽・盲人の意味が無意識論理的ではあるが、その日常語として使用せられる場合には、多少の意識的要素が混入すると云ふことだけを明かにするに止めておきませう。

（大槻生）

編輯後記

本號を以て本誌は愈々滿一ケ年の誌齡に達しました。それを記念する意味に於いて、本號には再び創刊以來の總目錄を附錄して見ました。越し方を顧み、その内容を大觀してまた一つの壯觀であると感ずることは、必ずしも編輯子の一人よがりとのみは云へますまい。わが國に於ける斯學の分野にこれだけの文獻を寄與することは、政府や財團からは何等の援助を仰がぬ一私設團體の事業としては、並々ならぬ努力と信念と犧牲との結果であることを思へば、凡そ學藝に志す程の人々ならば、斯學に賛成すると否とを問はず、多少の關心を拂つてもよからうと思ひます。

併し分析者は、他人の好意は辭さないが、他人をアテにすることを恥づるものです。ただ獨立獨行、我等の信念を以て貫かむのみです。

×

本號も、十分に自信を以て讀者諸氏にお薦めすることの出來る内容を具へ得たことを、我等は誇るものであります。殊にドイツに於ける二人の世界的文豪が精神分析への正しい理解と、公平なる賛辭とを、讀者に飜譯紹介するの機會を持ち得たことは、我々の非常な喜びであります。わが國の文藝界の人々も、彼等の言葉に依つて敎へられるところが多からうと思ひます。

×

例に依り、新執筆者諸氏を御紹介申上げます。

北村常夫氏は六高を經て東大英文科卒業、同大學院卒業の新進英文學者。現在東大英文科研究室の副手を勤め、また高千穗高等商業學校敎授の職にある。譯書としては『エリオツト文學論』(金星堂)『完全なる批評家』(研究社)、『新異敎主義』(同)、『シットウェル詩抄、田園喜劇』(ボン書店)などがあり、自著詩集としては『死の船』がある。

平塚義角氏は早大ドイツ文科最近の卒業生で、目下早大演劇博物館に勤務してゐられる。嘗てクライストの『破れ壺』の研究を『藝術殿』誌上に發表した。

大﨑黃村氏は大槻氏の中學時代の舊師で、目下鄕里和歌山市に老後を養ひつゝマコーリの研究に沒頭してゐられる篤學者であります。

×

本誌讀者諸氏はなるべく本誌特別誌友(その義務は直接購讀者となられることのみ)となつて、本誌と聯絡をとり、なるべくその研究又は感想を、盛んに御寄稿あらむことを希望いたします。次に新關係者諸氏を御紹介いたします。

麴町隼町二ノ一……藤井和子氏
京都中京區東洞院……津田九郎氏
目黑區上目黑八ノ六二七
……芝川又太郎氏
北海道小樽市入舟町…井上千秋氏

×

每號本誌にその岩倉氏譯を連載してゐるマンスフィールドの寫眞を、やうやくこの『文學研究號』卷頭に飾ることの出

來たのは、我々の大きな喜びである。每號その纖細鋭敏な作風に親んで來られた讀者諸氏にとつて、その作者の風貌に接することは、大いに興味あることでなければならない。その大きな瞳は、如何にも自他の心理に分析的な洞察の刀をつきつけてゐると云つたやうな、緊張した感じである。

本號の『逃亡』は、愛し合つてゐる夫婦間の時々の女らしい氣持のもつれを描いたものとして、またなか〳〵面白いところがある。

×

先號にも書いた通り、春陽堂發行の書にして本誌上に廣告掲載の諸書は、本研究所に御申込の方に限り一割引いたします。なるべくこの特典を御利用あらむことを願ひます。

×

本誌特別誌友堀濱吉雄氏は函館大火に羅災せられたらしい。早速見舞狀を出したが、同情に堪えず。

昭和九年三月二十五日印刷
昭和九年四月一日發行　第二卷第四號

定價五十錢（郵稅一錢）

編輯及發行　東京市本鄕區駒込動坂町三二七　大槻憲二

印刷所　東京市牛込區改代町廿四　理想社印刷所

定價一部　五拾錢（郵稅一錢）
半年分　參圓（送料共）
一年分　六圓（送料共）

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。

●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。

●郵券代用の場合は一割增に願ひます。

●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本鄕區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所　振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂　大東館・北隆館

來月號豫告

ドストイエフスキー研究號

（又は人間性研究號）

本號ヘルマン・ヘッセの論中にもある通り、ドストイエフスキーこそは、最も分析的な作家であると共に、最も分析對象として興味深い作家であります。現今のドストイエフスキー研究流行の世界的風潮は、元々精神分析の研究に示唆されて生じたもので、アンドレー・ジイドを始め、その他の作家の論はみな分析學の研究に暗示を受けてゐることを、はつきりわが國文壇の人々は知つてもらひたい。我々のド氏研究は單なる一作家の研究に留まるものではない。最も代表的な人類の一人としてド氏をとらへ、人間性一般の研究に資せんとするものである。

ドストイエフスキーと父殺し（フロイド）……大槻憲二譯
アードラーのド氏研究……長谷川誠也
ノイフエルドのド氏研究……平塚義角譯
フロイドのド氏分析について（ライク）……岩倉具榮譯
キルヤム・モリス「地上樂園」の研究（終稿）……大槻憲二
近代的人間の精神問題（終稿）……武田忠哉
ウルフの『フラッシュ』について……安藤一郎

「精神分析」第一卷總目錄

昭和八年五月　第一號（創刊號）

同 七月 第三號（教育研究號）

同 八月 第四號 （第一・夢の研究號）

同　十二月　第八號　（第二・夢の研究號）

――「精神分析」第一卷總目錄終――

精神分析

定價五十錢
郵稅一錢

昭和九年　心理療法研究號　新年號

精神病治療可能論（精神病を不治としてゐた從來の精神病學者等に對する一大痛棒）……諸岡存

精神分析治療に關する二三の自解……古澤平作

不安神經症とその治療……早坂長一郎

聯想解放法と抵抗緩和法……大槻憲二

心理療法發達史上のフロイドの意義（リヴズ）……岩倉具榮譯

時評
- 一、柳田國男氏の餅の説
- 一、裁判心理學
- 一、「源氏物語」の劇化
- 一、精神的兒童虐待防止
- 一、諸岡博士の自己保存本能説
- 一、猪俣津南雄氏の戰爭論
- 一、坪内博士のシャイロク論

……大槻憲二

グラディーヴ（フロイドの分析により世界的に有名な小説）……田内長太郎譯

ステーケルの發狂不安の分析治療例……伊東豊夫譯

泥棒心理の分析（一切盜賊は主觀的義賊なりとの説）……大槻憲二

心理療法文獻多數紹介……高水力太郎

ベルリン精神分析學研究所の分析治療率表……

その他、「講座」、「語彙表」、「探訪」、「内外彙報」、「アプフウブ欄」など記事多數。（口繪、アイティンゴン博士とその分析診療室）

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替口座東京七八八一七番

月刊雜誌
定價五十錢
送料ナシ

精神分析

半年　二圓九十錢
一年　五圓八十錢
送料ナシ

昭和九年三月　傳說研究號　第二卷第三號

公開講習會案內（三月中各日曜、但し最終日は土曜、午後一時――四時阿佐ケ谷公會堂にて、會費一圓二十錢）

東京精神分析學研究所出版部
本鄉區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

(合本)「精神分析」製本出來！

第一卷・上（五月創刊號から八月號まで）

第一卷・下（九月號から十二月號まで）

（一年十二部を三册に分ち四部を以て一册とす。）

總布装美本　各册（二圓五十錢 送料ナシ）

單册は――携帶に、書入れに、素讀に……

合本は――書齋に、精讀に、保存に……

總目錄は毎卷最終册尾に附けます。

バツクナンバー單册も多少あり。（創刊號六十錢、その他各五十錢）

長谷川誠也著

文藝と心理分析

定價二圓七十錢　送料十六錢

本書の四大特色

一、精神分析各派を綜覈的に研究せること、
一、英文學界に於ける斯學影響の研究に詳しきこと、
一、文明批評的見地をとれること、
一、參考資料に精しきこと、

主要目次

一、心理分析の文學
二、文明に對するアムビバレント心理
三、内省と自我
四、リビドオ說と心理タイプ
五、無意識の意義
六、フロイドの無意識說
七、アドラーの優越慾說
八、ユングの集合無意識說
九、夢と象徵
十、白日夢と文藝
十一、心理的タイプと美學說
十二、溯源的研究の危路……（その他）

日本橋區通三丁目八　振替東京一六一七番　春陽堂

大槻憲二著

精神分析概論

定價三十錢　送料四錢

本書の四大特色

一、斯學の組織的知識を與へること
二、具體的例を入れ興味的に說ける事
三、簡明にして要を得やすいこと
四、現代日本人が讀者たるを忘れぬ事

第一章　精神分析とは何か　（1）無意識の發見、（2）夢の解釋、（3）無意識と精神症、神經症

第二章　精神分析の機能　（1）病氣の治療と記述、（2）各種の理論、（3）理論の應用

第三章　超心理學としての精神分析學　（1）動的見地、（2）局所的見地、（3）經濟的見地

第四章　精神分析の發達　（1）シャルコー及びジャネー、（2）フロイドの史的地位及び特徵、（3）ユング、アードラー、その他、（4）國際學會と研究機關

第五章　精神分析研究手引　（1）我が國に於ける研究史及び文獻、（2）術語表解

本研究所出版部・取次　振替東京口座七八八一七番、郵券割增無用

藝術殿

坪内逍遙博士會號執筆

四月號（第四巻第四號）

要目

一部　定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯　財團法人　國劇向上會　東京市淀橋區戸塚一丁目　振替（東京二〇二九〇番）

發行　梓（あづさ）書房　東京市神田區駿河臺一ノ八　振替（東京七八六四四番）

精神分析學診療所

診療科目

諸種疾病ノ診斷及治療
性格素質ノ審査及矯正
精神衛生ノ相談及指導

診療ハ特ニ
神經衰弱、ヒポコンデリー、不安性神經症、性障礙、ヒステリー、
强迫觀念症、恐怖症、不眠症、心臟神經症、憂鬱症、偏執病、
輕度早發性癡呆症、性格異常等。

醫學博士　古澤平作

東京市世田谷區東玉川町三五八七
田園調布驛東口下車
電話田園調布一〇三二番

診察時間

午前七時——正午（主トシテ外來）
午後一時——五時（主トシテ往診）
但シ日曜ハ午前中、祭日ハ休業

昭和八年七月七日 第三種郵便物認可
昭和九年三月廿五日印刷納本
昭和九年四月一日發行
毎月一回一日發行

精神分析

四月號

定價金五十錢 郵稅一錢

II. Jahrgang, Heft 4, April, 1934. Erscheint monatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für Dichtungsstudien)

Mit 2 Kunstbeilagen:

1. Katherine Mansfield
2. „Aizen, oder Raga," Gemälde von Ryushi Kawabata

Inhalt

Preis des Einzelheftes 50 Sen.

Tokio Psychoanalytischer Verlag,
327, Dozakacho, Hongo-ku, Tokio Japan.